伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

バーガ森北斜面遺跡Ⅱ

－伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

２００１・２

高知県伊野町教育委員会

バーガ森北斜面遺跡Ⅱ

－伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

2001・2

高知県伊野町教育委員会

遺跡遠景

ST－1

出土遺物　弥生土器（壷）

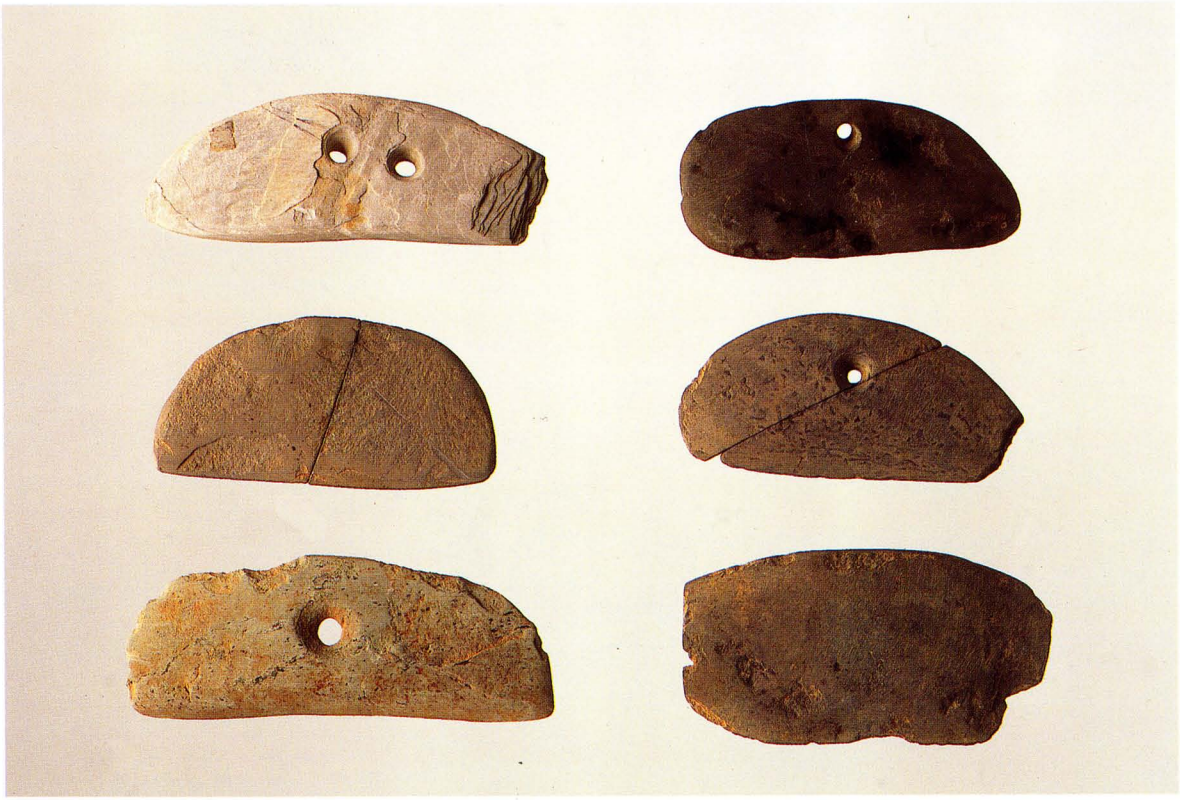
出土遺物　弥生土器（壷）

出土遺物　弥生土器（壷）

出土遺物　弥生土器（高杯）

出土遺物　弥生土器（壷）

出土遺物　石鏃



出土遺物　石包丁

序

紙の町として知られる伊野町には，紙の歴史もさることながら，古墳群や城跡などの重要な遺跡が数多く所在しています。なかでもバーガ森北斜面遺跡は伊野町の代表すべき遺跡であり，昭和49年度，51年度の学術調査の際には，現在，町指定文化財として保存されている竪穴住居址や多くの弥生土器が出土しました。

今回の調査は，平成11年度に行った伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う第2次発掘調査であり，弥生時代中期後半の遺物や竪穴住居址，段状遺構などを確認しております。これらの遺構につきましては，残念ながら工事により消滅することになりましたが，報告書の刊行という形で記録を保存し，伊野町の歴史の解明に資することができました。

本書の刊行によって，住民の方々の埋蔵文化財に対するご理解と関心が一層高まりますことを願うとともに，今後における教育・研究活動など，文化財保護の一助となることを期待するものであります。

最後になりましたが，長期にわたりご指導いただいた高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員伊藤強氏をはじめ同センターの皆様，寒風吹きすさぶ中，作業に従事してくださった現場作業員の皆様，ご協力くださった地域住民の方々や関係者の皆様，そして文化財へのご理解とご支援をいただいた高知県中央耕地事務所の方々に心より深く感謝申し上げます。

平成13年2月

伊野町教育委員会

教育長　濱田　啓

例言

1．本書は，伊野町が高知県の委託を受け，平成11年度に実施したバーガ森北斜面遺跡第２次発掘調査の調査報告書である。

2．発掘調査は，高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもとに伊野町教育委員会が調査主体となり実施した。

3．調査体制

調査員	伊藤　強	高知県文化財団埋蔵文化財センター	主任調査員
	福井　清子	伊野町教育委員会	平成11年度嘱託職員
庶務	増田　麻利	伊野町教育委員会	社会教育主事

4　D本書の執筆，編集は伊藤強が行った。現場写真は必要に応じて調査員が撮影し，遺物写真は埋蔵文化財センター第4班長廣田佳久氏にお願いした。

5．本書に用いた遺構の記号は以下の通りである。
ST（竪穴住居址），SK（土坑），SA（柵列），P（ピット）

6．遺物については次の縮尺で実測図を掲載した。
弥生土器1/4　石鏃，石包丁，石斧1/2　その他の石製品1/3
なお出土遺物は整理作業の後，伊野町教育委員会で保管している。

7．調査に当たっては，関係各位及び，地元住民の方々にご理解，ご協力をいただいた。また，現場作業，整理作業では下記の方々に従事していただいた。記して敬意を表したい。
（測量補助員）仙頭　洋子　　吉本　善子
（現場作業員）隅田章　高野晴男　尾崎久子　中平清　中平英子　鈴木省助　井澤俊一
隅田昌克　新井眞次　塔岡徹郎　佃厚一郎　岡林大輔　村松広海　蒲野隆正
武藤拓美　大谷力　白木正己　安岡浩二　高山良太　山本隆志　滝澤宏樹
下楠真吾　大川内真由美　小池秀典　山崎正太郎　安藤匡彦
（整理作業員）原真由美

8．整理作業，編集作業においては，埋蔵文化財センター土佐市発掘調査事務所の技術補助員，整理作業員の方々のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

本文目次

第Ⅰ章　調査の契機と経過
1．契機と経過 …… 1
2．日誌抄 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の概略及び，地理的歴史的環境
1．遺跡の概略 …… 5
2．地理的環境 …… 6
3．歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要
1．調査の方法 …… 9
2．第Ⅰ区の調査 …… 11
(1)層序 …… 11
(2)A区の調査 …… 14
(3)B区の調査 …… 23
(4)C区の調査 …… 27
(5)D区の調査 …… 31
(6)E区の調査 …… 38
(7)F区の調査 …… 40
3．第Ⅱ区の調査 …… 40

第Ⅳ章　まとめ
1．遺物について …… 41
2．遺構について …… 43

挿図目次

Fig.1　伊野町位置図 …… 1
Fig.2　遺跡周辺図 …… 5
Fig.3　周辺の遺跡分布図 …… 8
Fig.4　調査区位置図 …… 9
Fig.5　調査区設定図 …… 10
Fig.6　断面図作成地点と東壁（A～B区）セクション図 …… 11
Fig.7　調査区上段南壁セクション図 …… 12
Fig.8　調査区下段北壁セクション図 …… 13
Fig.9　A区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 15
Fig.10　A区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 16
Fig.11　ST－1 …… 18
Fig.12　ST－1埋土2出土遺物実測図 …… 18
Fig.13　ST－1埋土5出土遺物実測図 …… 19
Fig.14　SK－1 …… 20
Fig.15　SK－1埋土1出土遺物実測図 …… 22
Fig.16　SK－1埋土2出土遺物実測図 …… 23
Fig.17　B区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 24
Fig.18　B区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 25
Fig.19　SK－2 …… 26
Fig.20　SK－2出土遺物実測図 …… 27
Fig.21　段状遺構1 …… 28
Fig.22　C区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 29
Fig.23　C区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 30
Fig.24　段状遺構2 …… 32
Fig.25　D区第Ⅰ層出土遺物実測図 …… 33
Fig.26　D区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 34
Fig.27　D区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 35
Fig.28　SK－3出土遺物実測図 …… 36
Fig.29　SK－3・4 …… 37
Fig.30　SK－4出土遺物実測図 …… 37
Fig.31　段状遺構3 …… 38
Fig.32　E区第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 39
Fig.33　調査第Ⅱ区 …… 40
Fig.34　壷形態分類図 …… 41

図版目次

巻頭図版　1　遺跡遠景
ST－1
巻頭図版　2　出土遺物　弥生土器（壷）
出土遺物　弥生土器（壷）
巻頭図版　3　出土遺物　弥生土器（壷）
出土遺物　弥生土器（高杯）
出土遺物　弥生土器（壷）
巻頭図版　4　出土遺物　石鏃
出土遺物　石包丁

PL.1　遺跡遠景（東より）
菖蒲谷（北より）
PL.2　A区より仁淀川方面を望む（東より）
A区より枝川方面を望む（西より）
PL.3　ST－1炭化物検出状態（南より）
ST－1完掘状態（南より）
PL.4　B区完掘状態（西より）
C区（段状遺構1）完掘状態（南より）
PL.5　D区（段状遺構2）完掘状態（南東より）
E区（段状遺構3）完掘状態（南より）
PL.6　完掘状態（航空撮影：北西より）
完掘状態（航空撮影：北より）
PL.7　遠景，A区調査前風景（西より），ST－1炭化物検出状態（南より），ST－1炭化物検出状態（南より），ST－1ベット状遺構検出状態（北東より），SK－1完掘状態（東より），ST－1完掘状態（東より），A区南バンク南壁
PL.8　A区完掘状態（西より），B区完掘状態（南より），TR－1完掘状態（南より），TR－3完掘状態（北より），C区ピット検出状態（南より），SA－1完掘状態（南東より），C区完掘状態（南より），C区南壁セクション（北より）
PL.9　D区ピット検出状態（南より），D区完掘状態（南西より），TR－5北壁セクション（南より），TR－5完掘状態（西より），F区北壁セクション（南より），F区南壁セクション（北より），TR－6完掘状態（南より），G区完掘状態（東より）
PL.10　A区第Ⅲ層石包丁（16）出土状態，A区第Ⅲ層弥生土器（11）出土状態，B区第Ⅲ層石包丁（66）出土状態，B区SK－2弥生土器（69・70）出土状態，C区第Ⅲ層弥生土器（75）出土状態，D区第Ⅲ層弥生土器・叩石出土状態，D区SK－3弥生土器（115）出土状態，E区第Ⅲ層石鏃（125）出土状態
PL.11　石鏃
石包丁
PL.12　石斧
砥石
PL.13　弥生土器（壷・高杯）
PL.14　弥生土器（壷・高杯）
PL.15　弥生土器（壷・高杯）
PL.16　弥生土器（壷・高杯・鉢）
PL.17　弥生土器（壷）・石製品
PL.18　弥生土器（壷）
PL.19　弥生土器（壷）・石斧
PL.20　石包丁
PL.21　調査に携わった方々
現場作業風景

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 契機と経過

バーガ森北斜面遺跡第2次発掘調査は伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う緊急発掘調査として，平成9年度実施した第1次発掘調査に引き続き，平成11年度に実施した。

伊野町南地区は，町内でも屈指の優良農地を擁し，野菜，果樹を中心とした複合経営を中心に，熱心な農業経営が展開されている。しかしながら，地区内の道路は主として東西に発達し，南北道路は未整備のままである。これが地域農業発展を阻害する大きな要因となっている。このため幹線農道を整備することにより，農産物の輸送の合理化を図り，農業経営の近代化と農業活動の選択的拡大を図るとともに，地域の発展に資するものとして当事業を行うこととなった。

当該工事区域内には，昭和32年に本遺跡が発見されており，工事により影響を受ける部分について，平成4年度より試掘調査が開始され，平成4年度，同8年度の試掘調査の結果に基づき，平成9年度に第1次発掘調査が行われた。今回の第2次発掘調査については平成9年10月2日～同10月15日，平成10年11月13日～同12月15日に実施した試掘調査の結果に基づき，遺構・遺物の確認された竹崎橋南約200mの地点約1,900㎡と，その100mほど奥に当たる約100㎡を調査対象区として行った。

本調査は伊野町が高知県（中央耕地事務所）の委託を受け，伊野町教育委員会が主体として，高知県教育委員会，及び（財）高知県埋蔵文化財センターの指導のもとに実施した。調査面積は758.4㎡，調査期間は平成11年10月14日より平成12年1月31日までであった。

なお，今回の第2次発掘調査によって伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う緊急発掘調査はすべて終了する。

Fig.1　伊野町位置図

2. 日誌抄

*****1999年10月12日～2000年1月31日*****

10.12 調査前の遺跡遠景写真を撮影する。

10.14 本日より現場作業を開始する。伊野小学校に集合し，発掘道具を現場に搬入する。現場周辺で調査前風景を撮影する。

10.15 調査区を各平端部ごとにA～F区として，A区より調査を始める。昨年度の試掘で掘削したトレンチを再度掘削する。壁面を精査し層序を確認する。弥生土器数点出土。

10.18 A区表土を除去する。すべて人力作業であるため，表土の除去にかなりの時間が費やされることが予想できる。シューターもうまく機能せず，廃土の処理に手間取る。

10.19 A区西部は表土除去が続く。東部は遺物包含層の掘削を開始する。遺物包含層より石鏃1点が出土する。

10.20 A区西部は表土除去が続き，東部は遺物包含層を掘削する。シューターがうまく機能せず，廃土の処理に手間取る。抜根にも時間を要する。

10.21 A区西部は表土除去，東部は包含層掘削が続く。廃土処理，抜根に手間取る。

10.22 A区の表土除去はほとんど終了するが，シューターが機能しないため廃土でC区が埋没する。包含層を掘削する。

10.25 A区遺物包含層より弥生土器（甕）が出土する。部分的に遺構検出も行う。東部にはピット数個を検出する。

10.26 A区遺物包含層より出土した弥生土器（甕）の出土状況の写真を撮影する。廃土の除去を行う。

10.27 雨天のため作業中止。

10.28 廃土の除去を主に行う。廃土がシューターを滑らないので，土納袋に入れ，シューターを滑らすように工夫する。A区の遺物包含層掘削も行う。

10.29 遺物包含層を掘削しつつ，廃土の除去を主に行う。C区に仮置きした廃土の1/3ほどが除去できた。遺物包含層より用途不明の石製品（19）が出土する。叩石とも考えられる。

11.1 雨天のため作業中止。

11.2 東部より本格的に遺構検出を始める。A区東部にSK－1を確認する。SK－1周辺の遺物包含層より弥生土器細片が多く出土する。炭化米を伴う。

11.3 遺構検出，廃土除去を続ける。

11.4 遺構検出，廃土除去を続ける。SK－1を調査する。SK－1は埋土が2層に分層できる。それぞれ遺物が多く出土する。埋土2には炭化米が多く混入する。東部にピット群を検出するが，黒褐色の埋土の状況から遺構であるかどうかは不明である。

11.5 遺構検出，廃土除去を続ける。SK－1は完掘し写真を撮影して遺構平面図を作成する。東部のピット群を調査するが，どれも木の根が腐った所が黒褐色土となったものと判明する。

現地説明会1

現地説明会2

11.8　遺構検出，廃土除去を続ける。

11.9　A区東部は遺構掘削が終了し，ほぼ完掘する。A区西部は層序確認のためのバンクの下に住居址の可能性のある円形の遺構を検出する。径は4～5mほどである。検出の段階ですでに炭が多く確認される。

11.10　バンクの部分を除いて，西端部まで遺構検出が終了する。

11.11　A区の西バンクは層序を確認し，写真撮影，土層断面図作成ののち急いで除去する。

11.12　雨天のため作業中止。

11.15　雨天のため作業中止。

11.16　A区西部の遺構検出が完了する。

11.17　ST－1の検出写真を撮影する。炭化物の出土する範囲がかなり広範囲になる。A区のST－1を除いた部分を平板測量し，レベル実測を行う。

11.18　ST－1の調査を開始する。遺構埋土は3層以上に分かれ，どの層からも炭化物が多く出土する。焼けた岩盤を確認する。炭化物を確認できる範囲を写真撮影する。出土遺物は今のところ少ない。並行して，B区の表土除去を行う。

11.19　ST－1の調査を続けつつ，B区の表土除去を主に行う。抜根に手間取る。

11.22　ST－1の調査，B区の表土除去を続ける。

11.23　ST－1にベット状遺構を確認し，写真を撮影する。住居址中央部に炭の濃い部分があり，炉跡の可能性が考えられる。B区は遺物包含層の掘削を開始し，ピット群を検出する。

11.24　また廃土が溜まってきたので，ST－1の調査は一端中断し，全員で廃土除去にかかる。午後3時以降，B区の遺物包含層を掘削し，遺構を検出する。

11.25　主に廃土除去を行う。B区の遺物包含層の掘削も行い，西に向かって遺構を検出する。東側のピット群は検出写真を撮影ののち調査する。B区にSK－2を検出する。

11.26　ST－1の調査を再開し，バンクの写真を撮影する。ピット検出写真を撮影する。C区の表土除去を行う。SK－2を調査し，完掘写真を撮影ののち，平面測量を行う。B区のピット群も調査の結果，木の根の腐食したものと判明する。B区の平板測量を行う。

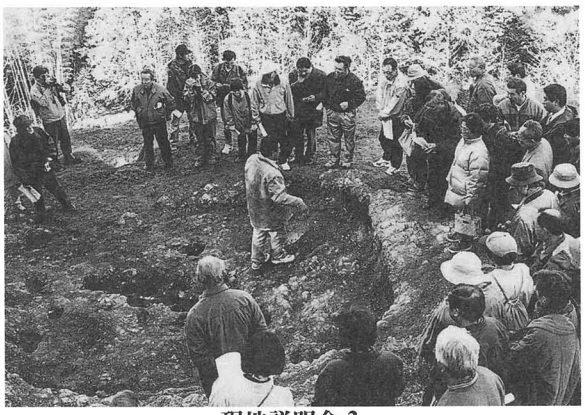
11.29　ST－1の調査を続行する。ベット状遺構を断ち割るようにサブ・トレンチを入れる。C区に遺構を検出する。層序確認のためA～B区間にTR－1を開削する。B区のレベル実測を実施する。

11.30　ST－1を完掘し，完掘写真を撮影する。C区の遺物包含層を掘削する。

12.1　C区の遺物包含層を掘削し遺構を検出しつつ広げていく。TR－1の完掘写真を撮影する。

12.2　雨天のため作業中止。

12.3　TR－1の土層断面図を作成する。C区に数個のピットを検出する。ピット列の中央に土器（長頸壷と土器底部）が出土する。出土状況の写真を撮影したのち，土器を取り上げ



現地説明会 3

現地説明会 4

ると，その下に空洞のピットを検出した。中央耕地事務所と打合せを行う。調査期間を1月末までと区切る。

12.6　C区は遺物包含層を掘削し，D区は表土除去を行う。

12.7　C区は遺物包含層を掘削し，D区は表土除去を行う。

12.8　C区は遺物包含層を掘削し，D区は表土除去を行う。A区は全面精査したのち完掘写真を撮影する。

12.9　ST－1内の遺構の写真を撮影する。

12.10　C区南バンクで層序を確認し，写真撮影を行う。

12.11　C区の土層断面図を作成する。

12.13　D区の表土除去を中心に作業を行う。

12.14　C区のバンクを除去する。バンク下にピットを検出し，以前検出したピットと並び，柵列をなす。第Ⅳ層からも弥生土器細片が出土する。

12.15　D区の表土除去を中心に作業を行う。

12.16　C区で検出したピットはL字状をなす。各ピットからも1～20点ほどの弥生土器細片が出土する。C区の平板測量とレベル実測を行う。

12.17　E区の表土除去を開始する。D区は遺物包含層を掘削し遺構検出を行う。層序確認のためA～C区間にTR－3を開削する。

12.20　TR－3を完掘し写真撮影を行う。D区包含層中にSK－3を検出し調査を行う。SK－3に弥生土器（壷）が出土する。SK－3に切られたSK－4も検出する。

12.21　C区を全面精査して完掘写真を撮影する。

12.22　E区の表土除去を行う。D区も続けて調査する。

12.23　SK－4の調査を行う。TR－4を開削する。

12.24　D区床面にピットを検出する。並んでおり，柵列となるもよう。

12.25　D区にピットをもう一つ検出する。これも他のピットと並ぶ。

12.27～年末年始休業～1.4

1.5　E区の遺物包含層を掘削する。

1.6　雨天により作業中止。

1.7　TR－4を完掘する。E区の遺物包含層掘削を続行する。

1.10　E区の調査を続行する。

1.11　E区の調査と並行してF区は表土を除去する。

1.12　D区の土層を調査しバンクを除去する。E区は包含層を掘削する。F区は表土を除去する。D区の平板測量を行う。

1.13　雨天により作業中止。

1.14　TR－5を掘削し，TR－5の上部の写真撮影と平面図作成を行う。D区のレベル実測を行う。E区は包含層を掘削し，シューター付近に投弾が多く出土する。F区は表土除去を行う。

1.15　D区を精査し，完掘写真を撮影する。TR－5を下に拡張する。E区のシューターより南に石鏃が出土する。F区は表土除去を行う。

1.17　TR－5を完掘する。E区は土層断面の写真撮影をし，断面図を作成してバンクを外す。F区は表土除去を行う。

1.18　E区の完掘写真を撮影する。

1.19　F区のTR－6北壁の写真撮影を行い，断面図を作成する。

1.20　F区のTR－6を完掘する。一部の作業員が第Ⅱ区に入る。

1.21　TR－6の平面図を作成する。

1.24　全員が第Ⅱ区に入り調査する。

1.25　第Ⅱ区の調査を続ける。

1.26　第Ⅰ区を全面精査する。第Ⅱ区の完掘写真を撮影する。

1.27　航空撮影，航空測量を行う。第Ⅰ区全面の写真撮影を行う。第Ⅱ区の平面図，土層断面図を作成する。本日で現場作業は終了する。

1.28　本日は休みとする。

1.29　現地説明会を行う。

1.31　作業用具を伊野小学校の倉庫に搬入し，現場のプレハブを閉め，すべての作業を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の概略と地理的歴史的環境

1. 遺跡の概略

本遺跡は伊野町バーガ森の北斜面に所在する，県内でも著名な弥生時代中期末の高地性集落遺跡である。高知市から国道33号線を西進し咥内坂を下って伊野町に入ると，南には田園風景が広がる。その先の森の北斜面一帯が本遺跡であり，JR伊野駅からは南東の方角に位置する。東西450m南北300mが遺跡の範囲で，標高は40～90m，比高差は30～80mを測る。

1957年（S.32）に発見され，1974年（S.49），1976年（S.51）には学術調査が行われている。一番大きな谷である菖蒲谷を中心にその周囲から，竪穴住居址3棟や弥生土器，石器等が確認されており，菖蒲谷の谷水田を経営する人々が，その谷を囲むように住居を配して生活を営んでいたと考えられてきた。学術調査で検出した竪穴住居址のうち1棟は，町指定の文化財として保存されている。

近年では伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う緊急発掘調査の第1次調査が1997年（H.9）に行われ，約4,000点の弥生土器と800点ほどの土師器，少量の須恵器及び石製品が出土している。弥生土器は中期末のものがほとんどであるが，後期にかかると考えられる搬入土器なども出土している。遺構は竪穴住居址2棟を確認しているが，残念ながら1/2ほどの削平を受けていた。また土師器や須恵器などの出土から，付近に古代の遺構が存在する可能性も示唆されている。

参考文献

岡本健児　『日本の古代遺跡39　高知』保育社　1989.4

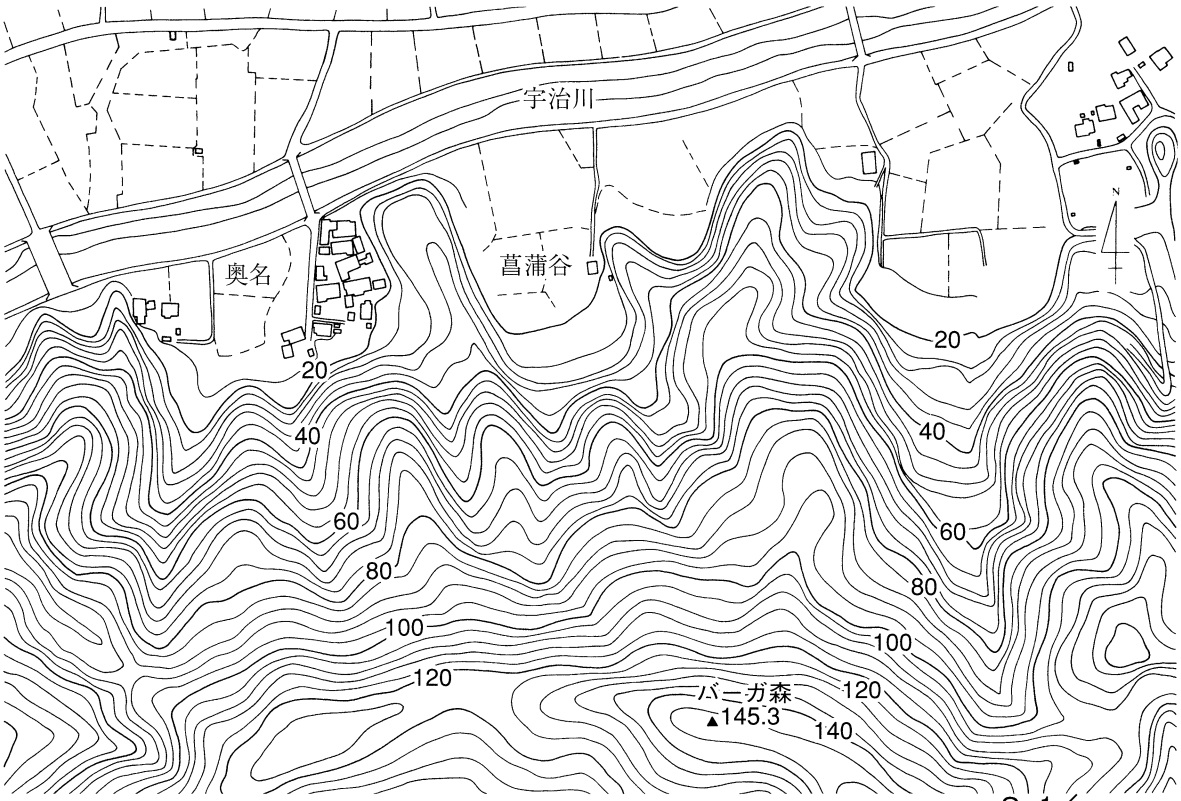


Fig.2　遺跡周辺図

2. 地理的環境

伊野町は，北緯33度32分41秒，東経133度25分49秒，県の中央部，吾川郡の中央に位置する。北は吾川郡吾北村，南は同春野町及び，土佐市，西は高岡郡越知町，同日高村，東は土佐郡鏡村，及び高知市に接する。北部の鷹羽ヵ森（918.9m）を始めとする山々は古生層からなり，南部には古生層からなる丘陵と，東西方向の標高15～20mを測る沖積低地がある。

日高村との境には周辺に豊かな水の恵みを供する仁淀川が流れる。仁淀川は西日本の最高峰である石鎚山（1,982m）に源流を持ち，概ね南西または西に流れたのち東に方向を変える。高知・愛媛県境を越えて，高知県中央部を南東に流れ，途中で多くの支流を合流し，土佐市宇佐で土佐湾に流れ込む。流路延長は123.4km，総流路面積は1,585km^{2}で，長さでは四万十川，吉野川に次ぐ四国第3位の河川である。中流域では全体的に峡谷をなしており，支流の長者川・中津川・土居川などの合流する谷間に小規模な集落が立地している。この支流の上流は，谷を深く切り込み，渓谷を主体としており，景観がすばらしく県立自然公園の指定を受けた区域も多い。土地利用は傾斜地を利用した畑作が主体で，かつては楮・三椏などの換金作物や豊富な林資源が，仁淀川の水運を利用して下流域の伊野町，土佐市，春野町などに運ばれた。ちなみに仁淀川の名称については，その昔朝廷の贄殿に鮎を毎年貢租したので贄殿川になり，いつしか仁淀川になったなど諸説がある。

産業は，南部の平坦部では施設園芸と果樹栽培が中心に行われており，中部ではショウガを特産としている。工業は江戸時代以来，土佐和紙の生産で全国的に知られ，現在でも印刷業，製紙業が盛んである。

交通は南部を東西にJR土讃本線・土佐電気鉄道が走り，鉄道に並行して高知市に通じる国道33号が通る。また国道194号が仁淀川橋のたもとで国道33号から分岐し，仁淀川に沿って北西に向かう。平成10年3月には四国横断自動車道南国・伊野間が開通しており，県西部地域から四国各地や本州への起点として，その重要性が増している。

3. 歴史的環境

伊野町周辺の歴史的環境を考古学的成果から概観する。

伊野町内の最も古い人の痕跡は縄文時代まで遡ることができる。奥名遺跡では船元ⅢA式土器が出土しており，大デキ遺跡で縄文晩期の磨製石斧が排水工事の際に水田中より発見されている。

弥生時代に移ると，宇治川のほとりのサジキ遺跡で石包丁が，八田岩滝の鼻遺跡では中細形銅剣が，大デキの排水工事の際には，弥生土器（甕）の口縁部が発見されている。これらは総て中期中葉に属するものである。

中期から後期にかけて集落が高地にも営まれる。本遺跡と同様の高地性集落である。周辺部では，ともに町外であるが東に朝倉城山遺跡，南に用石甫木山遺跡が挙げられる。朝倉城山遺跡は本遺跡とは尾根続きで3kmほど東に所在する。昭和初期に発見され，部分的に発掘調査が行われている。本遺跡に比べ一型式古い段階の朝倉式土器が出土しており，時期的には中期中葉とみられる。磨製石斧や叩石，石包丁なども出土しており，谷水田の経営がなされていたものと考えられる。用石甫木山遺跡は仁淀川下流の右岸に位置する。標高80mほどの場所に竪穴住居の断面の一部が発見され

ている。緑色片岩で作られた石包丁や，石包丁などを磨いた砥石，また石錘などが出土している。出土する土器は本遺跡と同様，神西式土器が中心であり，凹線文を施す土器が共判するようで，本遺跡とほぼ同時期の遺跡と考えられる。

後期になると集落は低地へと戻る。伊野町商店街の真中に後期前半に位置付けられる寺門遺跡が所在する。宅地内の井戸掘りの時に偶然発見された遺跡であり，弥生土器の壷，甕，高杯，それに小型の鉢などが出土している。後期後半は工事中に中細形銅剣，中広形銅戈が偶然発見された天神溝田遺跡が挙げられる。出土する土器は二重口縁壷やタタキ目の残る鉢，小さな平底と丸底が混在する底部破片などである。また，寺門遺跡と天神溝田遺跡の中間的要素をもつ遺跡として，周辺部には伊野町塔の向遺跡，日高村西田口遺跡が挙げられる。

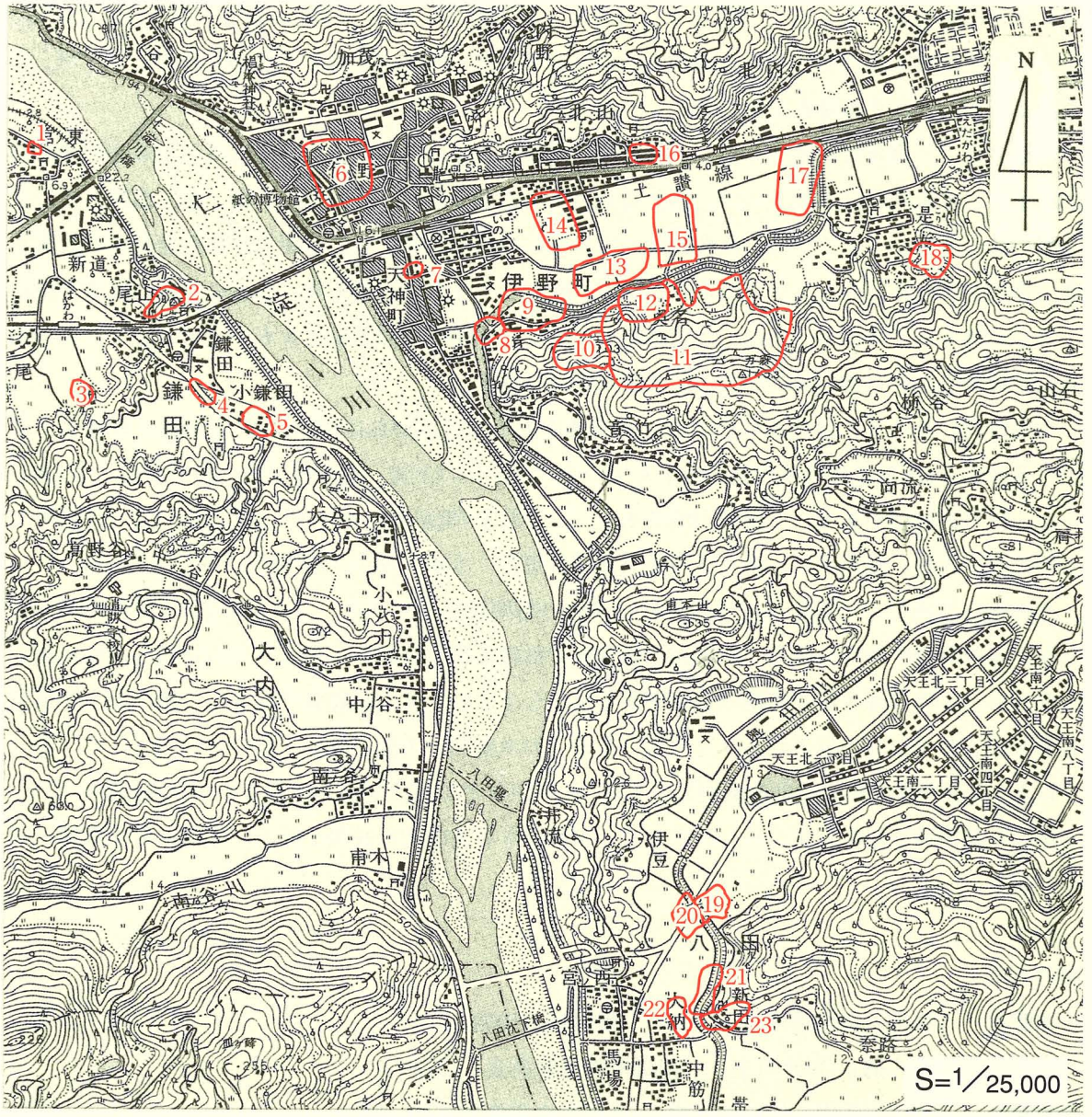
古墳時代になると，前述の八田岩滝の鼻遺跡や大デキ遺跡からは5世紀代の土師器と鉄斧が，サジキ遺跡からは6世紀代の須恵器が出土している。宇治川の上流，通称琴平山の南麓斜面には3基からなる枝川古墳群がある。小型の円墳であり，いずれも7世紀初頭の古墳と考えられる。1号墳では玄門付近で人骨が発見され，また玄室中央部で須恵器・玉類・勾玉・銀環等が出土している。

その他に町内でここ数年の間に行われた遺跡の発掘調査としては，本遺跡の第1次調査と八田神母谷遺跡の調査が挙げられる。八田神母谷遺跡では縄文時代後期から中世までの遺構・遺物が確認されており，特に弥生時代前期の遺物が多く出土している。また高知県では最古段階に属する須恵器壷が出土しており注目される。その他にも多くの木製品や古代の墨書土器などが出土している。

以上，周辺の考古学的成果を概観してきた。工事中などに偶然発見されたものが比較的多い中で，本格的な発掘調査も少しずつ行われており，本町でも考古学的な成果が徐々にではあるが蓄積されつつある。

参考文献

岡本健児　『日本の古代遺跡39　高知』　保育社　1989.4
岡本健児　「考古編」『伊野町史』　伊野町教育委員会　1973.11
岡本健児　「考古古代編」『土佐市史』　土佐市史編纂委員会　1978
『角川日本地名大辞典39　高知県』　角川書店　1991.9
『高知県の地名』日本歴史地名体系40　平凡社　1993.1
『八田神母谷遺跡』　高知県埋蔵文化財センター　1998.3



NO	遺跡名	種別	時代	NO	遺跡名	種別	時代
1	宮ノ東遺跡	散布地	弥生	13	塔の向遺跡	散布地	弥生
2	鎌田城跡	城館跡	中世	14	高海老遺跡	〃	〃
3	月田上神社遺跡	祭祀遺跡	近世	15	大デキ遺跡	〃	縄文～古墳
4	ハギ原遺跡	散布地	中世	16	北山前遺跡	〃	古墳
5	門田遺跡	〃	〃	17	サジキ遺跡	〃	弥生～中世
6	寺門遺跡	〃	弥生	18	坂口遺跡	〃	弥生
7	次郎丸遺跡	〃	〃	19	岩滝ノ鼻遺跡A	〃	〃
8	天神遺跡	〃	中世	20	岩滝ノ鼻遺跡B	〃	古墳
9	天神溝田遺跡	〃	弥生	21	観音ノ鼻遺跡	〃	〃
10	音竹城跡	城館跡	中世	22	新田遺跡	〃	〃
11	バーガ森北斜面遺跡	集落跡	弥生・中世	23	観音ノ平遺跡	〃	〃
12	奥名遺跡	散布地	縄文				

Fig.3　周辺の遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の概要

1. 調査の方法

本年度調査区は竹崎橋南約200mの地点で，第1次調査を行った地点からは菖蒲谷を挟んで200mほど西にあたる山の斜面部（調査第Ⅰ区）とその奥（南東）100mほどの地点（調査第Ⅱ区）であり，調査区の標高は60～90mを測る。平成9・10年度に実施した試掘調査により，調査第Ⅰ区の各平坦部に遺構・遺物を確認し本調査に至った。調査第Ⅱ区は確認調査のために実施した。また，今回設定した調査第Ⅰ区の上段にも300㎡を越える平坦部があり，その北半分が工事区域であったが，ほぼ全面にわたって耕作に使用されていた模様で，試掘調査の結果，遺構・遺物は皆無であった。調査対象面積は約2,000㎡であり，重機が導入できないため作業全般が人力作業であり，急斜面部の調査は不可能であった。また，時間的制約からも全面発掘を行うことができず，それぞれの平坦部を中心に作業を行った。調査に先立って，廃土除去のための簡易シューターを調査区西部に設置した。また，3級基準点を調査区内の2ヵ所に設置し，平成10年度の試掘調査の際に設置した基準点と合わせ，4点の3級基準点を使用して測量を行った。

調査は雑木の抜根，表土除去から開始し，遺物包含層を掘削し遺構を検出した。出土した遺物は必要に応じて写真撮影，出土状況の平面図作成，レベル測量ののち取り上げた。遺構は掘削ののち完掘写真を撮影し，遺構平面図を作成した。また調査と並行して土層観察を行い，土層断面図を作成し写真撮影を行った。各平坦部の調査終了時には平板測量，レベル測量を行い，斜面部の調査に当たってはトレンチ調査を併用した。

調査終了時には航空写真撮影・航空測量を実施した。基準点設置及び，航空写真撮影・航空測量は四国航測株式会社に依頼した。

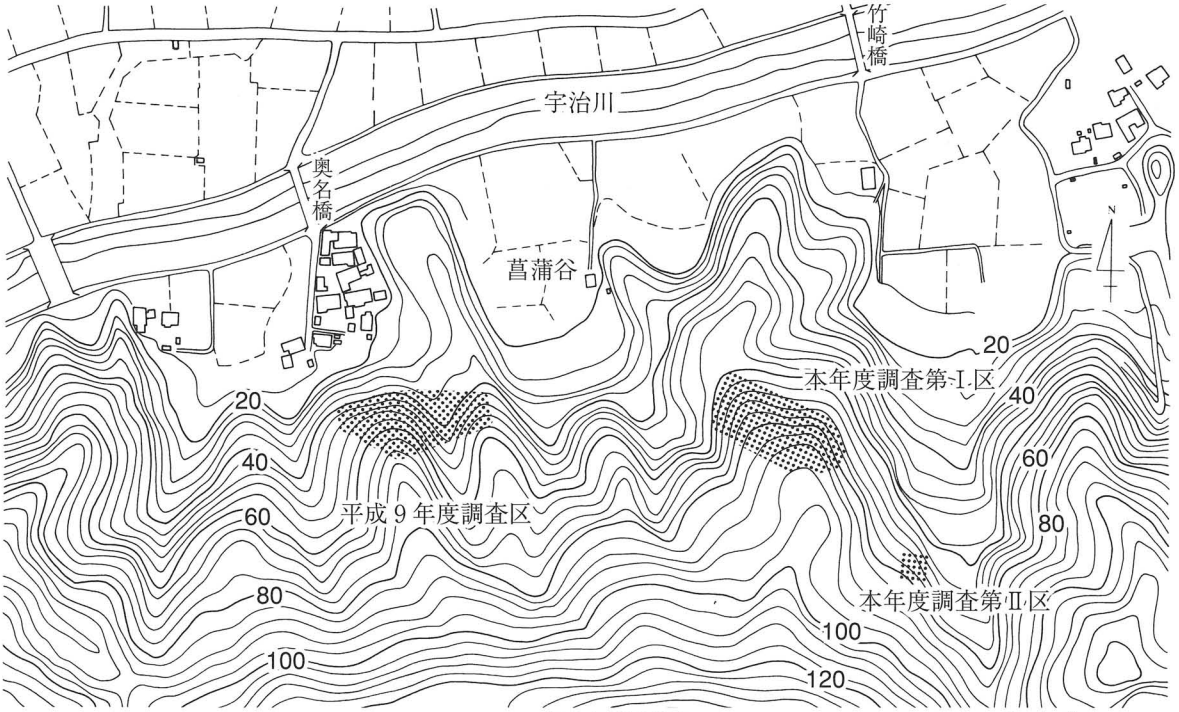
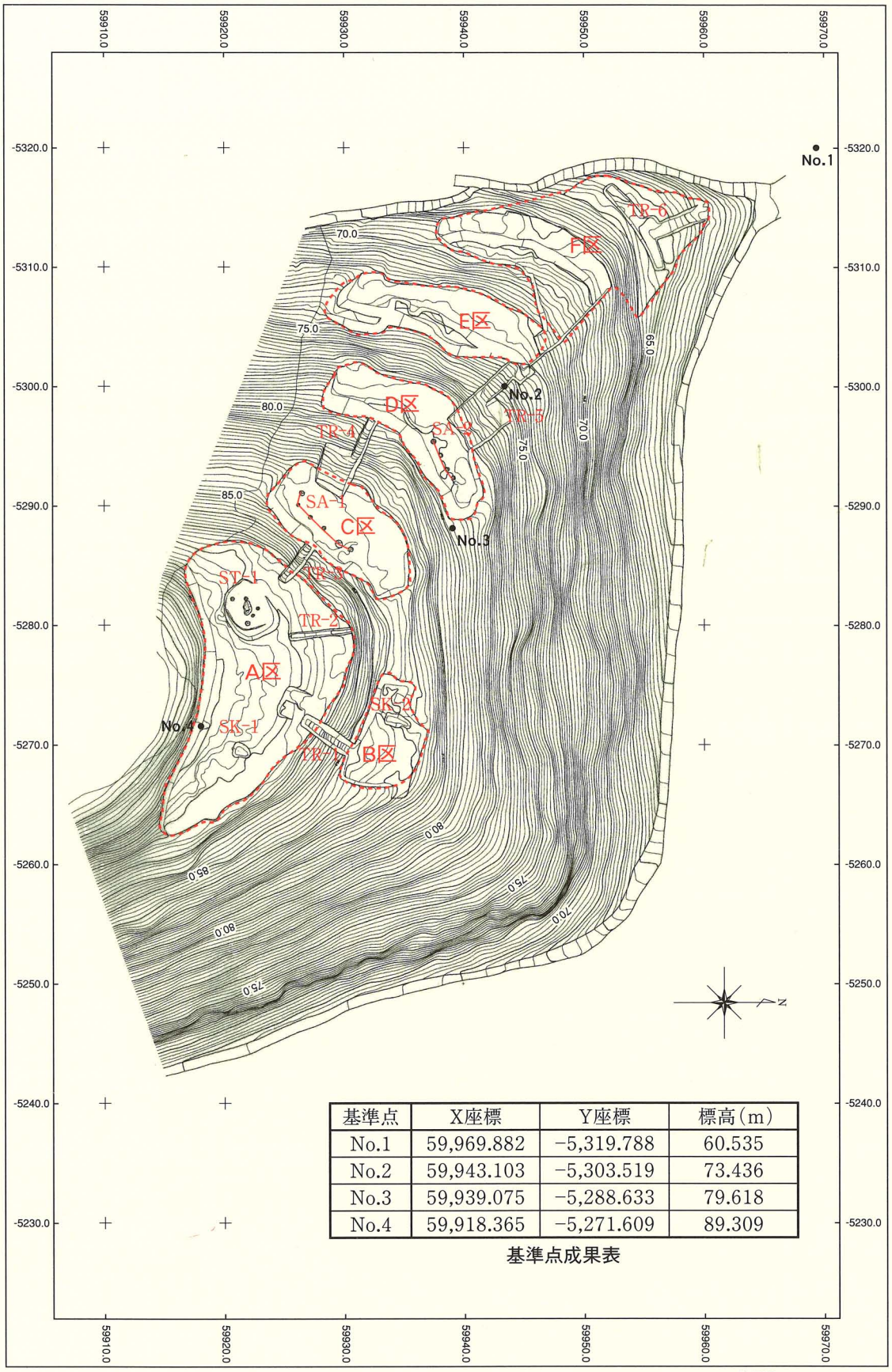


Fig.4　調査区位置図　S=1/5,000



基準点	X座標	Y座標	標高(m)
No.1	59,969.882	−5,319.788	60.535
No.2	59,943.103	−5,303.519	73.436
No.3	59,939.075	−5,288.633	79.618
No.4	59,918.365	−5,271.609	89.309

基準点成果表

1:500

0 5 10 15 20

Fig.5　調査区設定図

2. 第Ⅰ区の調査

(1) 層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）礫質砂層

第Ⅲ層　黄褐色（2.5Y5/3）砂質礫層

第Ⅲ'層　黒褐色（10YR3/2）砂質シルト層

第Ⅳ層　褐色（10YR4/4）礫質砂層

第Ⅰ層は表土層で黒褐色を呈する腐植土である。調査区全体に堆積し，厚さ5～15cmを測る。

第Ⅱ層は腐植土に砂，小礫が多く混入している。第Ⅰ層と同様調査区全体に分布しており，厚いところでは50cmほどの堆積をみせる。

第Ⅲ層は弥生時代中期後半の遺物包含層である。2～5cmほどの礫を多く含み，標高70m以上に部分的な堆積をみせる。標高85m以上では一定の堆積をみせるが，標高70～85mの間では，段状遺構の平坦部や壁面近くなどにしか残存していない。堆積層の厚さは20～70cmを測る。

第Ⅲ'層は調査区の所々に部分的な堆積をみせる。湿り気が強く炭化した植物遺体が混入していることが多く，木の根等が腐植したものと考えられる。

第Ⅳ層は土質的には第Ⅲ層と大差なく若干褐色が強い。弥生土器を包含するが細片のみで，第Ⅲ層と時期的な差はないものと考える。部分的な堆積をみせる。

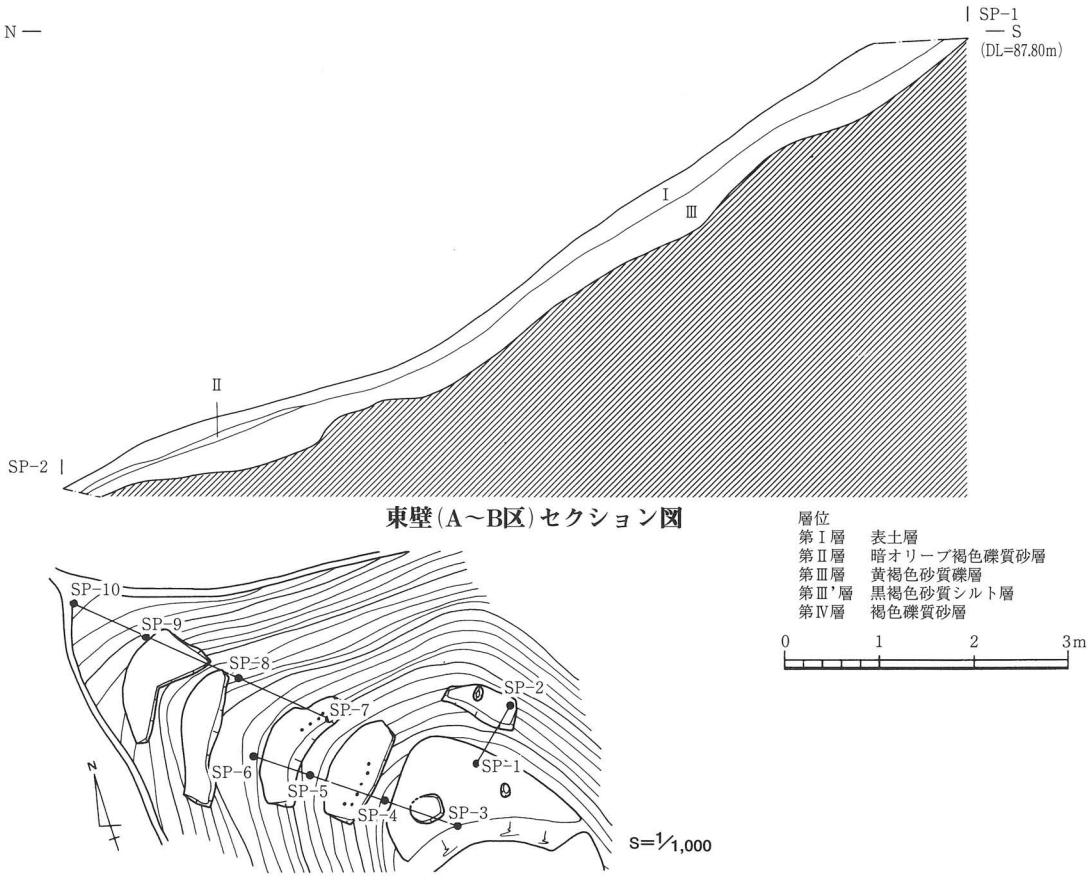


Fig.6　断面図作成地点と東壁(A～B区)セクション図

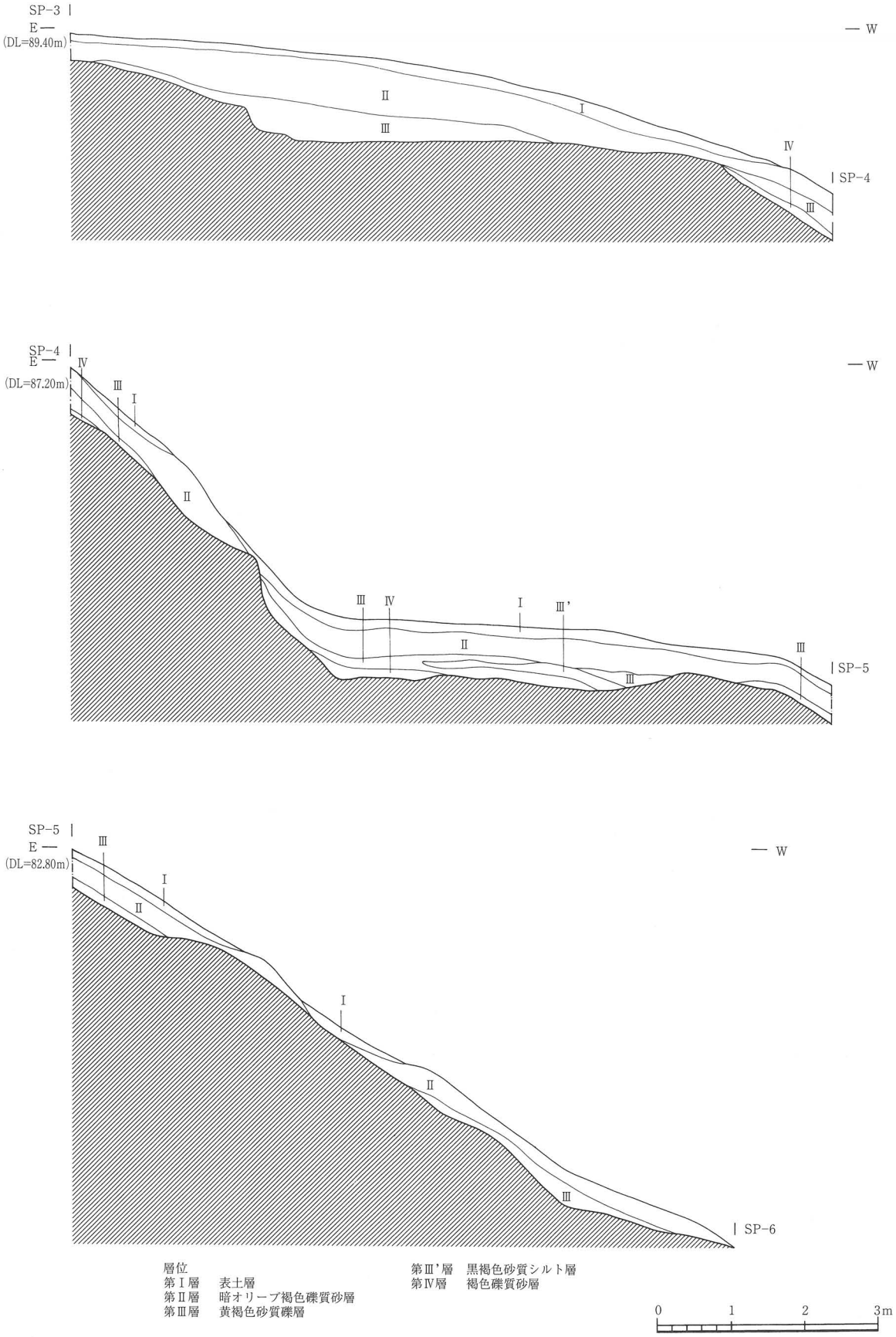


Fig.7　調査区上段南壁セクション図

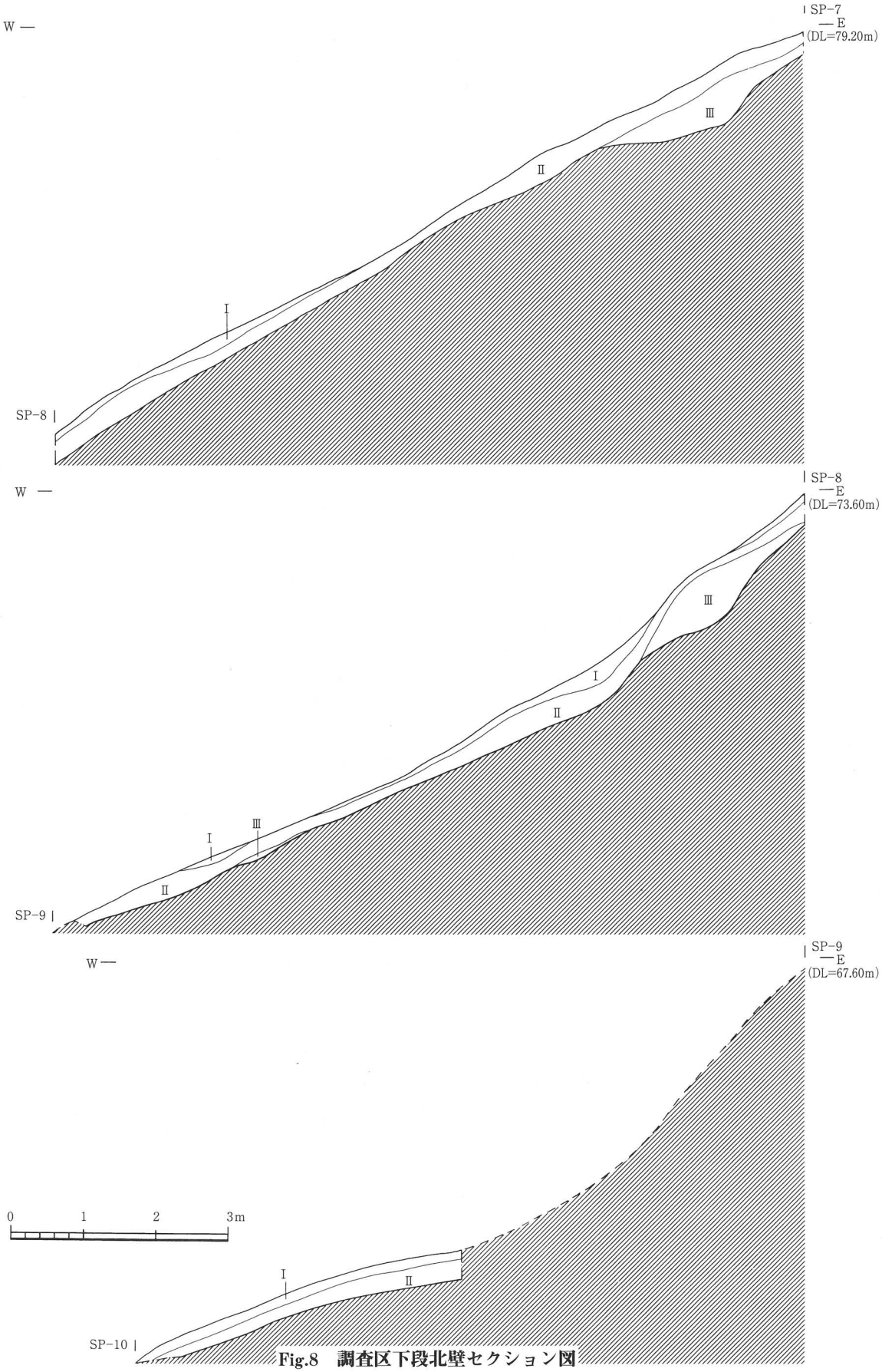


Fig.8　調査区下段北壁セクション図

(2) A区の調査

調査第Ⅰ区の最上段の平坦部をA区とした。A区は北へ緩やかな傾斜をみせ，面積は約233m²，標高87.14～89.10mを測る。第Ⅰ層約10cm，第Ⅱ層約60cmの堆積の下に第Ⅲ層（遺物包含層）が20cmほどの厚さで堆積している。遺物は第Ⅰ層から陶磁器類，弥生土器の細片が数点ずつと第Ⅲ層から約700点の弥生土器が出土した。遺構は竪穴住居址1棟，土坑1基を検出した。なお，層序確認のためA～B区の間，A区北部，A～C区の間にトレンチを設置し，順にTR－1，TR－2，TR－3とした。TR－1とTR－3の第Ⅲ層から弥生土器細片が数点出土している。

①堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器（Fig.9－1～12）

1～7は壷である。1～3は大きく外反する口縁部であり，粘土帯を貼付して肥厚させている。1は口縁部の1/5ほど残存し，口径21.2cmを測る。口縁端部は面をなし，下端には刻みを有す。外面の頸部付近には中央を竹管で刺突した円形浮文を配し，その下に微隆起帯が巡る。内外面ともハケ調整を施しており，焼成も良好で堅緻である。2は口縁部の1/6ほど残存し，口径20.6cmを測る。口縁下部には不明瞭ながら櫛描直線文が残る。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。摩耗が激しく内外面とも調整不明である。3・4は口縁部破片で，3は口径17.6cmを測る。口縁下端には刻みを有し，口縁下部には櫛描直線文を施す。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。4は若干下方に拡張する口縁部であり，内面には中央を竹管で刺突した円形浮文を配す。外面にも同様の浮文と，口縁下部に中央をタテに摘んだ円形浮文を配す。胎土には2mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。内面に浮文を配する個体は，今回の調査で出土した遺物の中ではこの1点のみである。5は壷の胴部破片である。大きく膨らむ胴部から，頸部はほぼ真上に延びる。口縁部の形態は不明である。外面には左下がりの圧痕文の上に櫛描直線文を施し，タテに摘んだ楕円形浮文を配す。内面は摩耗のため調整不明である。6は長頸壷で口縁部の1/3ほど残存し，口径9.4cmを測る。やや外反する口縁部であり，粘土を折り曲げ肥厚させている。摩耗のため不明瞭であるが，口縁下部には列点文を施す。調整は内外面とも不明である。7は無頸壷で1/5ほど残存し，口径11.8cm，胴径19.2cmを測る。大きく張りのある胴部は内湾して口縁部に至り，口縁下部に孔を穿つ。内外面とも摩耗しており調整は不明であるが，内面には指頭圧痕が残る。胎土に含まれる砂粒は，精選された緻密な細砂粒のみである。

8は甕で口縁部の1/4ほど残存し，口径16.0cmを測る。やや外反する口縁部で，粘土を折り曲げて肥厚させている。摩耗が激しく，調整は内外面とも不明である。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。

9・10は平底の底部であり，器種は壷または甕と考えられる。9は底径5.2cmを測り，底部のみ完存する。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。10は底径9.8cmを測り，これも底部のみ完存する。胴部の立ち上がり等は不明であり，摩耗が激しく調整なども不明である。外底面には土器成形時にできたとみられる傷跡が残る。ヘラ状の工具による文様にもみえるが，場所的に文様とは考えにくい。

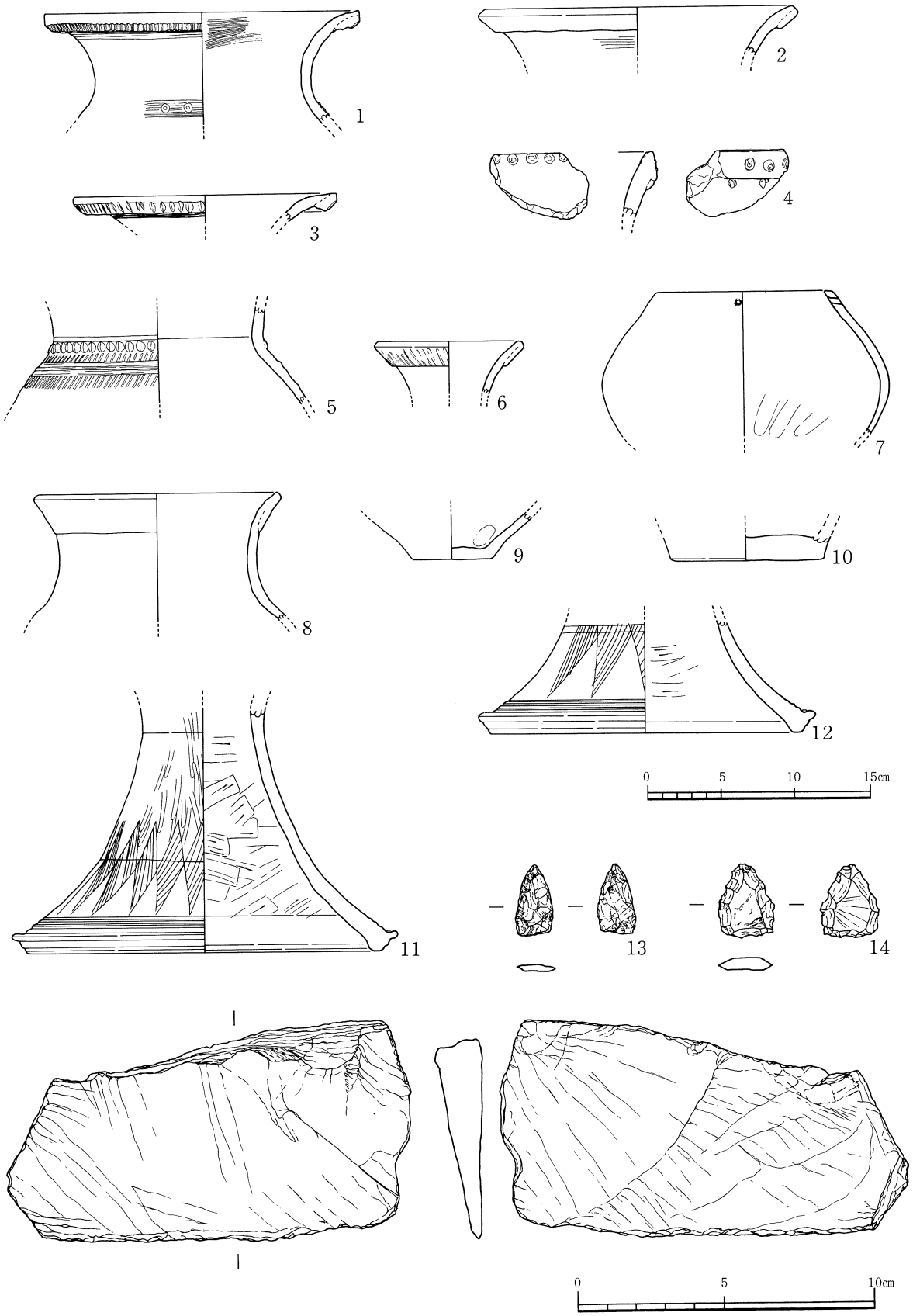


Fig.9　A区第Ⅲ層 出土遺物実測図

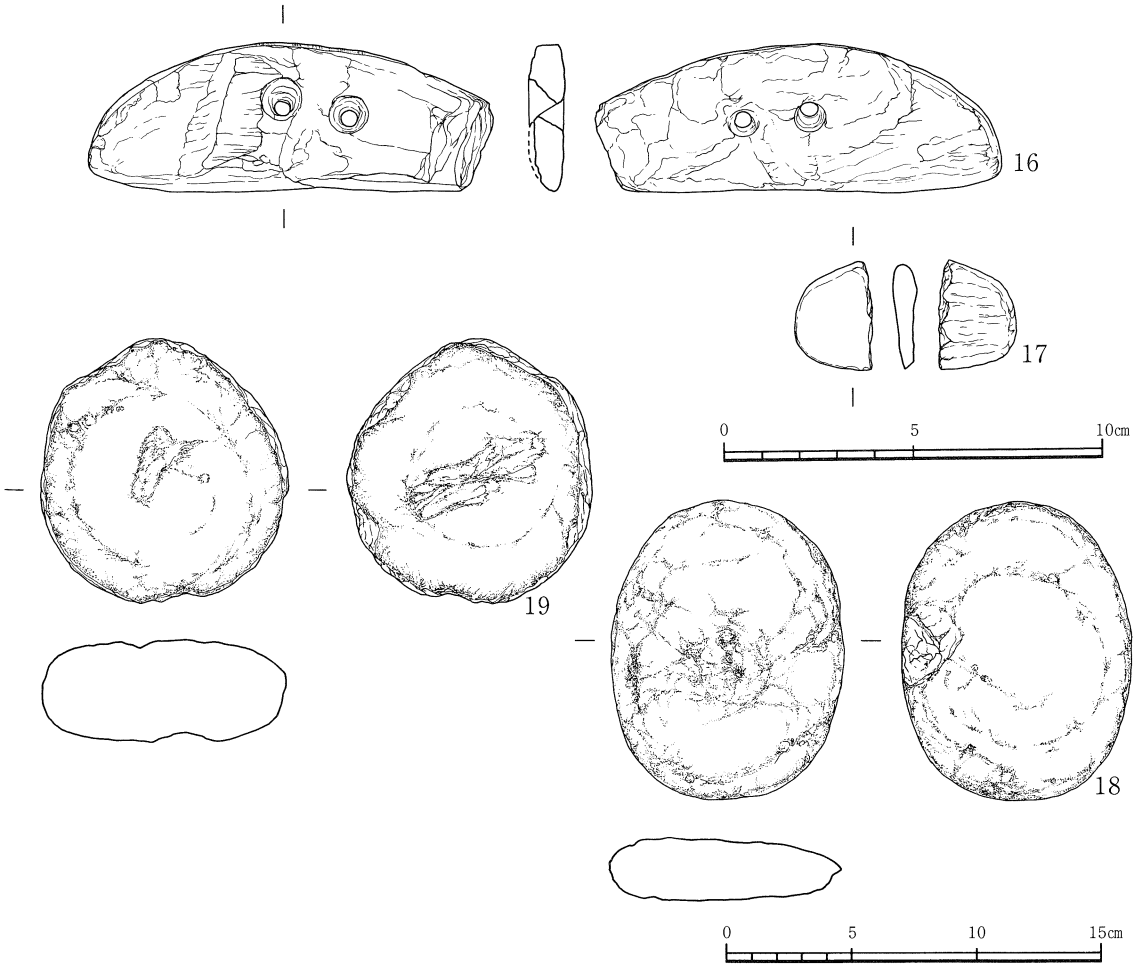


Fig.10　A区第Ⅲ層 出土遺物実測図

11・12は高杯である。11は脚台部の1/4ほど残存し，底径23.6cmを測る。裾部は八の字状に開き3条の凹線文を巡らせ，裾端部は上方に拡張し2条の凹線文を巡らせる。外面にはヘラ磨きを施した上に菱形の文様を巡らせ，その中にヨコ方向の1条の直線文と斜めの数状の直線文を施す。これらの文様は鋭い金属製の原体によって施文されたものと考えられる。内面はヘラ削りを施し，裾部付近はナデ調整を施す。胎土に含まれる砂粒は精選された均一のものである。12は脚台部の破片で，底径21.0cmを測る。裾部は八の字状に開き3条の凹線文を巡らせ，裾端部は上方に拡張し2条の凹線文を巡らせる。内面は摩耗しており調整は不明である。胎土に含まれる砂粒は精選された均一なものである。外面の文様は11と同様の菱形の文様の一部であると思われ，底径には若干の差がみられるものの，成形やその他の特徴から11と同一個体である可能性が高いものと考えられる。

石製品（Fig.9－13～15，Fig.10－16～19）

13・14は石鏃である。13は完存し，全長2.4cm，全幅1.3cm，全厚0.2cmを測る。比較的小型であり扁平で薄い。平基式であり石材はサヌカイトである。14はほぼ完存するが，先端部が若干欠損する。全長は2.7cmほどになるものと思われる。全幅1.9cm，全厚0.4cmを測る。平基式であり石材はサヌカイトである。

15～17は石包丁である。15は打製石包丁で，ほぼ完存し全長13.7cm，全幅7.4cm，全厚1.5cmを測

る比較的大型のものである。直線的な片刃の刃部を有する石包丁で，刃部の箇所のみ剥離によって整えられている。石材はサヌカイトである。16は磨製石包丁で一部欠損する。全長は12.5cmほどになるものと考えられ，全幅4.0cm，全厚1.0cmを測る。湾曲部と直線部を有し，直線部を刃部とする片刃の石包丁で，中央部に双孔を穿つ。棟部や刃部など部分的に研磨がなされている。石材は結晶片岩と考えられる。17は磨製石包丁の端部の破片で，残存長2.0cm，全幅2.9cm，全厚0.6cmを測る。直線に近い片刃の刃部を有すると考えられ，片面と棟部，刃部を研磨する。石材は緑色片岩と考えられる。

18は明瞭な使用痕はみられないものの，片面はやや窪んでおり，もう片面は平らで座りがよく，叩石として使用された可能性が考えられる。完存しており，全長11.8cm，全幅9.1cm，全厚2.6cmを測る。石材は花崗岩である。

19は用途不明の石製品で，両面に幅1.5～2.0cmの窪みを有する。全長10.5cm，全幅9.6cm，全厚4.1cmを測る。周囲を2/3ほど欠いており，1/3は自然面が残存する。石材は花崗岩であり，叩石として使用された可能性も考えられる。

②遺構と遺物

ｉ竪穴住居

ST－1（Fig.11）

A区西側に検出した竪穴住居址で，長径4.91m，短径4.05mを測る楕円形を呈す。柔らかい岩盤を掘り込んで作られた住居址で，表土下約80cmで検出しており，長軸方向はN－61°－E，南側の壁高は43.5cmを測り，北側には壁を持たない。床面の標高は87.86～87.90mを測りほぼ平坦である。埋土は6層に分層でき，埋土2からは弥生土器約300点と石製品数点が，埋土5からは弥生土器約30点と石製品数点が出土している。埋土2，埋土3，埋土5からは炭化物も多量に出土しており，特に径3～6cm，長さ8～15cmほどの炭化材が多くみられ，住居中央の土坑を中心に放射状に確認することができた。また住居北側の床面は暗赤色を呈しており，火を受けた可能性が高く，住居は焼失したものと考えられる。住居址に付随する遺構として土坑1基，ピット5つ，ベッド状遺構1ヶ所を検出した。土坑は長径1.24m，短径0.62m，深さ19cmを測る楕円形を呈し，底面には2ヵ所の窪みを有するが東側の窪みが深く，埋土に含まれる炭化物も多量である。位置的にも住居址中央部であり，炉の役割を果たしたものと考えられる。なお，土坑からは弥生土器細片が2点出土している。ピットは，P－1が径18cm，深さ28cmの円形ピット，P－2が径30cm，深さ17cmの円形ピット，P－3が径18cm，深さ39cmの円形ピット，P－4が径20cm，深さ22cmの円形ピット，P－5が長径47cm，短径35cm，深さ37cmの楕円形ピットで，P－2とP－5については，柱穴として使用された可能性が高い。いずれも炭化物細片は含むものの，出土遺物は皆無であった。ベッド状遺構は南壁から東壁に沿って三日月状に設けられており，岩盤を若干残した上に盛土で一段高く成形している。

埋土2出土遺物

弥生土器（Fig.12－20～22）

20～22は壷である。20は口縁部の1/6ほど残存し，口径20.2cmを測る。大きく外反する口縁部であ

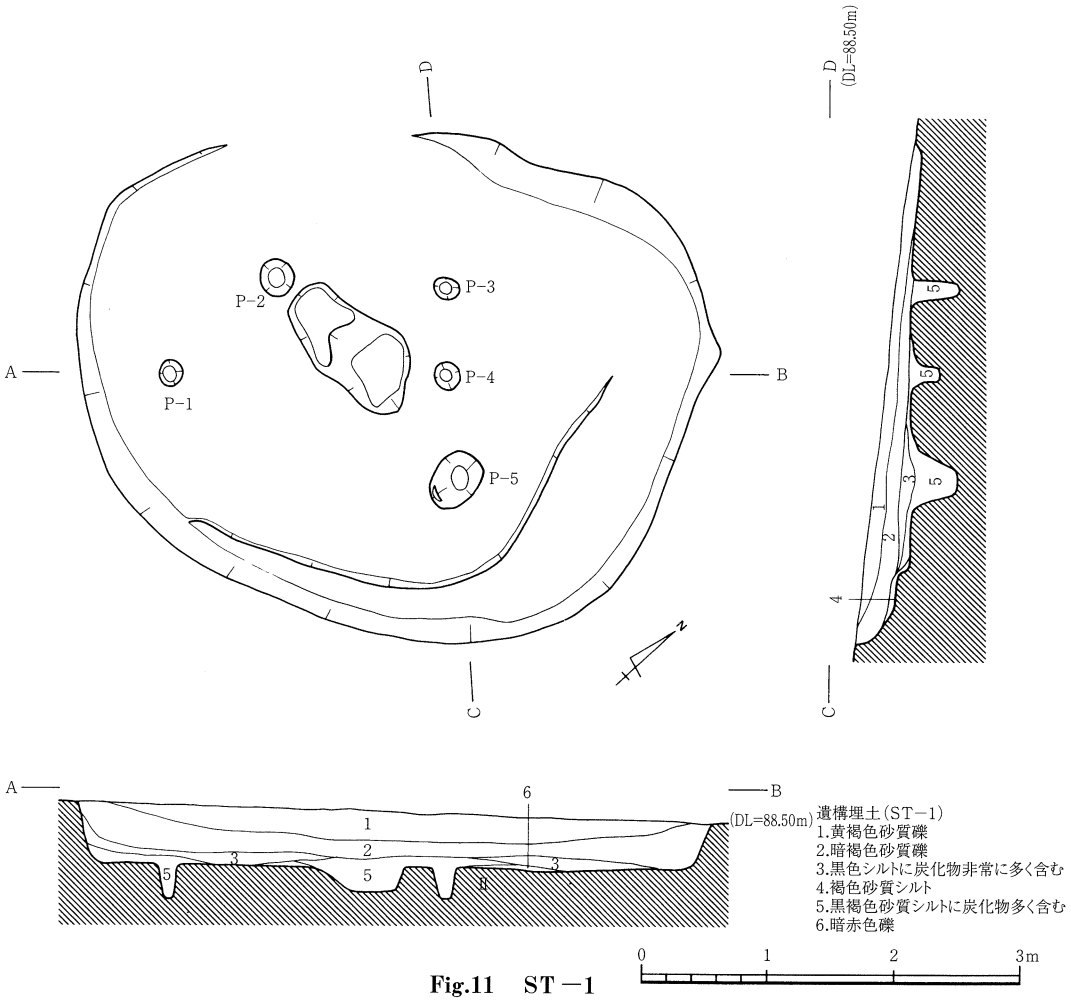


Fig.11　ST−1

り，端部を上下に拡張し4条の凹線文を施す。外面はナデ調整を施し，頸部には列点文を施す。内面は摩耗のため調整不明である。21は壷で口縁部の1/5ほど残存し，口径15.2cmを測る。大きく開く口縁部で，端部は浅い凹面をなす。外面は摩耗により調整不明であり，内面は指ナデ調整を施す。22は長頸壷で口縁部の1/4ほど残存し，口径は比較的大きく13.6cmを測る。外上方にやや開く口縁部で，外面は極端に摩耗しており，口縁下部に配された浮文もはっきりした形を成さない。内面はナデ調整を施しており，指頭圧痕が残る。

石製品（Fig.12−23）

23は石包丁と考えられる。刃部の一部が残存するのみであり，残存長8.9cmを測る。

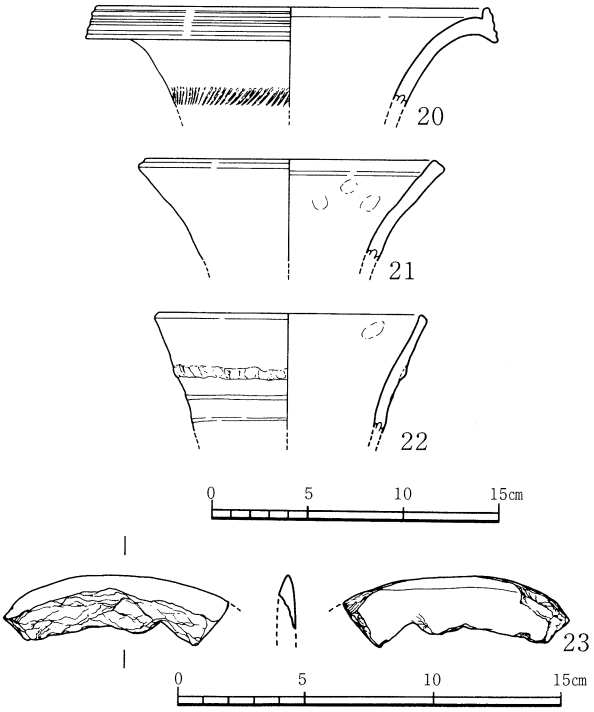


Fig.12　ST−1埋土2 出土遺物実測図

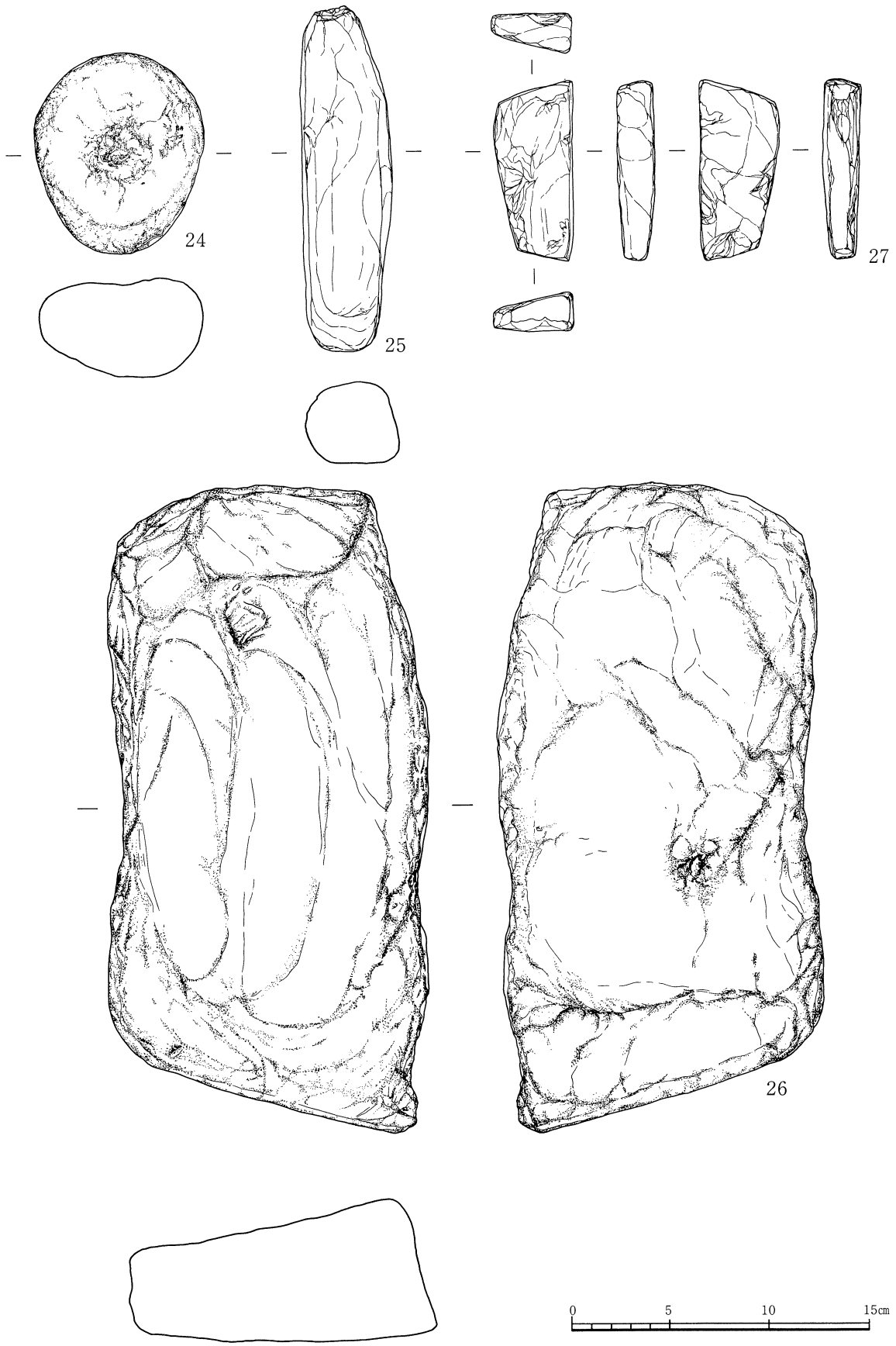


Fig.13　ST－1埋土5 出土遺物実測図

埋土5出土遺物

石製品（Fig.13－24～27）

24・25は叩石である。24は完存し，全長10.4cm，全幅8.6cm，全厚5.1cmを測る。片面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。石材は花崗岩である。25もほぼ完存する。全長17.7cm，全幅4.6cm，全厚4.2cmを測り，両先端部に使用痕が残る。石材は泥岩と考えられる。

26・27は砥石で，ともに完存する。26は1面を使用しており，全長33.3cm，全幅16.1cm，全厚7.25cm，重量6.6kgを測る大きなものである。石材は泥岩と考えられる。27は6面を使用しており，全長9.3cm，全幅4.0cm，全厚1.9cmを測る。石材は泥岩である。

ii 土坑

SK－1（Fig.14）

A区東側表土下約50cmで検出した不整楕円形の土坑である。長径1.74m，短径1.25m，深さ31cmを測り，長軸方向はN－20°－E，断面形は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき，埋土1は暗褐色シルト質砂で弥生土器約300点と石製品数点が出土している。埋土2はにぶい赤褐色砂質礫で弥生土器約500点と石製品数点が出土している。また埋土1，埋土2から炭化米が出土している。炭化米はSK－1周辺の遺物包含層下部でも確認した。

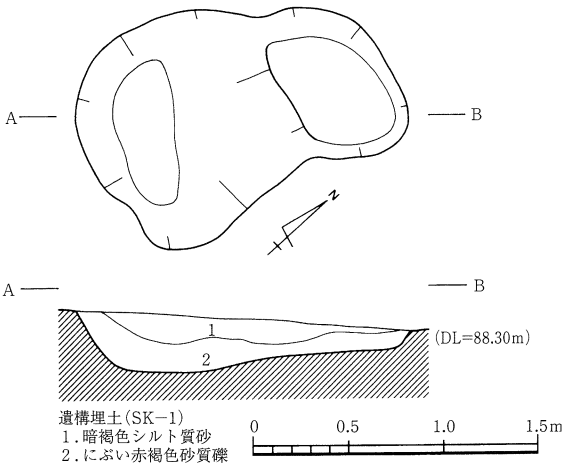


Fig.14　SK－1

埋土1出土遺物

弥生土器（Fig.15－28～41）

28～37は壷である。28は口縁部から胴部にかけて残存しているが，口縁部はそのほとんどを欠損する。大きく外反する口縁部で口径23.0cmを測り，最大径を口縁部に有する。摩耗が激しく全体的に不明瞭であるが，口縁下部にはタテハケと櫛描直線文が残り，上胴部には櫛描直線文とタテに摘んだ楕円形浮文を配す。内面はほとんど調整不明であるが，所々に指頭圧痕が残る。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。29は口縁部の1/3ほど残存し，口径19.2cmを測る。大きく外反する口縁部であり，粘土帯を貼付し肥厚させ，口縁下部には刻みを巡らす。内外面とも摩耗が激しく，外面は調整不明である。内面はハケ調整を施すものと考えられる。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。30も口縁部の1/3ほど残存する。外反する口縁部で，口径15.0cmを測り，端部にはほとんど摩耗しているが2条の浅い凹線文が巡る。外面はナデ調整を施し，頸部に列点文と2条の明瞭な凹線文が巡る。内面は摩耗しており調整は不明である。31・32は口縁部の1/4ほど残存する。共に外反する口縁部であり，31は口径17.2cmを測る。内外面とも摩耗が激しく調整は不明で，胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。32は口径20.0cmを測る。口縁下部に櫛描直線文を施す。31と同様に，内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。33～35は大きく外反する口縁部であり，粘土帯を貼付して肥厚させている。33は口縁部の1/6ほど残存する。口径26.0cm

を測り，端部に刻みを施す。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。胎土には1～3㎜ほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。34は口径18.6㎝を測る。全体的に摩耗が激しく，下端には非常に不明瞭であるが刻みが残る。粘土帯の下には櫛描直線文を施す。外面は調整不明であるが，内面はナデ調整を施す。35は口径16.9㎝を測り，口縁下部には粘土帯を押さえた痕跡と思われる弱い指頭圧痕が巡る。36は口径17.0㎝を測る外反する口縁部である。粘土帯を貼付して肥厚させており，粘土帯外面には列点文を施す。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。37は大きく外反する口縁部の破片で，端部を厚く仕上げ下端には刻みを有する。内外面とも摩耗しており，調整は不明である。

38は甕の口縁部破片で口径22.0㎝を測る。やや外反する口縁部で，粘土を折り曲げて肥厚させている。摩耗が激しく，調整は内外面とも不明である。胎土には1～3㎜ほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。39も甕の口縁部で1/2ほど残存し，口径18.0㎝を測る。くの字状に強く外傾する口縁部で，やや上方に拡張しており，端部に2条の凹線文を施す。胴部外面にはヘラ磨きを，口縁部内面にはハケ調整を施す。胎土に含まれる砂粒は大小不揃いである。

40は底径8.5㎝を測る平底の底部で，底部のみ完存する。外面は摩耗が激しく調整は不明であるが，内面は指頭による凹凸が激しい。

41は高杯の杯底部から脚台部で，脚台部は完存し底径12.6㎝を測る。杯部内面には不明瞭ながら指頭圧痕が残る。裾部は八の字状に開き，裾端部を上下にやや拡張し2条の凹線文が巡る。脚部から裾部にかけての外面にはナデ調整を施し，鋭い金属原体による直線文をヨコ方向に11条配し，タテ方向に5条を1単位として4ヵ所に配す。胎土は軟質であり，1～2㎜ほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。

石製品（Fig.15―42・43）

42・43は砥石である。42は1/2ほど残存する。3面を使用しており，全長8.1㎝，全幅11.4㎝，全厚3.8㎝を測る。石材は石英斑岩である。43は完存する。5面を使用しており，全長8.4㎝，全幅7.5㎝，全厚3.5㎝を測る。石材は石英斑岩である。

埋土2出土遺物

弥生土器（Fig.16―44～49）

44～47は壷である。44は口縁部の2/3ほど残存する。大きく開く口縁部であり，口径19.2㎝を測る。端部は面をなし，口縁下部には列点文を施す。その下に4条を単位とする櫛描直線文を施し，タテに摘んだ楕円形浮文を配す。内面は摩耗が激しく不明瞭であるが，ナデ調整が確認できる。胎土には砂粒を多く含む。45は口縁部の1/4ほど残存する。外反する口縁部であり，口径15.1㎝を測る。口縁下部には列点文を施し，その下にタテに摘んだ楕円形浮文を配す。櫛描直線文も残るが摩耗が激しく不明瞭である。内面も摩耗しており，調整は不明である。胎土には1～3㎜ほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。46は小型の壷と考えられ，口縁部の1/3ほど残存する。大きく外反する口縁部で，口径12.0㎝を測り，下端に刻みを施す。外面は摩耗しており調整不明であるが，口縁下部に径3㎜ほどの孔を穿ち（2ヵ所確認），頸部には楕円形浮文を配す。内面はナデ調整を施す。47は口縁部破片で，口径16.4㎝を測る。大きく開く口縁部で，粘土帯を貼付して肥厚させており，口縁端部は面をなす。口縁下部には棒状または楕円形と思われる浮文を施しているが，摩耗のため不明瞭である。

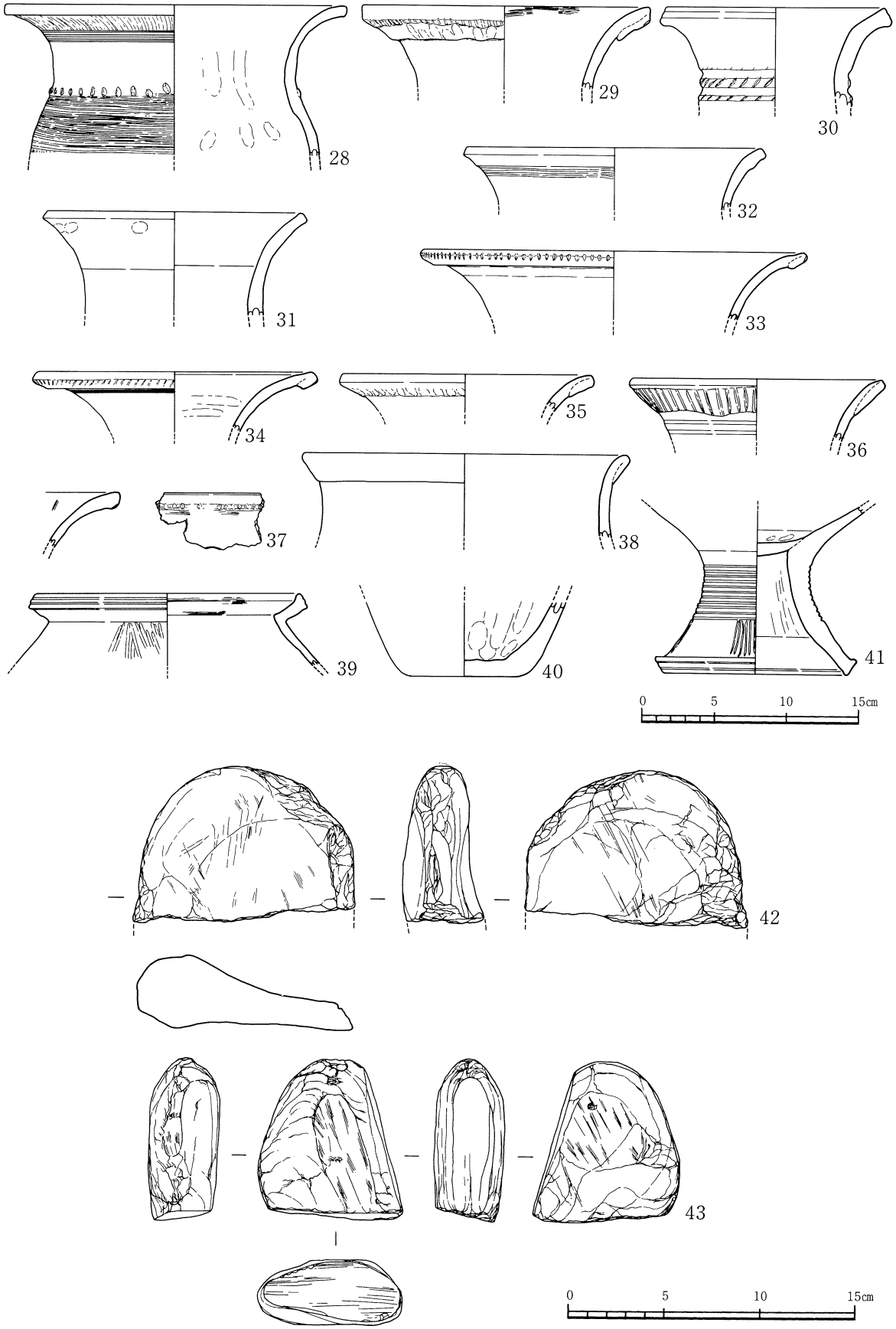


Fig.15　SK－1埋土1 出土遺物実測図

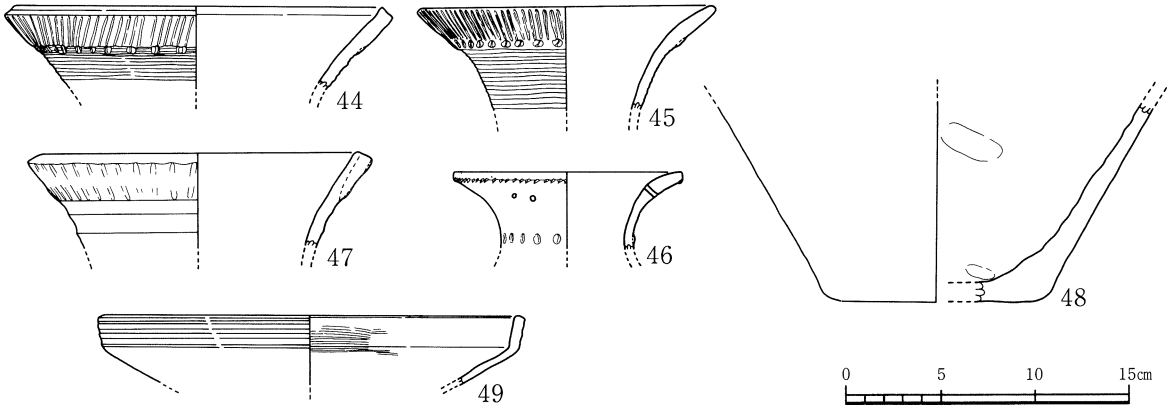


Fig.16　SK－1埋土2 出土遺物実測図

内面は完全に摩耗しており調整不明である。

48は底径11.3cmを測る底部であり，1/4ほど残存する。平底の底部から胴部はほぼ真直ぐ外上方に上がる。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。

49は高杯の杯部の破片で，口径21.7cmを測る。直線的に開く体部から口縁部はほぼ真直ぐ上がる。胎土が軟質であり内外面とも摩耗が激しく不明瞭であるが，口縁部外面には3条の凹線文，内面にはハケ調整が確認できる。

(3) B区の調査

調査第Ⅰ区の2段目に当たる平坦部は，ほぼ同じ標高で北と北西の2ヵ所に突出する部分があり，北に突出する部分をB区とした。面積は約45m²と狭く，標高は82.69～83.97mで，調査した平坦部の中ではやや傾斜が強く，自然に形成された面であると考えられる。土層の状況は第Ⅰ層約20cm，第Ⅱ層約5cmの下に第Ⅲ層（遺物包含層）が30cmほどの厚さに堆積している。第Ⅰ層，第Ⅱ層からは数点の弥生土器細片が，第Ⅲ層からは弥生土器約1,200点や数点の石製品が出土している。遺構は土坑1基を確認した。

①堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器（Fig.17－50～65）

50～53は壷の口縁部から胴部にかけて残存するものであり，どれも大きく外反する口縁部である。50は口縁部がほぼ完存し，膨らんだ胴部から大きく外反する。口径25.9cmを測り，下端には刻みを有す。外面は摩耗しており調整は不明であるが，上胴部に櫛描直線文を施し，その上に竹管による大小の刺突文を施す。内面も摩耗が激しく不明瞭であるが，ナデ調整を施したものと考えられる。51は口縁部の1/3ほどが残存し，やや膨らむ胴部から口縁部は大きく外反する。口径20.0cm，胴径19.1cmを測り，端部は浅い凹面をなす。内外面とも摩耗が激しく，調整は不明である。52も口縁部の1/3ほどが残存する。口径19.6cmを測り，端部には粘土帯を貼付し肥厚させており，下端に刻みを有す。外面は摩耗のため不明瞭であるが，ナデ調整ののち頸部に櫛描直線文を施し，中央を竹管で刺突した円形浮文を貼付する。内面は完全に摩耗しており，調整不明である。53は口縁部の1/4

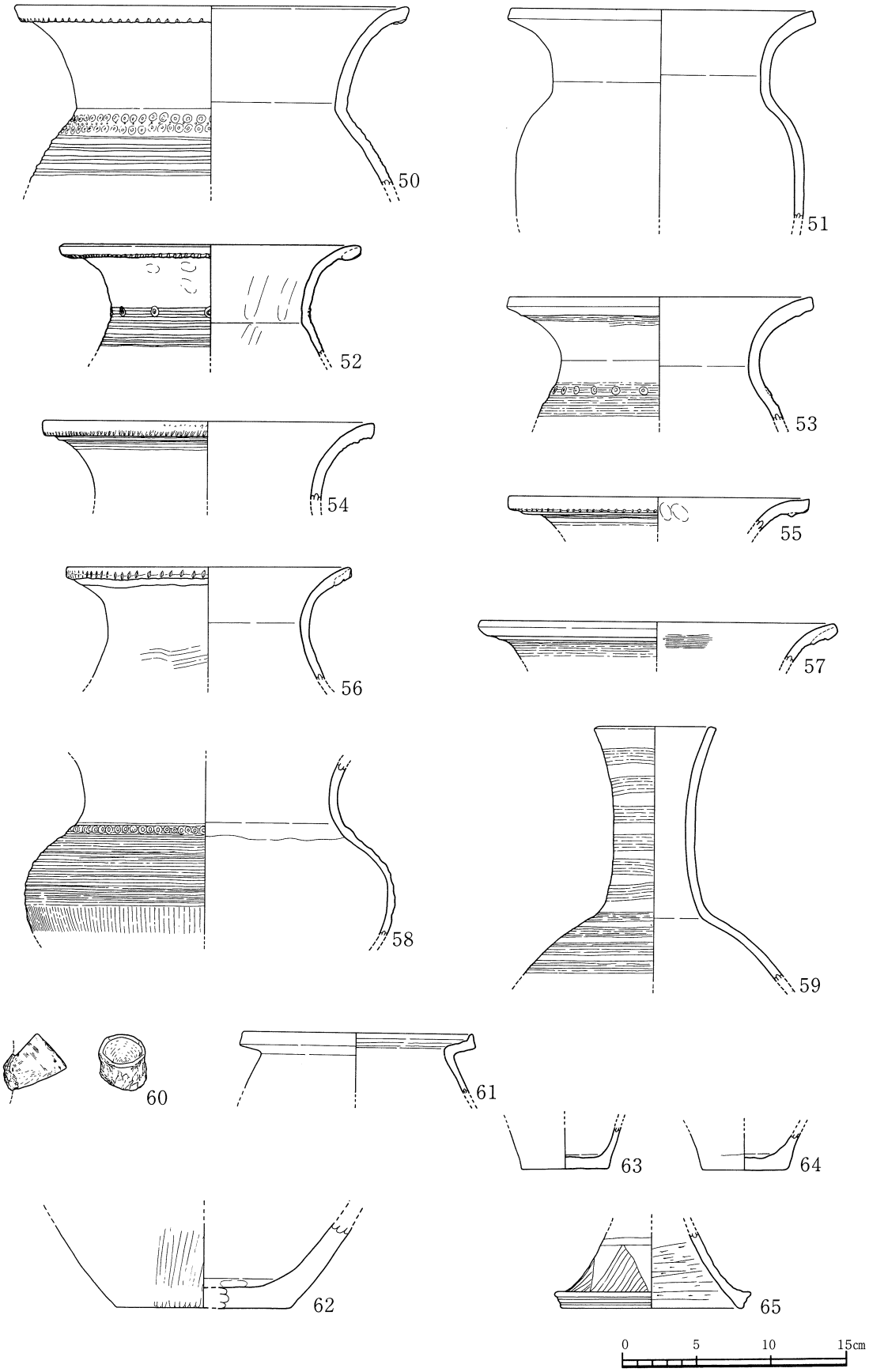


Fig.17　B区第Ⅲ層 出土遺物実測図

ほどが残存しており，口径は19.9cmを測る。口縁下部には断面三角形の微隆起帯が巡り，櫛描直線文を施す。外面は摩耗しており調整は不明である。上胴部に4条を単位とする櫛描直線文を施し，その上に中央を竹管で刺突した円形浮文を貼付する。内面も摩耗が激しく不明瞭であるが，ナデ調整を施したものと考えられる。54～57は壷の口縁部である。これらも大きく外反するものであり，54～56は口縁部の1/5～1/6ほど残存する。54は口径21.8cmを測り，口縁下端に刻みを有す。口縁下部には4条を単位とする櫛描直線文を施す。器面調整は，内外面とも摩耗のため不明であり，胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。55は口径20.0cmを測り，口縁下端には刻みを有す。口縁下部には断面三角形の微隆起帯が巡り，櫛描直線文を施す。内面はナデ調整を施し，指頭圧痕が残る。56は口径18.8cmを測る。口縁端部に粘土帯を貼付し，やや肥厚させており，下端に刻みを有す。頸部外面にはナデ調整が確認できるが，内面は摩耗しており調整不明である。頸部下方に櫛描波状文が認められるが，摩耗のため不明瞭である。57は口縁部破片で，口径23.4cmを測る。口縁端部に粘土帯を貼付し肥厚させており，口縁下部には櫛描直線文を施す。内面には部分的にハケ目が残るが，ほとんど摩滅している。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。58は壷の胴部破片で胴径24.4cmを測る張りのある胴部である。外面は頸部付近にナデ調整，胴部には櫛描直線文を施し，中央を竹管で刺突した円形浮文を配す。内面は摩耗しており調整は不明である。59は長頸壷の口縁部から上胴部であり，口径7.4cmを測る。頸部の残りは良いが，口縁端部付近はほとんど欠損する。大きく膨らんだ胴部から頸部が長く延び，口縁部は緩やかに開く。外面には5～6条を単位とする櫛描直線文を施し，内面にはナデ調整を施す。形態や櫛描文は101に類似する。60は

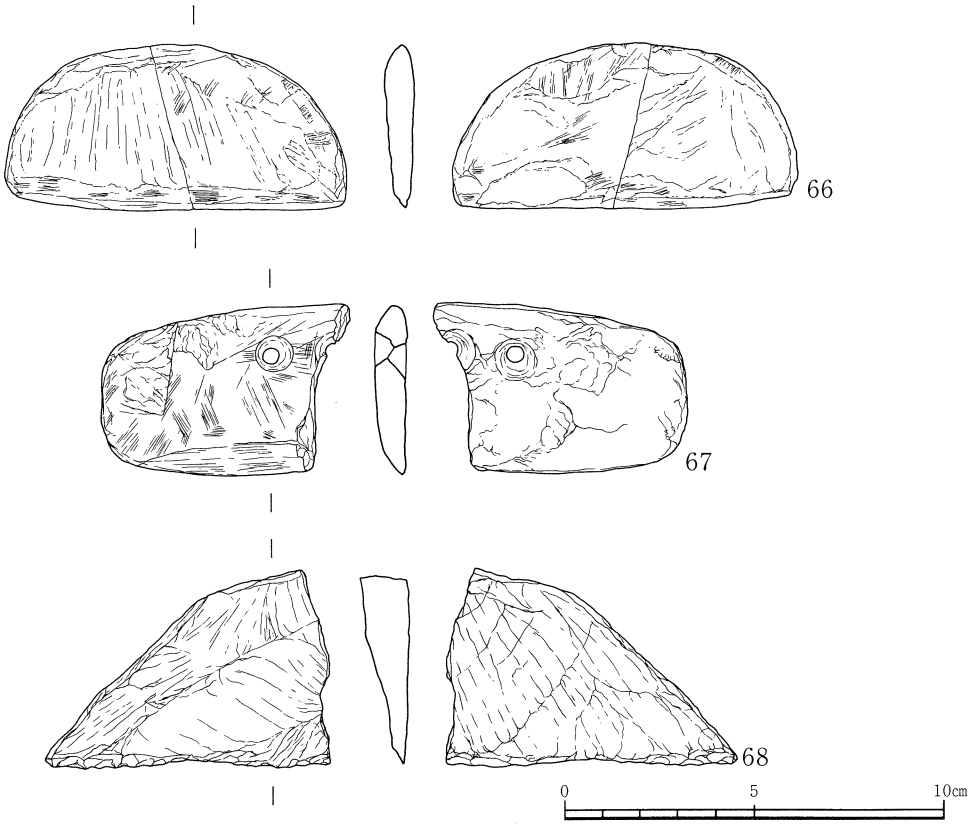


Fig.18　B区第Ⅲ層 出土遺物実測図

壷の注口と考えられる。径3.1cmを測る中空のもので，丁寧なナデ調整を施す。注口部分しか残存せず，全体的な形態については不明である。

61は甕で口縁部の1/4ほど残存し，口径15.1cmを測る。くの字状に強く外傾する口縁部で，上方に拡張する。摩耗が激しく，調整は内外面とも不明である。

62～64は底部である。62は1/2ほど残存する平底の底部で，底径11.4cmを測る。胴部外面はヘラ磨きを施し，煤の付着が残存する。底部付近にはヘラ磨きの方向に直行するようにナデた痕跡が確認できる。内底面には指頭圧痕が残り，胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。63は平底の底部のみが完存する。底径5.8cmを測る。64は1/2ほど残存する平底の底部であり，底径5.6cmを測る。63，64共に内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。

65は高杯で脚台部の1/4ほど残存し，底径12.0cmを測る。裾部は八の字状に開き，裾端部を拡張し2条の凹線文を施す。脚部外面にはヨコ方向に2条の直線文が巡り，その下には鋸歯文を，鋸歯文の中には斜めの直線文を施す。これらの鋸歯文や直線文は鋭い金属原体によって施文されたものと考えられる。内面にはヘラ削りを施す。

石製品 (Fig.18－66～68)

66～68は石包丁である。66は磨製石包丁で完存し，全長8.9cm，全幅4.4cm，全厚0.8cmを測る。湾曲部と直線部を有する両刃の石包丁であり，刃部は丁寧に研磨されている。無穴であり，石材は泥岩である。67も磨製石包丁で1/2ほど残存し，残存長6.6cm，全幅4.6cm，全厚0.9cmを測る。ほぼ直線的な片刃の刃部を有し，全面を丁寧な研磨によって仕上げる。中央部の棟近くに双孔を穿つ。石材は泥岩と考えられる。68は打製石包丁で1/2ほど残存し，残存長7.5cm，全幅5.3cm，全厚1.2cmを測る。剥離によって形を整えており，直線的な片刃の刃部は比較的丁寧に仕上げられている。石材はサヌカイトである。

②遺構と遺物

ｉ土坑

SK－2 (Fig.19)

不整楕円形の土坑で，長径2.05m，短径1.07m，深さ48cmを測る。長軸方向はN－16°－E，断面形は逆台形を呈す。埋土は3層に分層でき，埋土1は黄褐色砂質礫で小礫を多く含み，弥生土器7点が出土している。埋土2は黄褐色砂質礫で3cmほどの礫を多く含む。埋土3は黄褐色砂質礫で5cmを越える礫を多く含む。埋土2・3からは遺物は出土しておらず，埋土1から出土した弥生土器2点が復元図示できた。

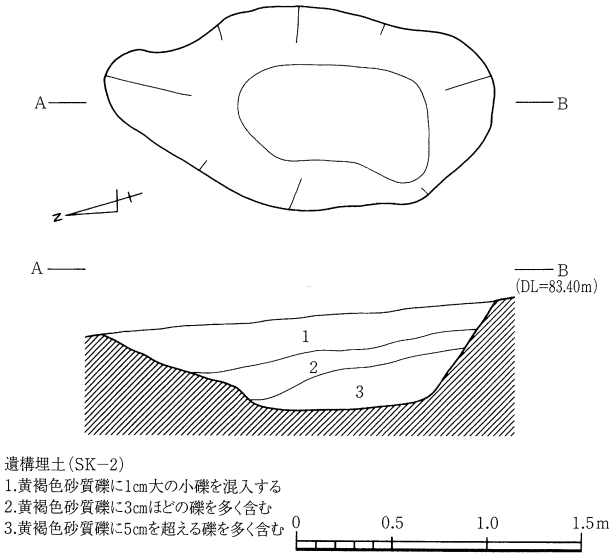


Fig.19　SK－2

出土遺物

弥生土器（Fig.20－69・70）

69は壷で口縁部のみ完存し，口径18.6cmを測る。外反する口縁部で，端部は浅い凹面をなし，中央を刺突する円形浮文を配す。外面はハケ調整を施し，頸部に1条の沈線が巡る。内面にもハケ調整を施す。胎土には1～4mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。

70は底部で器種は壷または甕と考えられる。底径8.0cmを測る平底の底部から，胴部はほぼ真直ぐ外上方に上がる。胴部は外面にヘラ磨き，内面にヘラ削りを施す。内底面には指頭圧痕が残る。

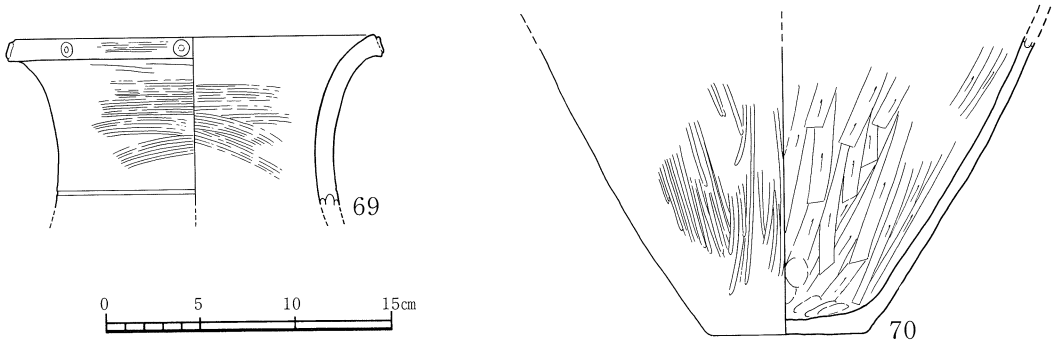


Fig.20　SK－2 出土遺物実測図

(4) C区の調査（Fig.21）

調査第Ⅰ区の2段目で北西に突出する平坦部をC区とした。C区全体の面積は約77m²である。第Ⅰ層が約10cm，第Ⅱ層が約30cmほど堆積し，その下に約20cmの厚さに第Ⅲ層（遺物包含層）が堆積する。また第Ⅲ層の下に部分的にではあるが，第Ⅳ層が薄く堆積する。第Ⅲ層を除去した段階で，この平坦部は等高線に添って細長い断面L字状の地形をみせており，人為的に削り平坦面を造成したものと考えられ，これを段状遺構1とした。段状遺構1は長さ約14.2m，幅約4.5m，段を形成する平坦面の面積は約53m²を測り，床面にはL字状の柵列（SA－1）を伴う。床面の標高は83.10～83.32mであり，ほとんど傾斜は感じられない。出土遺物は第Ⅰ層からは細片のみであるが，陶磁器類約20点，須恵器2点，弥生土器10点，石製品数点が出土している。第Ⅲ層からは約200点の弥生土器と20数点の石製品が出土している。出土した石製品の中には投弾と考えられる川原石が10点含まれる。全長4.4～5.4cm，重量46～71gを測る丸石であり，平坦面南部からまとまって出土している。なお，第Ⅲ層の下に堆積する第Ⅲ'層（黒褐色砂質シルト層）は植物の腐食したものと考えられる。また層序確認のため，C～D区の間にトレンチを設置し，TR－4とした。TR－4からの出土遺物は皆無であった。

①堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器（Fig.22－71～82）

71～74は壷であり，どれも大きく開く口縁部である。71は1/4ほど残存し，口径22.2cmを測る。粘土帯を貼付して肥厚させており，粘土帯外面には列点文を有する。内面はナデ調整を施しており，外面は摩耗が激しく調整不明である。72は口径21.8cmを測る口縁部破片であり，粘土帯を貼付して

肥厚させており，端部は浅い凹面をなす。粘土帯外面には列点文を有し，円形浮文を貼り付ける。内外面とも摩耗が激しく，内面は調整不明であり，外面には不明瞭ながら櫛描文の痕跡が残る。73は口径15.5cmを測る口縁部破片であり，口縁下部に列点文を施す。内外面とも摩耗しており調整不明である。74は口径24.1cmを測る口縁部破片であり，端部は面をなし格子状の刻みを有す。内外面とも摩耗しており，調整は不明であるが，内面には指頭圧痕が残る。75は長頸壷の口縁部から上胴部であり，口縁部は完存する。頸部から口縁部にかけて大きく開き，口径13.3cmを測る。口縁端部は浅い凹面をなし，口縁下部に列点文を施す。頸部及び上胴部には櫛描直線文を施す。内面は調整は不明であるが，指頭圧痕が残る。76は長頸壷の口縁部破片である。外上方にやや開く口縁部であり，口径10.5cmを測る。粘土を折り曲げ，若干肥厚させており，口縁端部は面をなす。口縁下部には列点文とタテに摘んだ楕円形浮文を配し，頸部外面には櫛描直線文を施す。内面は摩耗しており調整は不明であるが，指頭圧痕が残る。

77は底径8.0cmを測る平底の底部であり，底部から胴部にかけて残存する。胴部は外面にヘラ磨きを施し，煤の付着が確認できる。内面は摩耗しており調整不明である。78は底径9.0cmを測る平底の底部で，

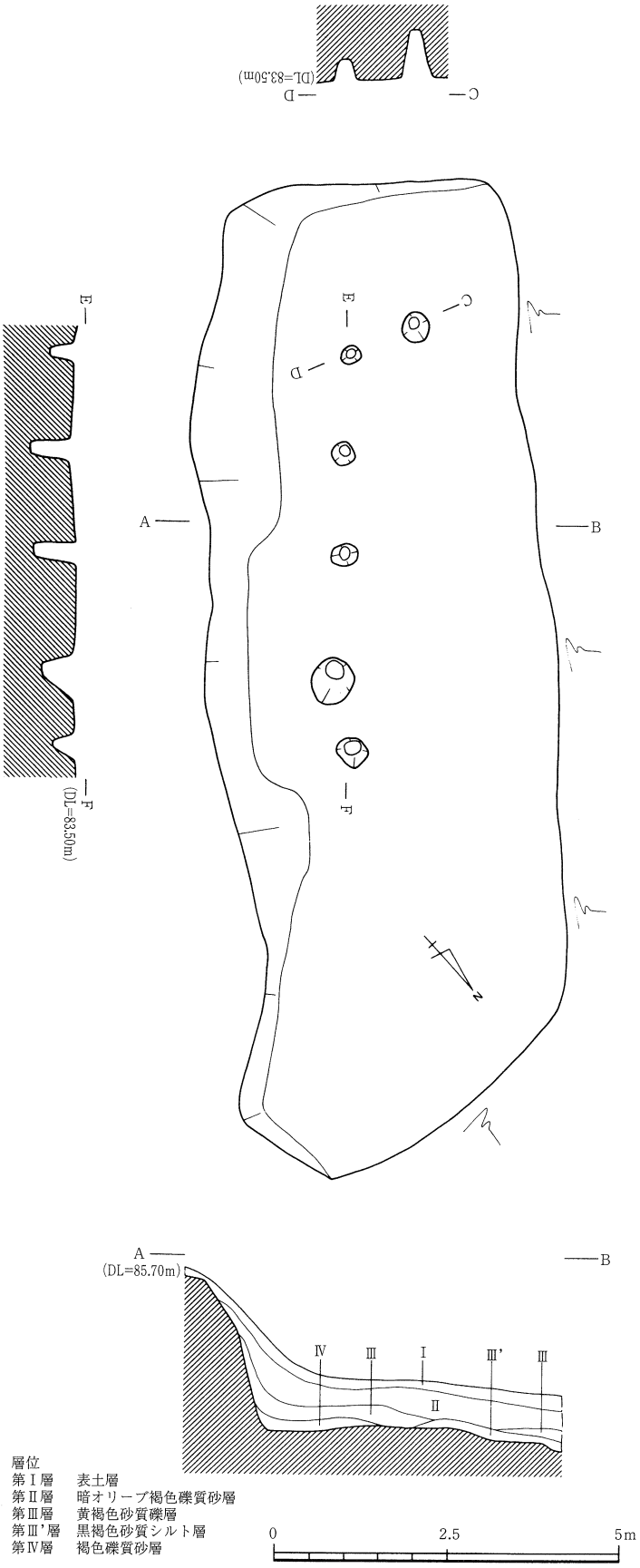


Fig.21　段状遺構 1

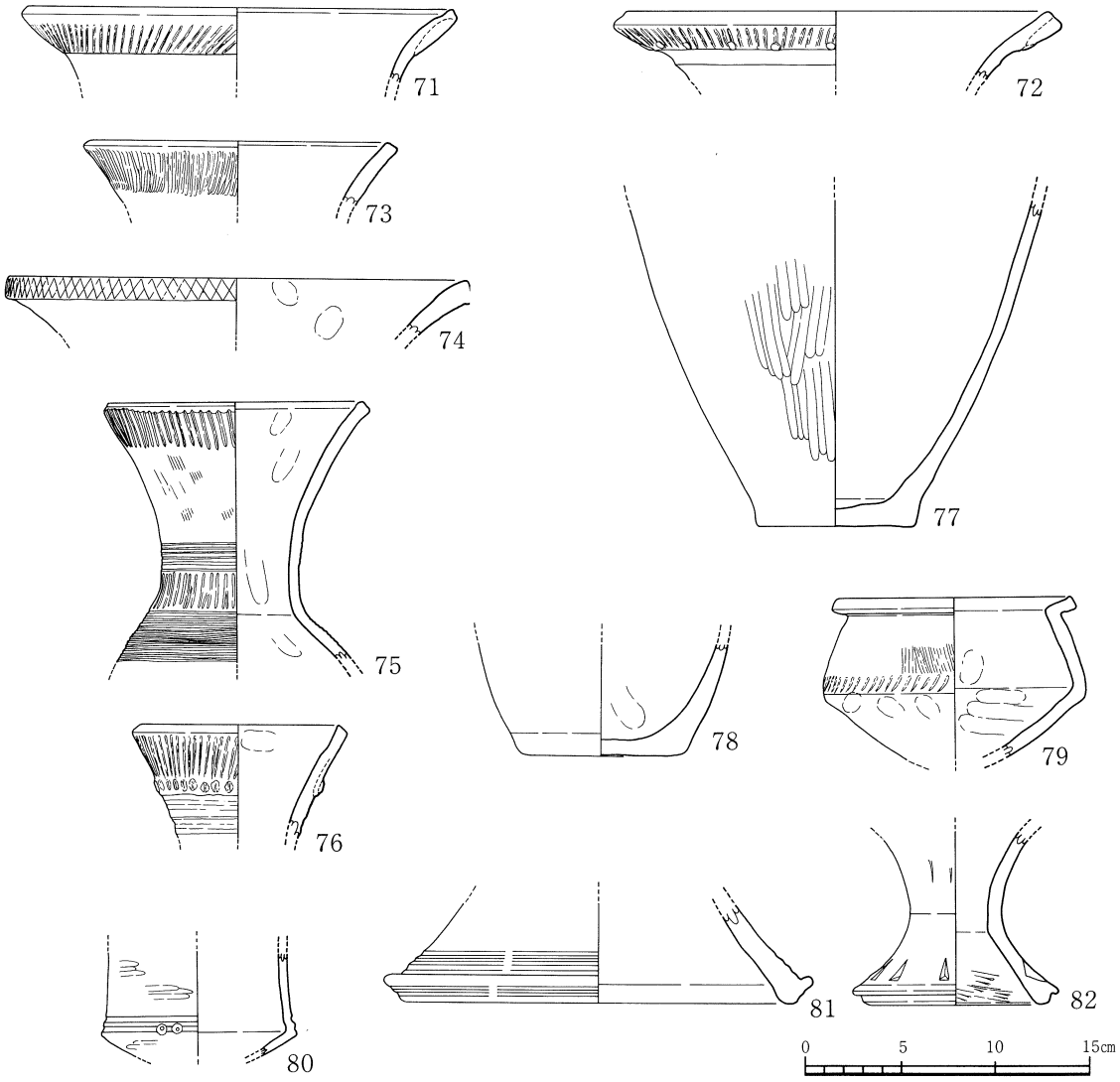


Fig.22　C区第Ⅲ層 出土遺物実測図

1/2ほど残存する。外面は摩耗が激しく調整は不明である。内面も不明瞭であるが，指頭圧痕が確認できる。

79は鉢で1/4ほど残存し，口径12.2cm，胴径13.8cmを測る。口縁部はくの字状に強く外傾し，体部も稜を持って屈曲する。外面にはハケ調整を施し，体部中央に列点文が巡る。体部下位には指頭圧痕が残る。内面は摩耗のため調整は不明であるが，指頭圧痕は確認できる。胎土には2～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。

80～82は高杯である。80は杯部の破片と考えられる。外面に2条の凹線文が巡り，2個を1単位とした円形浮文を配す。浮文は中央を竹管で刺突したものである。外面は不明瞭であるが，ヘラ磨きが確認できる。内面にはナデ調整を施す。81は裾部の破片であり，底径20.5cmを測る。裾部は八の字状に開き，3条の凹線文を施す。裾端部は拡張しており，2条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整を施す。82は脚台部の破片であり，底径9.0cmを測る。裾部は八の字状に開き，裾端部を拡張し1条の凹線文が巡る。外面には全体にナデ調整を施す。脚部外面に2条の直線文を施し，裾部外面に

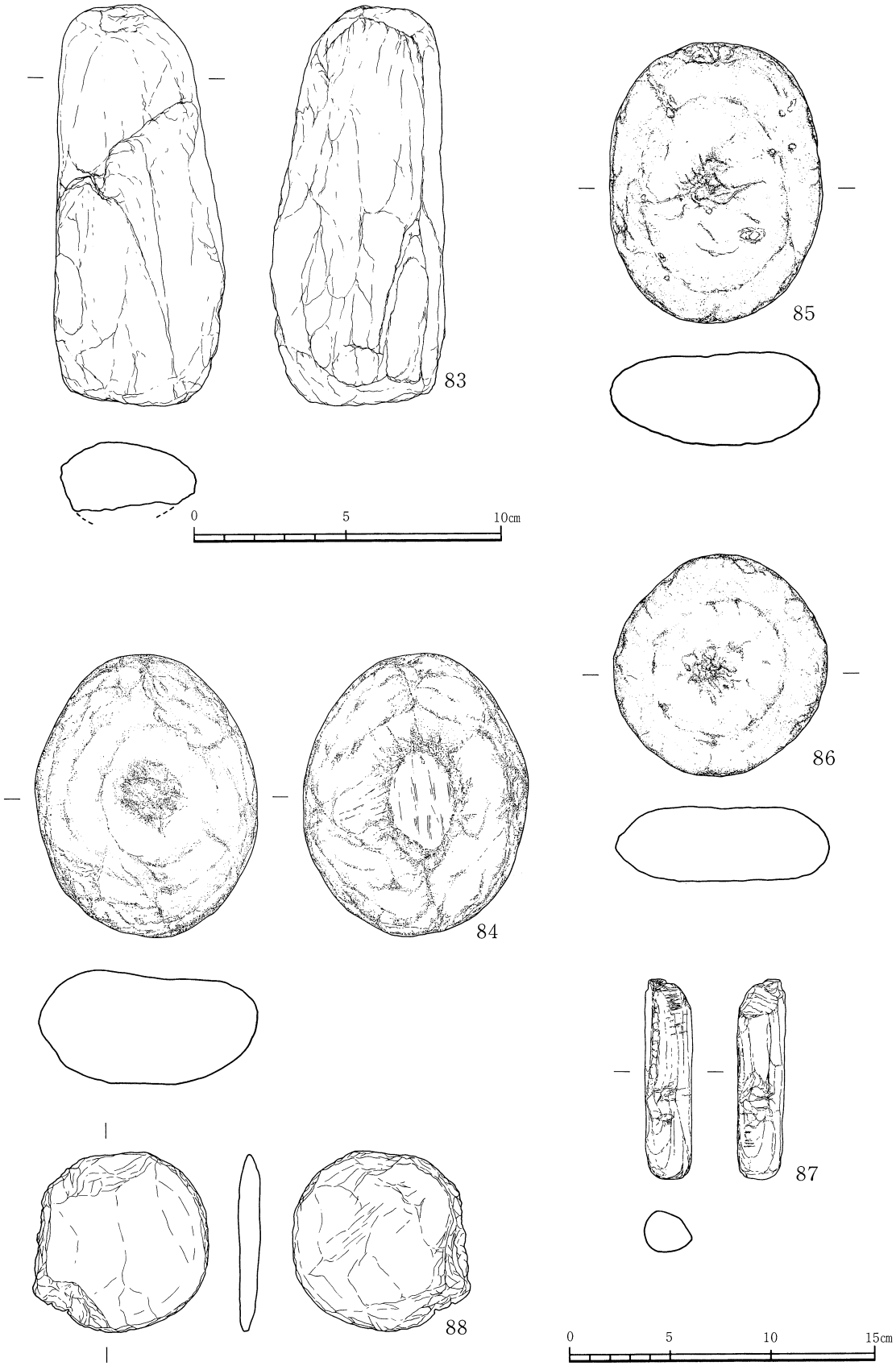


Fig.23　C区第Ⅲ層 出土遺物実測図

は三角形の深い刻みが巡る。ともに鋭い金属原体によるものと考えられる。内面にはヘラ削りが確認できる。焼成は不良であるが，胎土に含まれる砂粒は精選された均一のものである。

石製品 (Fig.23－83～88)

83は磨製石斧でほぼ完存し，全長13.2㎝，全幅5.6㎝，全厚2.2㎝を測る。側面は研磨と敲打によって整え刃部は使用により磨り減っている。基部にも一部欠落がみられる。石材は緑色片岩である。

84～87は叩石と考えられる。84は明瞭な敲打痕はみられないものの，片面の中央部に窪みがある。またもう片面は座りのよいように扁平に磨いており，叩石として使用した可能性が考えられる。完存し全長13.9㎝，全幅10.3㎝，全厚5.7㎝を測り，石材は石英斑岩と考えられる。85は完存し，全長13.7㎝，全幅10.3㎝，全厚4.6㎝を測る。片面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。石材は花崗岩である。86も完存し，全長10.9㎝，全幅10.3㎝，全厚3.7㎝を測る。片面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。石材は花崗岩である。87は一部欠損し，残存長9.8㎝，全幅2.3㎝，全厚2.0㎝を測る。先端部は使用により若干摩滅している。切断部付近に金属器，または石器によるものと考えられる直線的な傷跡が十数条ほど平行に残る。

88は用途不明の石製品である。周りの一部を欠いて円盤状に成形している。磨いた痕跡や，使用した痕跡はみられない。全長8.6㎝，全幅8.9㎝，全厚1.1㎝を測る。石材は泥岩である。

②遺構と遺物

ｉ柵列

SA－1 (Fig.21)

7.32ｍに渡って5間分を検出した。柱間寸法は1.00～1.70ｍと様々であり，柱穴は径30～65㎝のほぼ円形で，深さは35～71㎝を測る。埋土はどれも褐色礫質砂であるが，北から3番目のピットは包含層出土遺物の75・77が蓋となっており，遺物を取り上げると柱穴は空洞であった。よって埋土は無い。ピットからはそれぞれ1～20点ほど弥生土器細片が出土したが復元図示できるものはなかった。

(5) D区の調査 (Fig.24)

D区は調査第Ⅰ区の3段目に当たる平坦部で，面積は約78㎡を測り，北西に緩やかに傾斜する。C区同様，遺物包含層を除去すると断面L字状の地形が出現し，段状遺構2とした。段状遺構2は長さ16.4ｍ，幅3.2ｍを測り，段を形成する平坦面の面積は約40㎡を測る。床面の標高は77.60～77.80ｍで，ほぼ平坦であり床面には柵列（SA－2）を検出した。また第Ⅲ層中に土坑を2基（SK－3・4）検出した。D区の土層の状況は第Ⅰ層の堆積がみられず，第Ⅱ層約20㎝の下に第Ⅲ層（遺物包含層）が40㎝ほどの厚さで堆積する。またその下に極めて部分的ながら第Ⅳ層の堆積もみられた。第Ⅱ層からは数点の石製品が，第Ⅲ層からは約1,000点の弥生土器及び10数点の石製品が出土している。出土した石製品のうち，投弾と考えられる川原石が第Ⅱ層から6点，第Ⅲ層から7点出土している。全長4.1～5.0㎝，重量40～71ｇを測る。層序確認のため，D～E区の間にトレンチを設置しTR－5とした。トレンチから出土遺物は皆無であった。

①堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

石製品（Fig.25－89）

89は全長9.1cm，全幅8.0cm，全厚4.5cmを測る。両面に明瞭な敲打痕が残っており，叩石として使用されたことは確実であるが，両端部を欠いており，その他の用途に使用していた可能性も考えられる。石材は安山岩である。

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器（Fig.26－90～110）

90は壷で1/4ほど残存し，口径18.8cm，胴径23.8cmを測る。球形に近い胴部から口縁部は大きく外反し，端部には粘土帯を貼り付けやや肥厚させている。外面にはヘラ磨きを，内面にはヘラ削りを施し指頭圧痕が残る。口縁部内面はナデ調整を施す。胎土に含まれる砂粒は比較的精選されている。91は壷の口縁部から上胴部であり，口縁部は1/2ほど残存する。口径15.6cmを測り，大きく膨らむ胴部から口縁部はやや外反する。口縁端部を上下に拡張し，3条の凹線文を施す。外面には不明瞭ながらハケ目が残り，頸部には列点文を施す。内面にはナデ調整を施し，頸部には指頭圧痕が残る。焼成はやや不良であるが，胎土に含まれる砂粒は均一であり精選されている。92は壷の口縁部から頸部にかけて残存する。膨らんだ胴部から口縁部は大きく外反し，口径18.0cmを測る。口縁部を折り曲げて肥厚させ，下端に刻みを有す。外面はナデ調整を施し，上胴部には櫛描直線文，列点文，中央を竹管で刺突した円形浮文などを配す。内面にはナデ調整を施

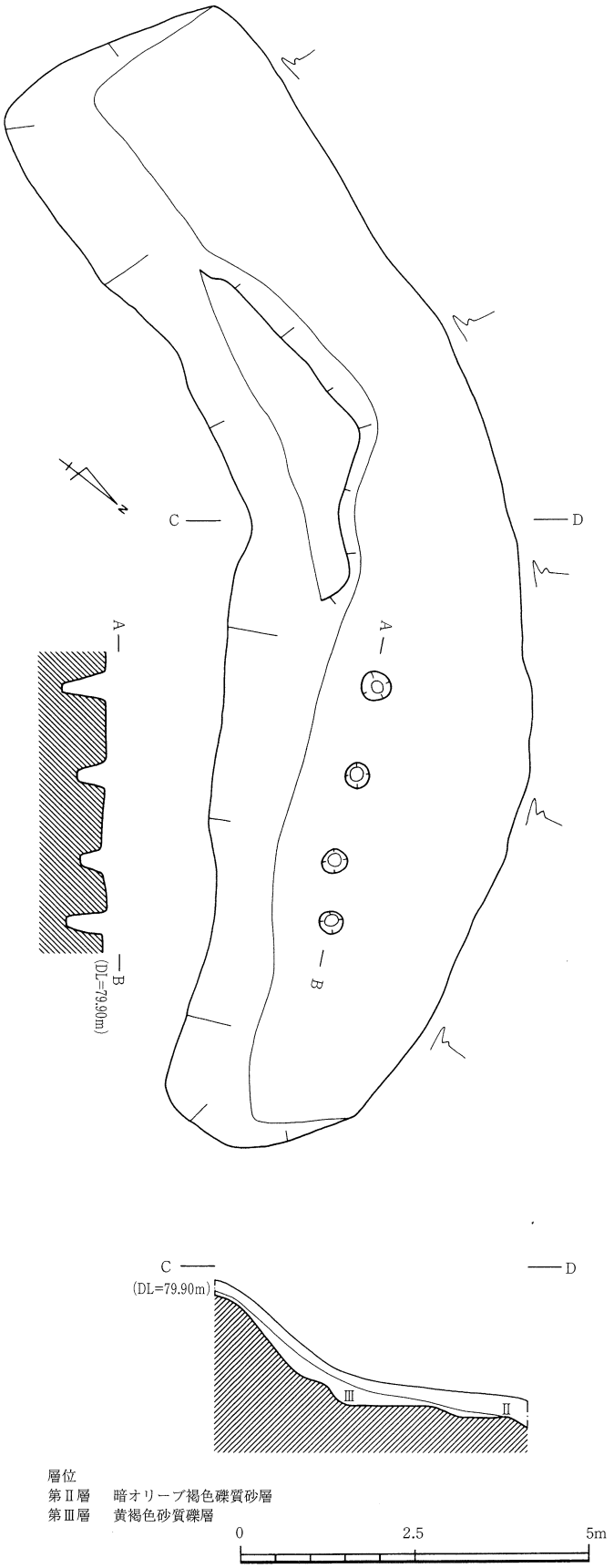


Fig.24　段状遺構 2

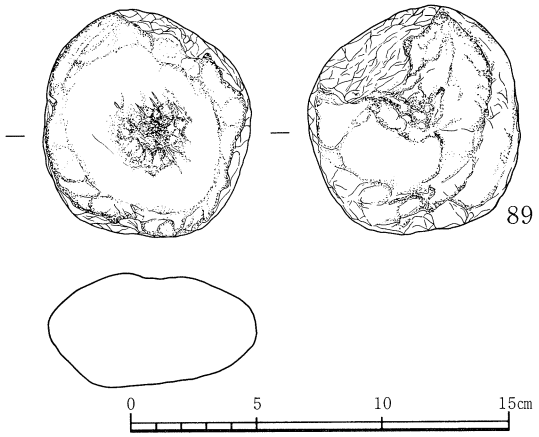


Fig.25　D区第Ⅰ層 出土遺物実測図

す。93は凹線文を有する口縁部である。1/6ほど残存し口径13.6cmを測る。やや外反する口縁部で，端部を上下に拡張し3条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整を施し，外面には煤の付着が残存する。胎土に含まれる砂粒は均一であり精選されている。94～97は壷の口縁部で大きく外反するものである。94は口径30.8cmを測る大型のもので1/5ほど残存し，端部に粘土帯を貼付して肥厚させている。下端には刻み，口縁下部には櫛描直線文を施すが摩耗のため不明瞭である。内面にはハケ調整を施す。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。95は口径15.1cmを測り，1/5ほど残存する。下端に刻みを有し，1条の微隆起帯が巡る。外面は摩耗が激しく調整不明であり，内面にはナデ調整を施す。96は口径17.0cmを測り，1/6ほど残存する。粘土帯を貼付して肥厚させており，下端に刻み，口縁下部には1条の微隆起帯と櫛描直線文を有す。摩耗が激しく調整は不明である。97も口径17.0cmを測り1/6ほど残存する。口縁下部に1条の微隆起帯が巡る。内外面とも摩耗が激しく，調整は不明である。胎土には1～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。98は壷の口縁部破片で口径15.2cmを測り，直立気味の頸部から口縁部は強く外反する。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。99・100は壷の頸部の破片である。99は外面に櫛描直線文を施し，その上に竹管で2ヵ所刺突した円形浮文を配す。内面にはハケ調整を施す。胎土には1～2mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。100は外面に4条を単位とする櫛描直線文，棒状の浮文，中央を竹管で刺突した円形浮文などを配す。内面は摩耗しており，調整は不明である。101～104は長頸壷である。101は口縁部のみ完存し，口径11.3cmを測る。59に類似しており，頸部から口縁部にかけて緩やかに開く。口縁端部は面をなし，口縁下部には円形浮文を配す。外面には5～6条を単位とする櫛描直線文を施す。内面には板ナデ調整を施す。102は口縁部の1/6ほど残存し，口径11.9cmを測る。外上方にやや開く口縁部であり，口縁下部には列点文と長径6mmほどの楕円形浮文を配し，櫛描直線文を施す。内面は摩耗しており調整不明である。103は口縁部破片であり，口径12.7cmを測る。若干外反する口縁部であり，粘土を折り曲げて肥厚させている。外面にはタテ方向にハケ目が残り，浮文を貼付する。内面は摩耗しており調整は不明である。胎土には2～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。104は口径12.3cmを測るやや外反する口縁部で下端に刻みを有す。摩耗により調整は不明である。

105～107は甕である。105は口縁部の1/4ほど残存し，口径21.9cmを測る。外反する口縁部で，粘土を折り曲げて肥厚させており，下端に刻みを有す。口縁下部には指頭圧痕が残り，頸部には不明瞭ながら櫛描直線文を施す。摩耗が激しく，調整は内外面とも不明である。106は口縁部の1/3ほど残存し，口径14.0cmを測る。外反する口縁部で，端部は浅い凹面をなす。外面は摩耗が激しく調整は不明であり，内面はナデ調整を施す。107は口縁部の破片である。緩やかに外反する口縁部であり，口径14.6cmを測る。口縁端部を外側に折り曲げており，下端に刻みを有す。外面は摩耗により

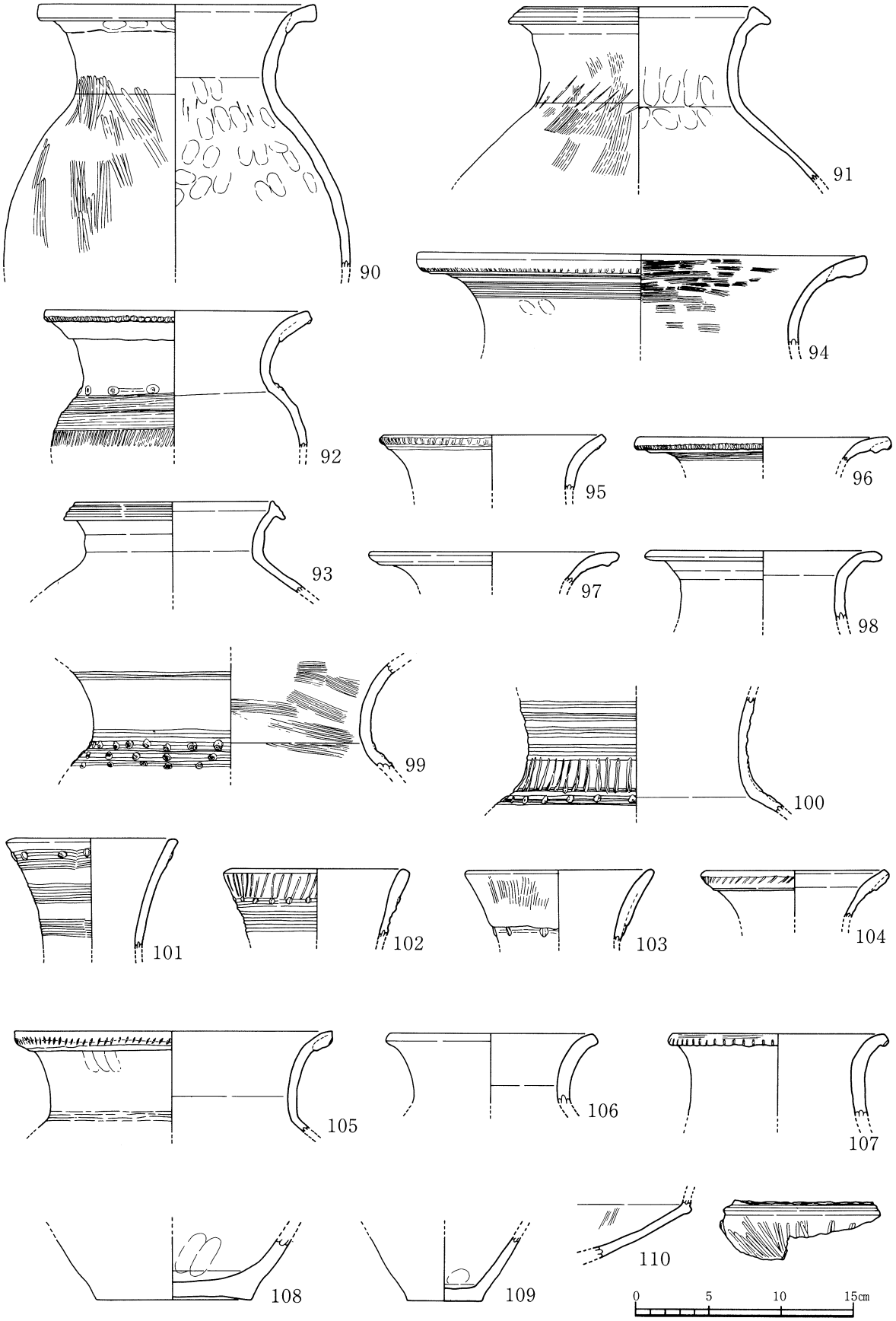
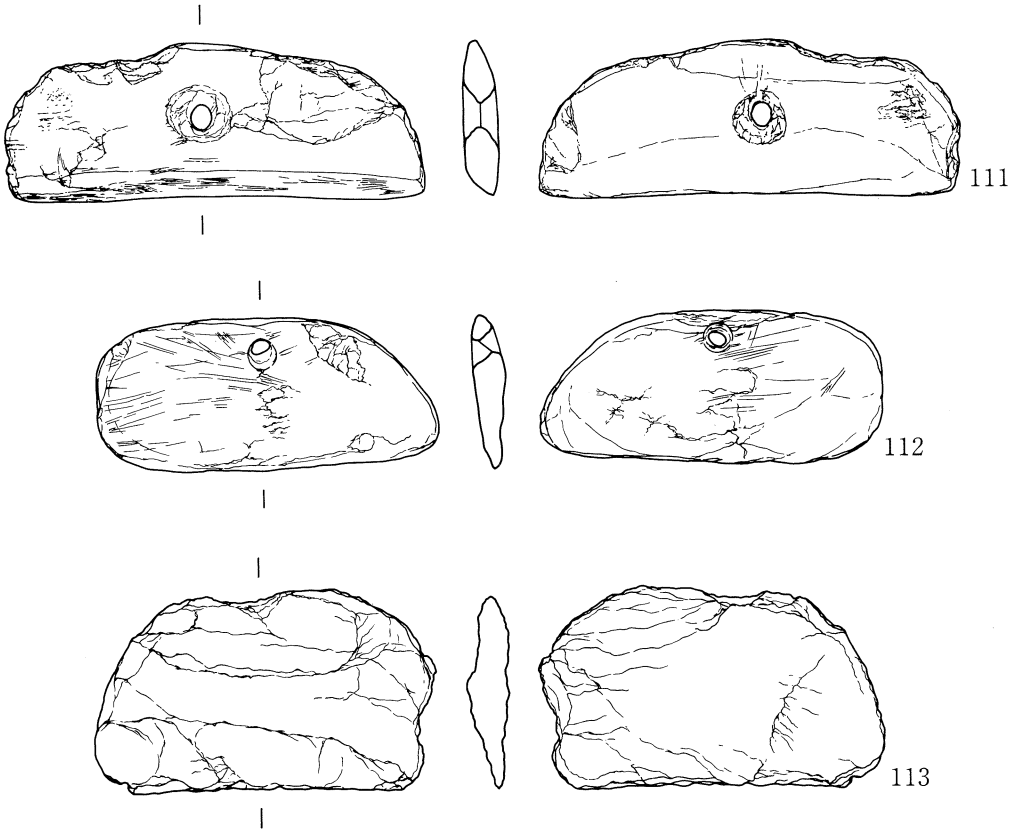


Fig.26　D区第Ⅲ層 出土遺物実測図



調整は不明で，内面はナデ調整を施す。

108・109は平底の底部である。108は底径10.6cmを測り，底部のみ完存する。外面は摩耗が激しく調整は不明である。内面には指頭圧痕が残る。胎土に含まれる砂粒は比較的均一である。109も底径5.2cmを測り，底部のみ完存する。内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。器壁は比較的薄く，堅緻である。

110は高杯の杯部の破片で，ほぼ直線的に開き，体部と口縁部の境は外側に張り出し稜をなす。稜の上には1条の凹線文が巡る。内面は摩耗しており調整不明であるが，外面には丁寧なヘラ磨きが施される。焼成は不良であるが，胎土に含まれる砂粒は精選された均一のものである。

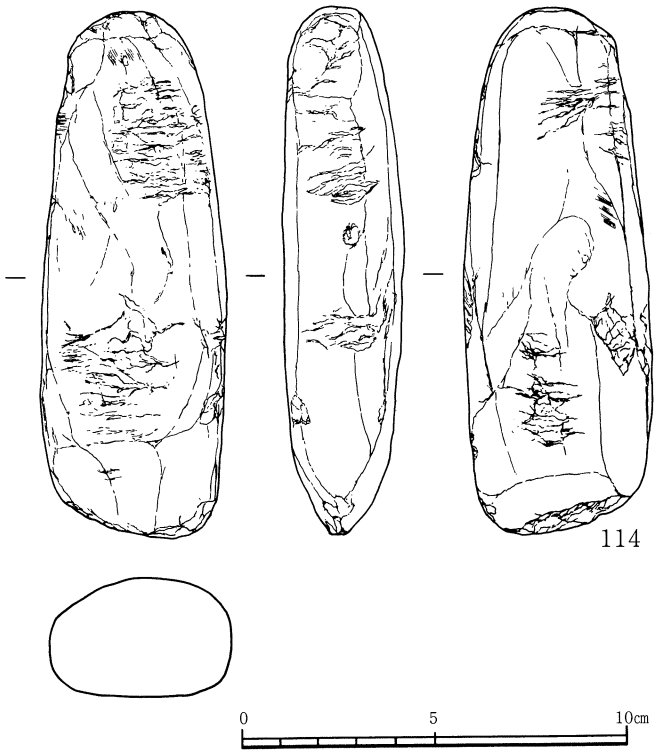


Fig.27　D区第Ⅲ層 出土遺物実測図

石製品（Fig.27－111～114）

111～113は石包丁と考えられる。111は磨製石包丁でほぼ完存し，全長11.0cm，全幅4.3cm，全厚0.9cmを測る。湾曲部と直線部を有し，直線部を刃部とする片刃の石包丁であり，中央部に孔を穿つ。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。石材は緑色岩と考えられる。112も磨製石包丁で完存し，全長8.9cm，全幅4.1cm，全厚0.9cmを測る。湾曲部と直線部を有し，直線部を刃部とする片刃の石包丁であり，中央部の棟近くに孔を穿つ。全体を比較的丁寧に研磨する。石材は泥岩である。113は明瞭な加工痕はみられないが，形状から石包丁として使用された可能性が考えられる。全長9.0cm，全幅5.4cm，全厚1.1cmを測る。石材は不明である。

114は磨製石斧で完存し，全長14.1cm，全幅4.9cm，全厚3.1cmを測る。全体を丁寧な研磨によって仕上げ，刃部は使用により一部欠落する。石材は緑色片岩である。

②遺構と遺物

ⅰ柵列

SA－2（Fig.24）

3.91mに渡って3間分を検出した。柱間寸法は0.90～1.30mと様々であり，柱穴は径35～42cmのほぼ円形で，深さは33～60cmを測る。埋土はどれも黄褐色砂質礫であり，北から1～3番目の柱穴からは2～7点の弥生土器が出土しているが，どれも細片であり復元図示できるものはなかった。

ⅱ土坑

SK－3（Fig.29）

第Ⅲ層中に確認した不整円形の土坑である。径1.06m，深さ31cmを測り，SK－4を切っている。長軸方向はN－6°－W，断面形はU字状を呈す。埋土はにぶい黄褐色砂質礫であり，炭化物を少量含む。弥生土器約100点が出土しており，4点が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.28－115～118）

115は壷の口縁部から上胴部にかけて残存し，口径23.9cm，胴径23.4cmを測る。大きく膨らむ胴部

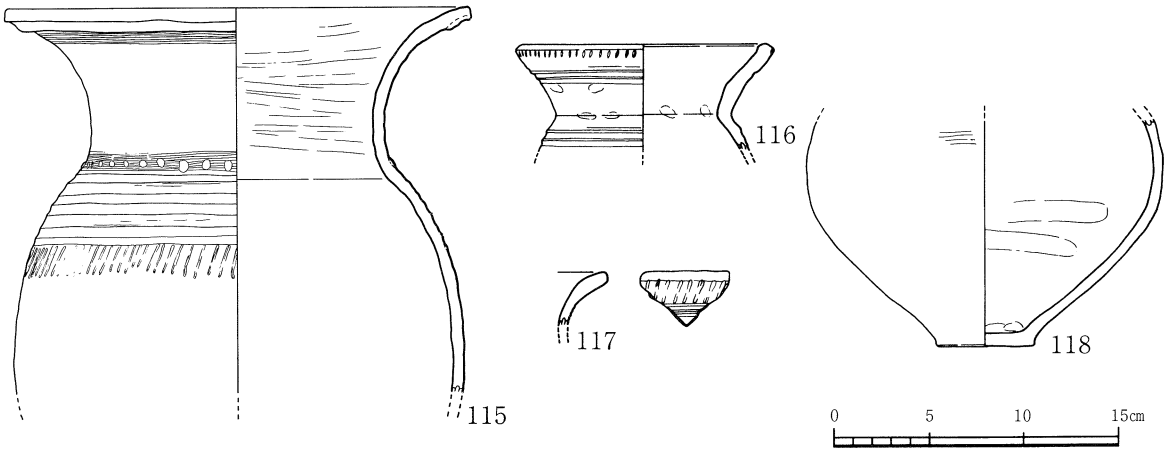


Fig.28　SK－3 出土遺物実測図

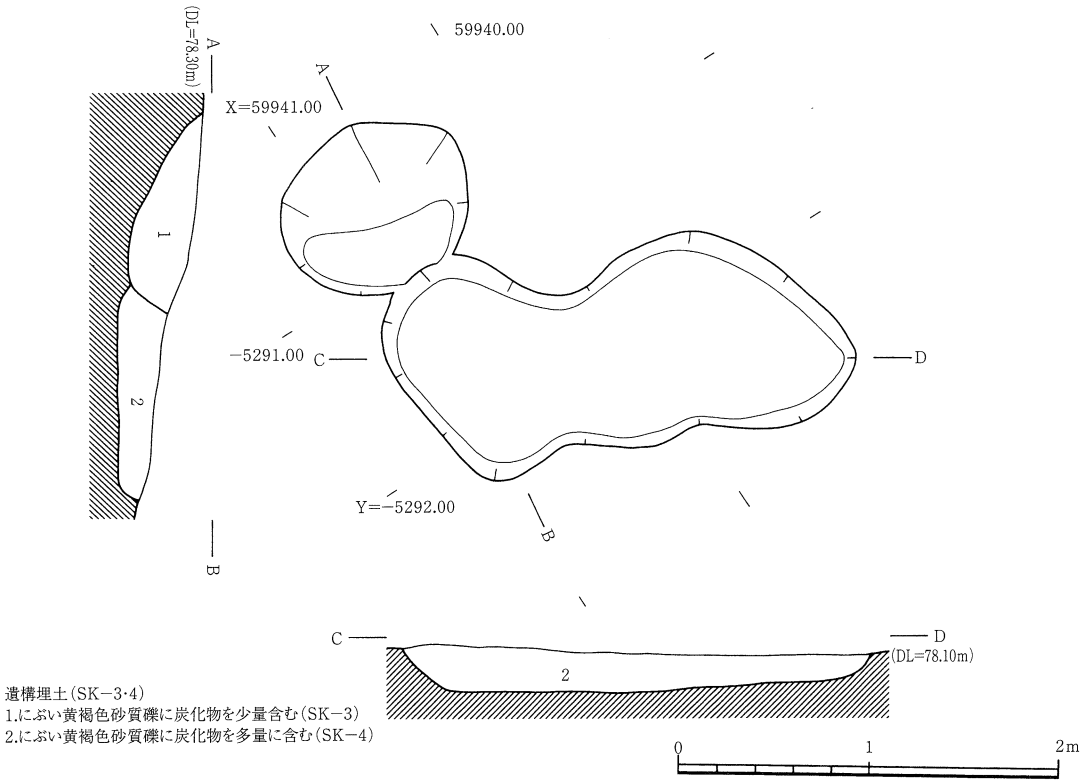


Fig.29　SK−3·4

から，口縁部は強く外反し，粘土帯を貼付して肥厚させている。口縁下部には櫛描直線文を，上胴部には櫛描直線文と円形浮文を配す。外面は摩耗により調整不明であるが，内面は口縁部にヘラ磨きを，胴部にはナデ調整を施す。116は口径12.6cmを測る比較的小型の壷で，口縁部の1/2ほど残存する。くの字状に外傾する口縁部で，口縁端部付近が若干内湾する。下端に刻みを有し，口縁下部と上胴部に櫛描直線文を施す。内外面にナデ調整を施す。117は壷の口縁部破片である。外反する口縁部で口縁下部に列点文と，櫛描直線文を施す。内外面とも摩耗しており調整は不明である。

118は底部であり1/2ほど残存する。小さな平底の底部から胴部は大きく膨らみ，底径4.8cm，胴径18.8cmを測る。摩耗が激しく調整は不明であるが，内面は指ナデ調整を施す。器種は壷である可能性が高いと考えられる。

SK−4 (Fig.29)

SK−3と同様，第Ⅲ層中に確認した不整形の土坑である。長径2.50m，短径1.08m，深さ24cmを測り，SK−3に切られる。長軸方向はN−34°−E，断面形は逆台形を呈す。埋土はにぶい黄褐色砂質礫であり，炭化物を多量に含む。弥生土器約200点が出土しており，そのうち1点が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.30−119)

119は甕の口縁部から上胴部であり，口縁部の1/3ほど残

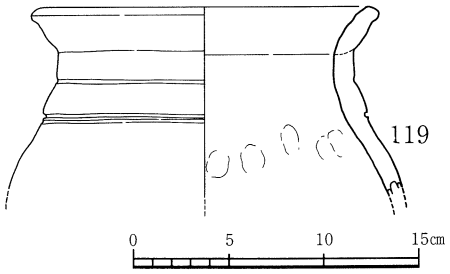


Fig.30　SK−4 出土遺物実測図

存する。緩やかに外反する口縁部であり，粘土帯を貼付している。口径は16.8cmを測る。頸部外面には2条の沈線が巡り，内面には指頭圧痕が多く残る。全体的に摩耗が激しく調整は不明である。

(6) E区の調査 (Fig.31)

E区は調査第Ⅰ区の4段目に当たる平坦部で，面積は約83㎡を測る。この段も包含層を除去した段階で，等高線に沿って断面L字状の細長い地形をなしており段状遺構3とした。段状遺構3は，長さ17.4m，幅2.1m，段を形成する平坦面の面積は約32㎡を測る。床面の標高は72.20～72.49mであり，緩やかに西へ傾斜する。付随する遺構は皆無であった。土層の堆積の状況は第Ⅰ層，第Ⅱ層が極く薄く堆積する下に，第Ⅲ層（遺物包含層）が東の壁面近くに70cmほどの厚さで堆積する。第Ⅰ層から陶磁器細片10点，弥生土器細片10点，石製品1点が，第Ⅱ層から弥生土器細片約100点が，また第Ⅲ層からは約380点の弥生土器と数十点の石製品が出土した。石製品の中には投弾と考えられる川原石が43点含まれる。これらは平坦面南部からまとまって出土しており，全長3cm大の小さいもの4点を含むものの，他は4.1～5.8cm，重量は34～79gを測る。

①堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器 (Fig.32－120～124)

120は壺の口縁部であり，口縁部は1/3ほど残存する。大きく外反する口縁部であり，口径19.8cmを測る。口縁端部は面をなし，口縁下部には列点文を施し，タテに摘んだ浮文を配す。口縁下部から頸部全体に櫛描直線文を施し，頸部と胴部の境にもタテに摘んだ浮文を配す。内面は摩耗が激しいが部分的にハケ目が残る。

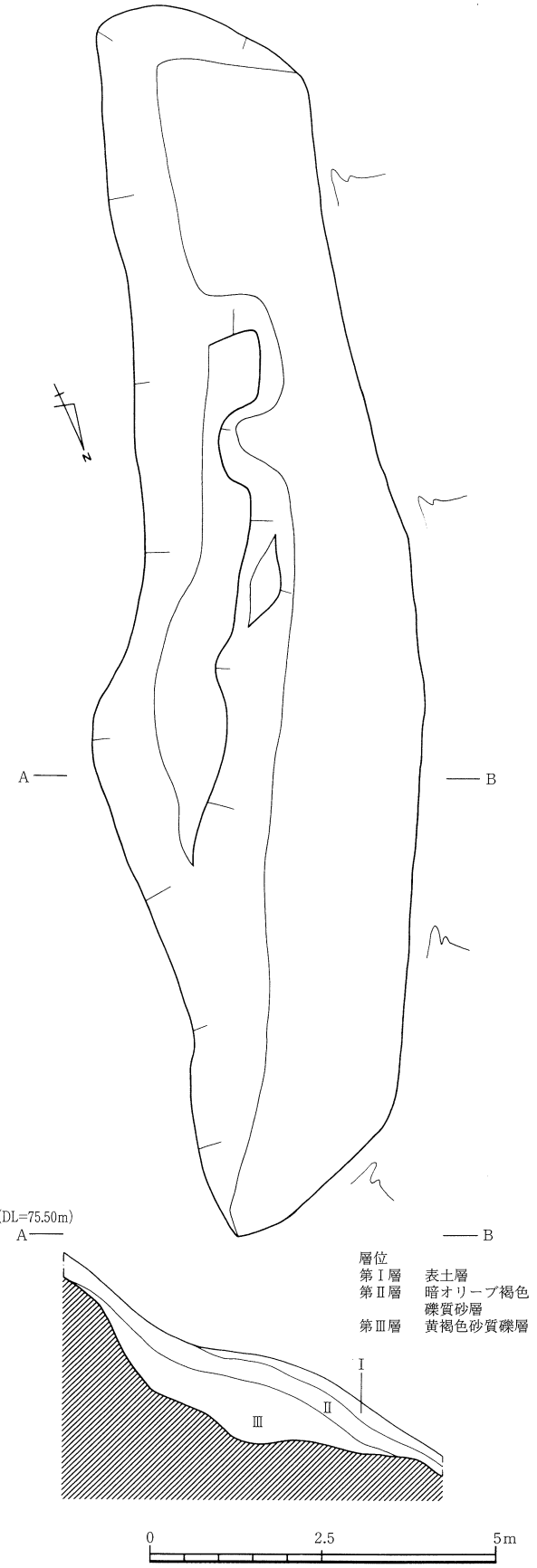


Fig.31　段状遺構 3

121・122は壷の口縁部破片である。共にやや外反する口縁部であり，粘土帯を貼付して肥厚させている。121は口縁下部に，ヘラ状工具による圧痕文を施す。摩耗が激しく内外面とも調整不明である。122は口縁下部に刻みを有し，櫛描直線文を施す。内外面ともナデ調整を施す。123・124は長頸壷である。123は口縁部の1/3ほど残存し，口径9.8cmを測る。外反する口縁部であり，粘土を折り曲げて肥厚させている。口縁下部に列点文，頸部外面には櫛描直線文を施す。櫛描文の上には，タテに摘んだ楕円形浮文を配す。内面は摩耗しており調整は不明である。胎土には2～3mmほどの大小不揃いな砂粒を多く含む。124は口縁部の1/6ほど残存し，口径9.2cmを測る。やや外反する口縁部であり，不明瞭であるが粘土を折り曲げて肥厚させており，端部は小さな面をなす。全体をナデ調整で仕上げ，口縁下部には列点文を施す。

石製品（Fig.32－125～127）

125は石鏃で完存する。全長4.0cm，全幅1.8cm，全厚0.5cmを測る大型の石鏃である。凹基式であり，鋭角的な先端部を有する二等辺三角形を呈す。石材はサヌカイトである。

126・127は磨製石包丁である。126は一部欠損するが全長は9.5cmほどになるものと考えられる。全幅4.4cm，全厚1.0cmを測る。湾曲部と直線部を有し，直線部を刃部とする片刃の石包丁であり，中央部の棟近くに孔を穿つ。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。石材は泥岩と考えられる。127は両端を欠損し，残存長9.6cm，全幅5.0cm，全厚1.0cmを測る。湾曲部と直線部を有し，直線部を刃

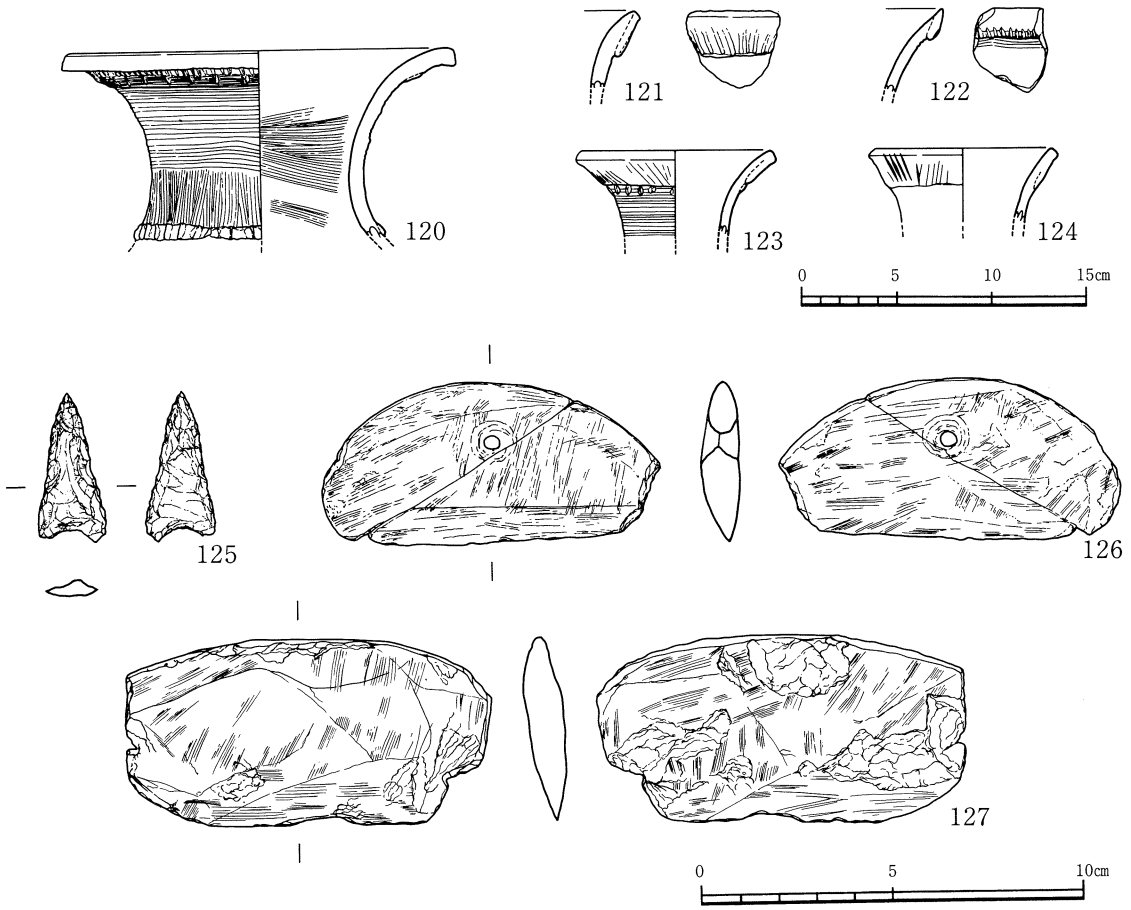


Fig.32　E区第Ⅲ層 出土遺物実測図

部とする片刃の石包丁で，無穴である。全体を研磨によって仕上げる。石材は泥岩と考えられる。

(7) F区の調査

調査第Ⅰ区の標高71.00m以下の緩斜面をF区として調査した。面積は約132m²である。第Ⅰ層と第Ⅱ層が堆積するのみで，遺物包含層はほとんど残っておらず，小さな平坦部はあるものの人為的な削平もみられなかった。標高66.00m以下はトレンチ調査（TR－6）のみに留めた。第Ⅱ層から約30点の弥生土器が出土したが細片のみであった。

3. 第Ⅱ区の調査 (Fig.33)

(1) 層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　褐色シルト層（10YR4/4）

第Ⅲ層　暗褐色シルト質砂層（10YR3/3）

第Ⅰ層は表土層で黒褐色を呈する腐葉土である。調査区全体に堆積し，厚さ50cm前後を測る。

第Ⅱ層は褐色シルト層であり，20cmほどの厚さで堆積し，やや西に傾斜する。

第Ⅲ層は暗褐色シルト質砂層で，20～40cmほどの厚さに堆積する。極く少量であるが，近現代の遺物を含む。第Ⅲ層の下は岩盤であった。

(2) 概要

平成10年度試掘調査におけるトレンチ調査で，第Ⅲ層上面に溝状の遺構を検出したが，遺物を伴わず，時期やその他の詳細は不明であったので，今回確認のために調査を行った。その結果，溝状遺構は，かなり湾曲しており人為的なものではない可能性も考えられ，遺物も第Ⅲ層と溝状遺構の境で出土した近現代のものと考えられる陶磁器細片2点のみであり，バーガ森北斜面遺跡の性格を考える上では重要でないと判断し，約80m²を調査して終了した。

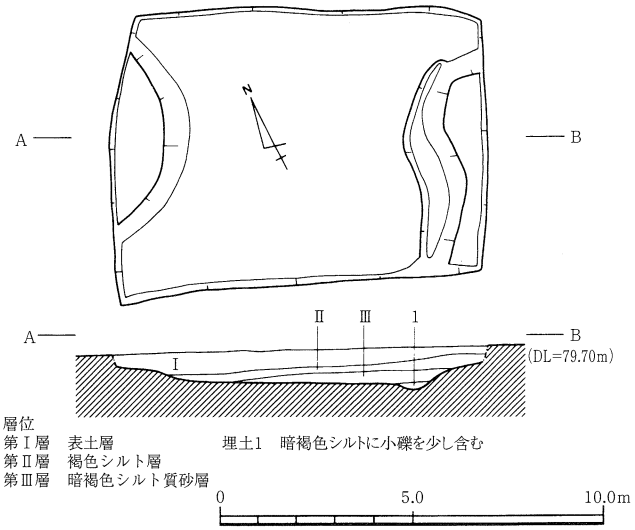


Fig.33　調査第Ⅱ区

第Ⅳ章　まとめ

1. 遺物について

今回の調査で出土した遺物は弥生土器約5,000点，石製品約200点を数える。遺存状況の良好なものは少なく，土器細片がそのほとんどを占める中で実測可能な遺物は127点であった（弥生土器96点）。底部等を除き器形の判別できるもの84点の中で壷66点（78.6%），甕8点（9.5%），高杯9点（10.7%），鉢1点（1.2%）を数える。壷については以下のように簡単な形態分類を行い，本遺跡で出土する弥生土器の特徴を把握したい。

壷

A類：広口壷であり，口縁部の形態で3タイプに細分する。

A−1類：外反の度合いの大きいものである。

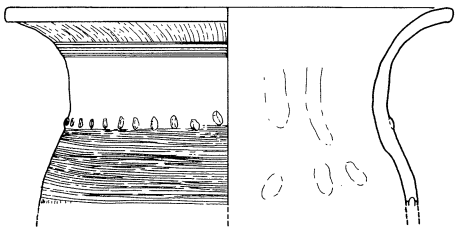
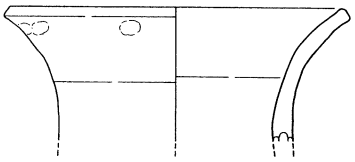
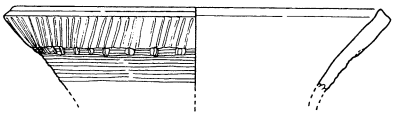
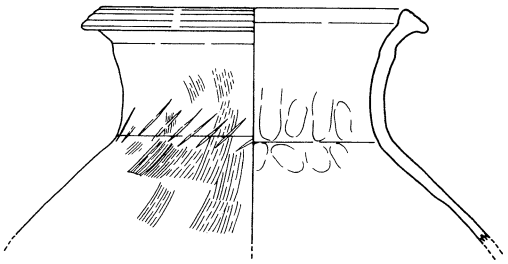
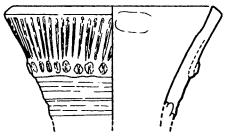
A−1		Fig.9−1·3, Fig.15−28·29·33～35 Fig.16−45, Fig.17−50～57 Fig.26−92·94·96～98 Fig.28−115, Fig.32−120
A−2		Fig.9−2, Fig.15−30～32 Fig.20−69, Fig.26−90·95
A−3		Fig.12−21, Fig.15−36 Fig.16−44·47 Fig.22−71～74
B		Fig.12−20 Fig.26−91·93
C		Fig.9−6, Fig.12−22, Fig.17−59 Fig.22−75·76, Fig.26−101～104 Fig.32−123·124

Fig.34　壷形態分類図

A－2類：比較的緩やかに外反するものである。
A－3類：大きく開く口縁部が，外上方にほぼ真直ぐ上がるものである。
B類：これも広口壷で，口縁端部に凹線文を施すものである。
C類：長頸壷である。

A－1類に属するものが23点と最も多く，そのうち口縁部に粘土帯を貼付するものが13点を数える。口縁部から頸部にかけて刻目，列点文，櫛描直線文，浮文等を組み合わせ加飾する。口縁部はラッパ状に大きく外反するものが多くみられる。A－2類の壷は7点を数え，2点が貼付口縁の土器である。刻目や櫛描直線文を施すが，それらを組み合わせるものは少ない。A－3類は7点であり，貼付口縁の土器は4点を数える。貼付した粘土帯が厚く，口縁下部に列点文を施すものが多い。B類の壷は3点のみであった。どれも口縁端部を上下に拡張しており，3～4条の凹線文を施している。緩やかに開く口縁部（91・93）とラッパ状に大きく開く口縁部（20）がある。C類は11点で，口縁部に粘土帯を貼付する土器が6点を数え，口縁部から頸部にかけて刻目，列点文，櫛描直線文，浮文等を組み合わせて加飾する。

甕

甕は形態分類できるほどの点数は出土していないが，大きく2種類には大別することができる。口縁部がやや長く，緩やかに外反するもの（Fig.9－8，Fig.15－38，Fig.26－105～107，Fig.30－119）と，口縁部がくの字状に外傾するもの（Fig.15－39，Fig.17－61）であり，前者には口縁部下端に刻目を施すものと頸部に沈線を施すものを1点ずつ含むが，壷のように複数の文様を合わせて文様帯を構成するものはみられない。また，貼付口縁土器3点を含む。後者には凹線文が施されている。61は凹線文の確認は困難であるものの，形態から凹線文が施されていたと考えるのが妥当であろう。

高杯

高杯は9点出土しているが，杯部のみのもの，脚台部のみのものに分かれ，全体的な形態が把握しづらい。脚台部のみ出土しているものは，底径20cmを越える大型のもの（Fig.9－11・12，Fig.22－81）と，底径9～12cmを測るもの（Fig.15－41，Fig.17－65，Fig.22－82）がある。但し，前者3点は内外面の特徴から同一個体である可能性も否定できない。9点すべて裾部付近には凹線文を施している。また，外面の文様は鋭い金属原体によるものと考えられる。杯部のみが出土しているものは3点（Fig.16－49，Fig.22－80，Fig.26－110）であり，どれも体部に稜をもって上がるものである。80と110は凹線文の位置や，外面にヘラ磨きを施す点など類似する部分がみられる。

鉢

鉢は1点（Fig.22－79）のみ出土している。体部に稜を有し，口縁部が短くくの字状に外傾する。

今回出土した土器は，上記のような特徴を持つものの中で，壷A－1類，A－3類，C類等が多く

出土している。これらは櫛描直線文をはじめとし，列点文，浮文等を複雑に組み合わせ，文様帯を構成している加飾性の強い土器群で，口縁部に粘土帯を貼付するものが半数を超える。特にA－1類は本遺跡で出土する土器の最も典型的なタイプである。大きく開く口縁部は，個体によっては水平近くにまで反り，最大径を口縁部に有すものも数点存在する。貼付した粘土帯は厚く，口縁下部には刻目や列点文，頸部から肩部にかけては櫛描直線文を施し，櫛描文の上部または下部に浮文を配するものが多くみられる。C類も本遺跡では多く出土している。これも口縁部に粘土帯を貼付するものが半数を超えるが，貼付している粘土帯は比較的薄く，口縁下部には列点文を，頸部には櫛描直線文を施すものがみられる。口縁端部付近に浮文を配するものもみられる。ちなみに今回出土した土器の文様構成を見てみると，細片を含め文様の判別可能なもの約300点のうち，櫛描直線文を施すものが234点，凹線文を施すもの20点，列点文を施すものが41点，口縁部に刻目を施すものが55点，浮文を配すものが62点であった（重複有り）。浮文には円形浮文，中央を摘んだ楕円形の浮文等があるが，中央を竹管で刺突した吸盤状の円形浮文が最も多くみられた。これらを実測遺物の中で見てみると，土器96点のうち，櫛描直線文34点，凹線文12点，列点文18点，刻目24点，浮文25点であり（重複有り），底部破片を除くと無文のものは数点であった。凹線文の12点を除くほとんどの土器に複数の文様を組み合わせて施している。以上の傾向は第1次調査で出土した遺物でも，ほぼ同様のことが言える。また，本遺跡で出土する土器の中心は貼付口縁を持つもので，若干の凹線文を施す土器が共伴することは以前から知られている。今回の調査で出土した点数を記しておくと，細片も含め貼付口縁の土器は61点（壷・甕類のみ），凹線文を施す土器は20点（壷・甕類11点，高杯9点）であった。

2. 遺構について

今回の調査で検出できた遺構は，竪穴住居址1軒，土坑4基，段状遺構3ヶ所であった。竪穴住居址は緩やかな斜面部に形成され片方に40～50㎝ほどの壁面を有し，もう片方には壁面を持たない住居で，長径約5m，短径約4mを測る楕円形のものである。本遺跡で確認された竪穴住居址では6軒目に当たる。そのうち第1次調査で確認した2軒の竪穴住居址は半分ほどが削平されており，その全容は掴めないが，学術調査時に三世庵周辺で確認された3軒のうち，完掘された2軒と今回確認したST－1は形態的にも類似しており，ほぼ同時期に存在した可能性が考えられる。なお，「北斜面は日当たり等も不良で居住には不向きである。」とも言われるが，今回冬期の発掘調査を終えて，竪穴住居址周辺の日当たりを確認できた。A区の平坦部は南の斜面部から北に広く突出しており，ある程度木を伐採した段階で，冬至の午前10：30に平坦部の2/3ほどに日光が当たる。三世庵周辺も類似した地形であり，日当たりに関しては南斜面ほど良好ではなくとも，ある程度は確保できる。

段状遺構は3ヵ所確認しており，傾斜の緩い部分を断面L字状にカットし，等高線に沿って細長い一定の平坦面を築成している。規模は段状遺構1が14.2m×4.5m，面積約53㎡，段状遺構2が16.4m×3.2m，面積約40㎡，段状遺構3が17.4m×2.1m，面積約32㎡を測る。どの面も遺構検出面に当たる所は部分的に褐色礫質砂層も堆積するものの，すでに岩盤がかなり広く露出しており，地山部分も含めてカットし築成したものと考えられる。ちなみに，本遺跡の地山は川原石等で叩けば簡単

に崩れる風化した脆い岩盤であり，多大な労力を払わなくても地山を崩すことは可能であると考える。確認できた段状遺構はそれぞれ面積もかなり広く，段状遺構1・2には柵列も伴っており，何らかの施設として利用されたものであろう。高地性集落の住居址直下に確認される段状遺構については，住居の付帯施設とみなす例もあるが，今回確認したものは，ST－1に最も近い段状遺構1でも約4.5mの標高差があり，住居に関連する施設とは考えにくく，独立施設として機能していたものと考えられる。また，第1次調査においても，傾斜の緩い部分に等高線に沿った細長い平坦面（Ⅰ－A区～D区）を確認していた。但しピット等も伴わず人為的な成形跡とする決め手には欠けてはいた。しかし，遺物包含層もしっかり残っており出土遺物も多数を数えたことや，撹乱等を受けた形跡はないこと，また第2次調査によって，菖蒲谷を挟んで200mほどしか離れてない地点に同様の地形を確認したことなどから，第1次調査のⅠ－B区・C区も段状遺構と認識できるものと考える。

2次にわたる緊急発掘調査を経て，菖蒲谷を中心にちょうど対称の位置となる南東斜面に段状遺構，南西斜面に住居址と段状遺構を検出することができた。学術調査で菖蒲谷の西に確認された住居址も含め，これらの遺構群は菖蒲谷の谷水田を経営する人々が弥生中期末の一時期に形成した小集落である。これらが確認された標高50～90mの地点は，それぞれ北に突出しており，その地理的条件から見張りや防塞に有利な地点と言える。また投弾と考えられる川原石や大型の石鏃など武器的遺物も少量ながら出土しており，弥生時代中期末という時期も合わせて考えると，本遺跡を軍事的要素から切り離して評価することはできない。しかし，本遺跡に集落が形成された第一義的な要素は，豊富な湧水を始め，谷水田の経営を可能とする諸条件を備えていたことであり，あくまでも軍事的要素は第二義的なものであると考えられる。

参考文献

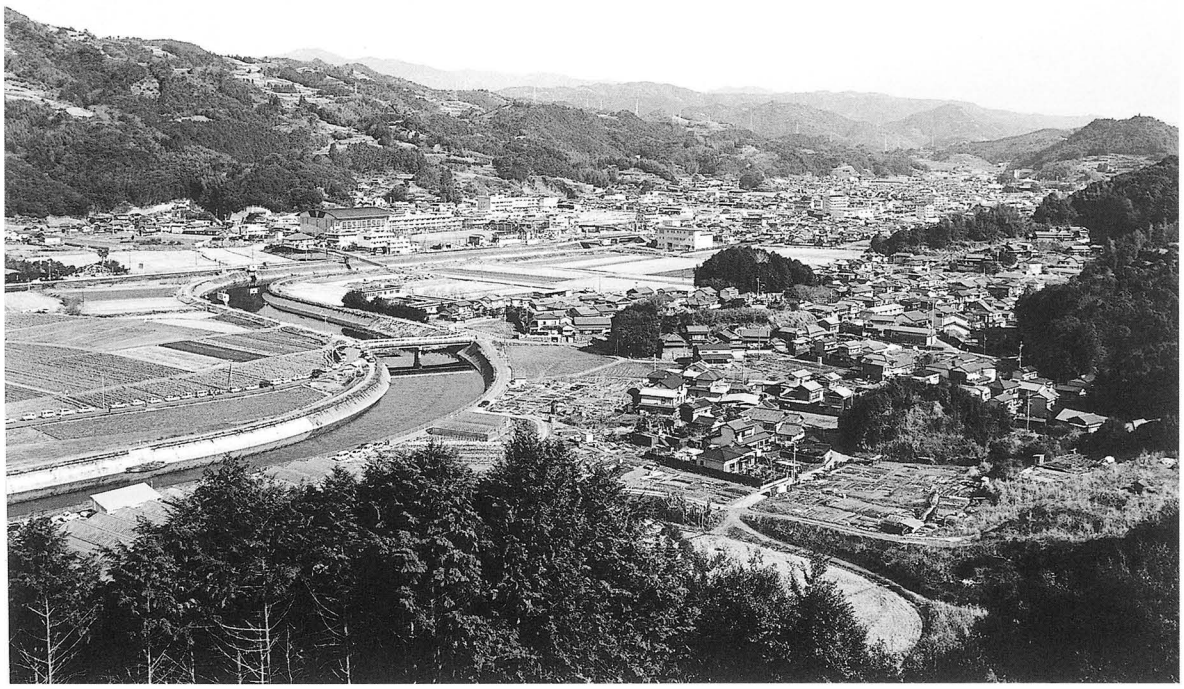
岡本健児　「神西式土文化の再検討」『高知女子大紀要　人文・社会科学編　第20巻』1971.12
岡本健児　『日本の古代遺跡39　高知』保育社　1989.4
岡本健児　「考古編」『伊野町史』伊野町教育委員会1973.11
正岡睦夫　「凹線紋・擬凹線紋」『弥生文化の研究　第3巻』　1997.4
森岡秀人　「高地性集落」『弥生文化の研究　第7巻』　1997.6
『バーガ森北斜面遺跡』伊野町教育委員会　1999.3

写　真　図　版

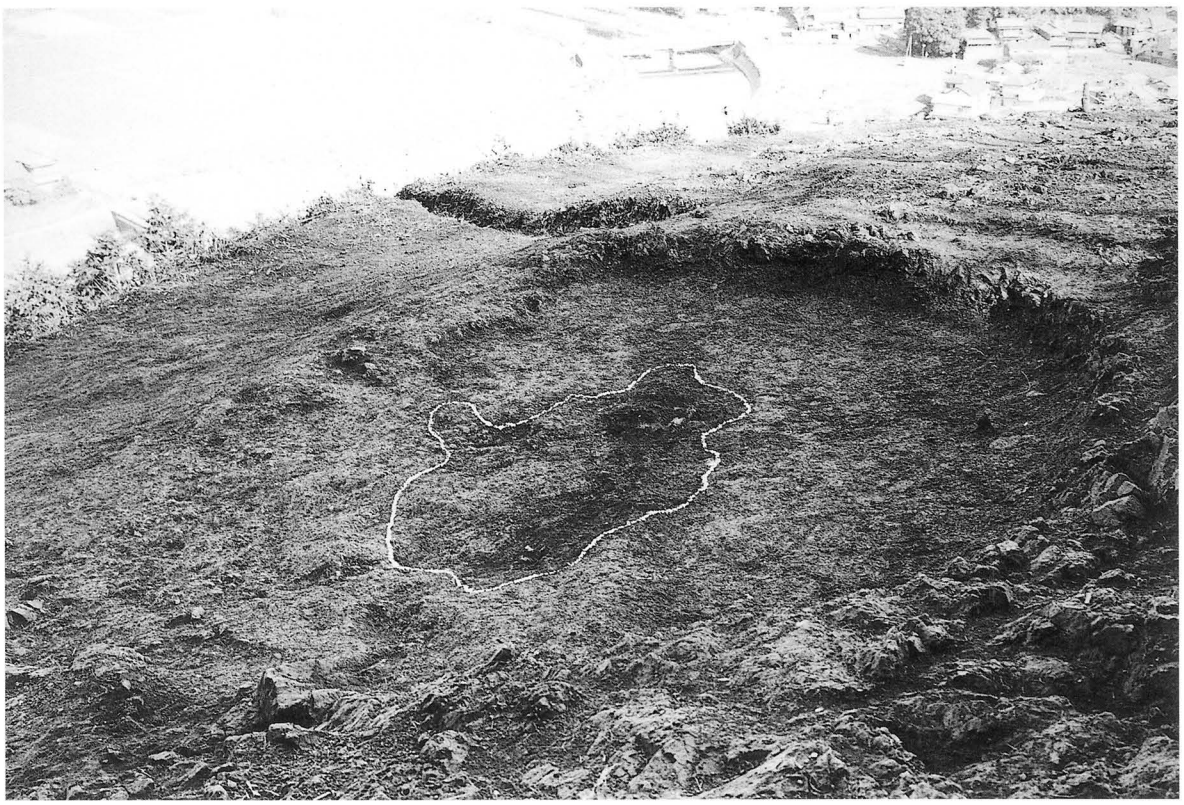
遺跡遠景（東より）

菖蒲谷（北より）

A区より仁淀川方面を望む（東より）



A区より枝川方面を望む（西より）



ST－１炭化物検出状態（南より）

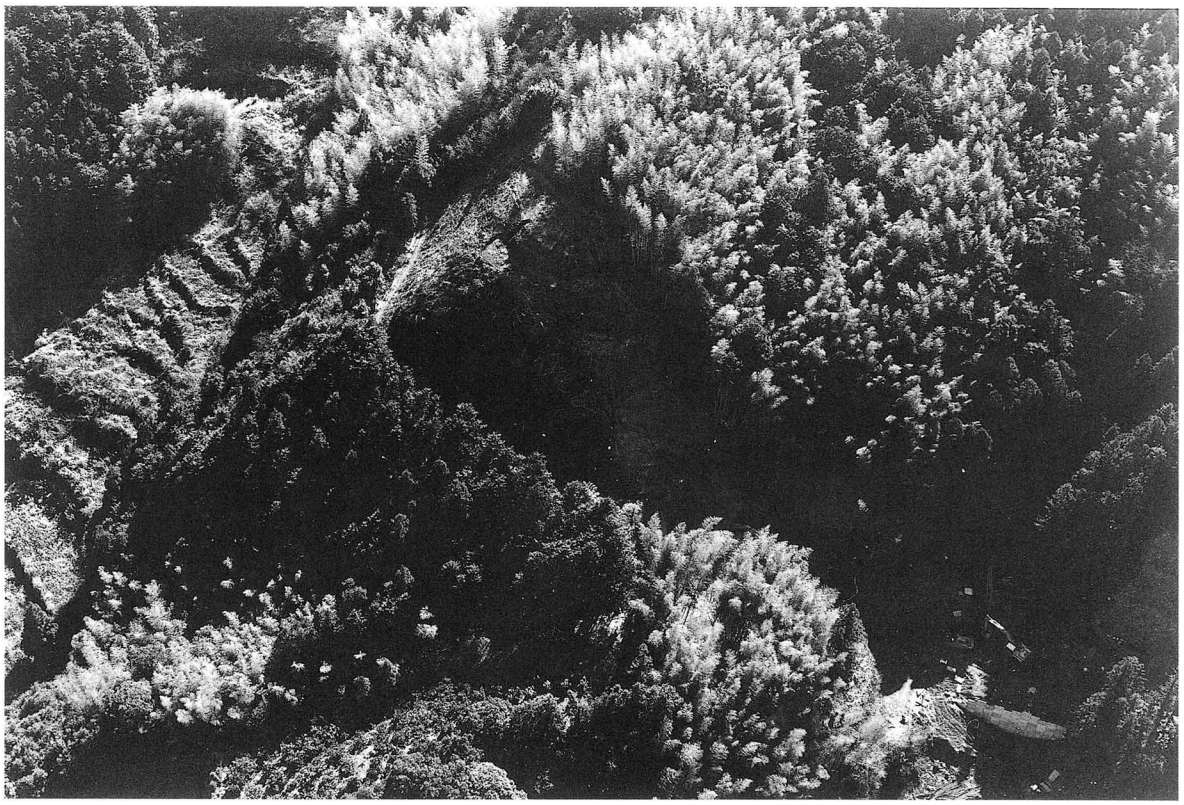
ST－１完掘状態（南より）

B区完掘状態（西より）

C区（段状遺構１）完掘状態（南より）

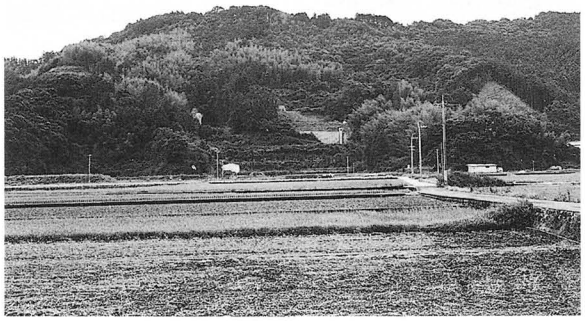
D区（段状遺構２）完掘状態（南東より）

E区（段状遺構３）完掘状態（南より）



完掘状態（航空撮影：北西より）

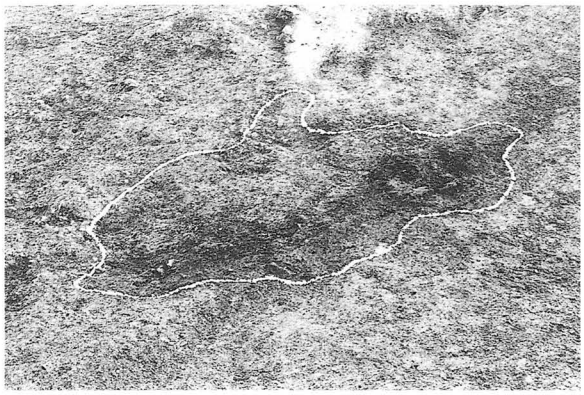
完掘状態（航空撮影：北より）



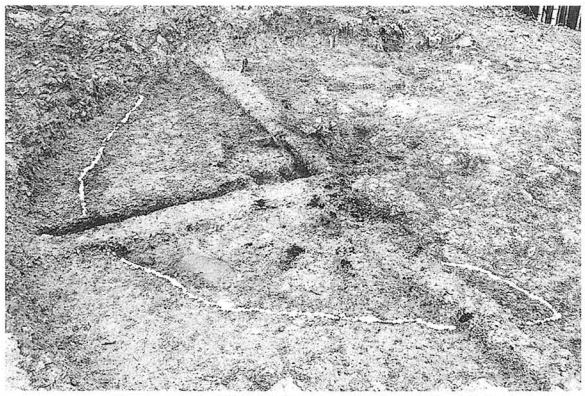
遠景

A区調査前風景（西より）

ST－1炭化物検出状態（南より）



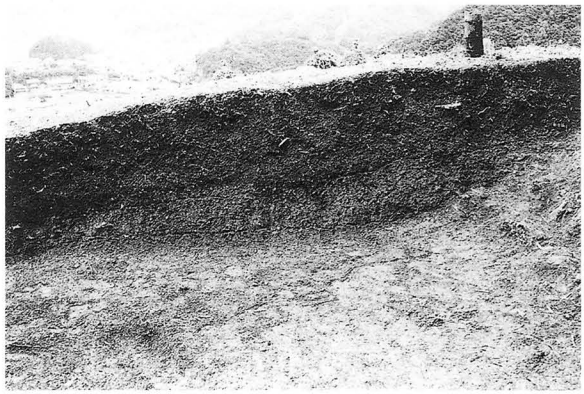
ST－1炭化物検出状態（南より）



ST－1ベット状遺構検出状態（北東より）

SK－1完掘状態（東より）

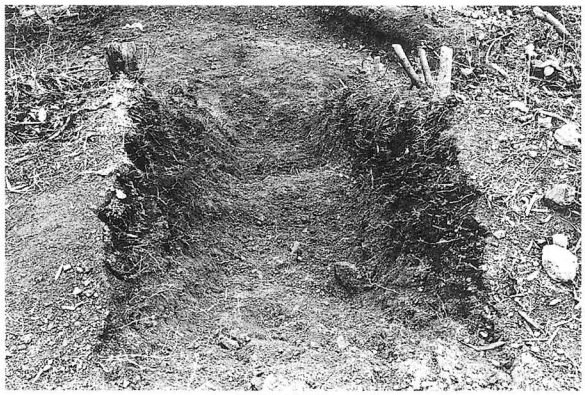
ST－1完掘状態（東より）



A区南バンク南壁

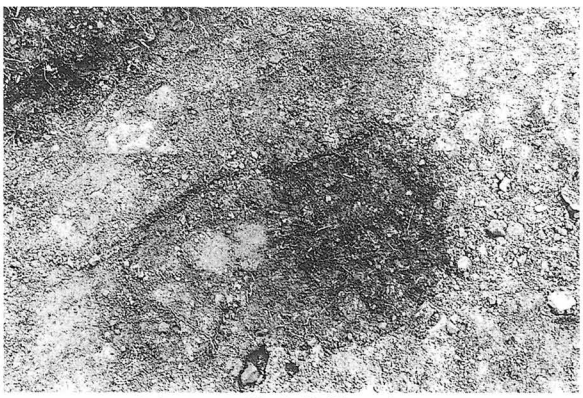
A区完掘状態（西より）

B区完掘状態（南より）

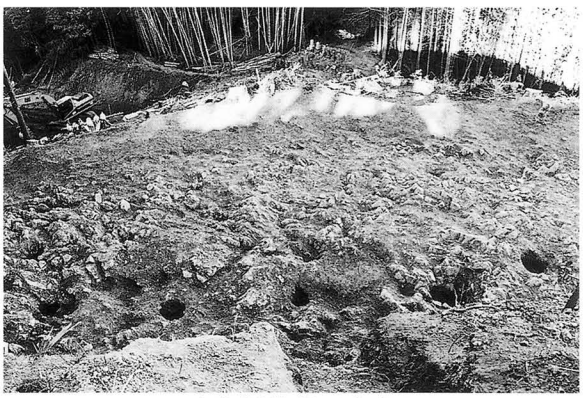


TR－1完掘状態（南より）

TR－3完掘状態（北より）



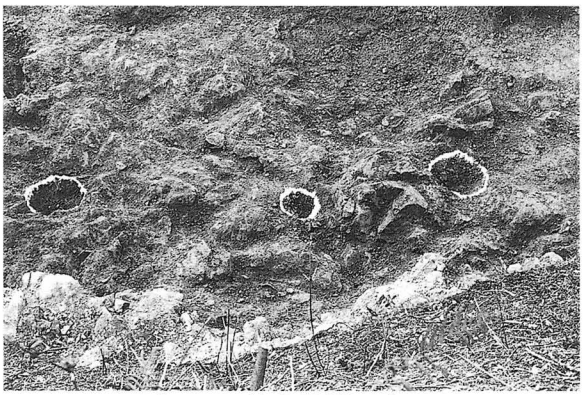
C区ピット検出状態（南より）



SA－1完掘状態（南東より）

C区完掘状態（南より）

C区南壁セクション（北より）



D区ピット検出状態（南より）

D区完掘状態（南西より）

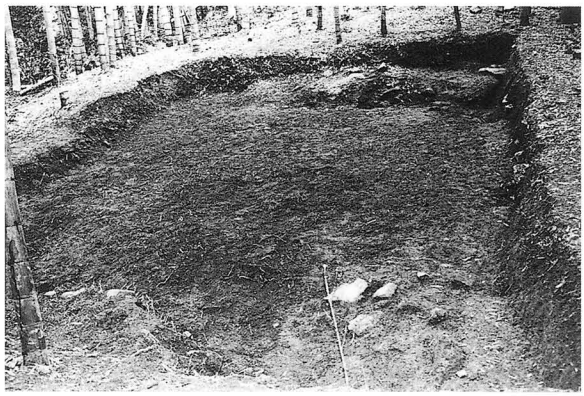
TR－5北壁セクション（南より）

TR－5完掘状態（西より）

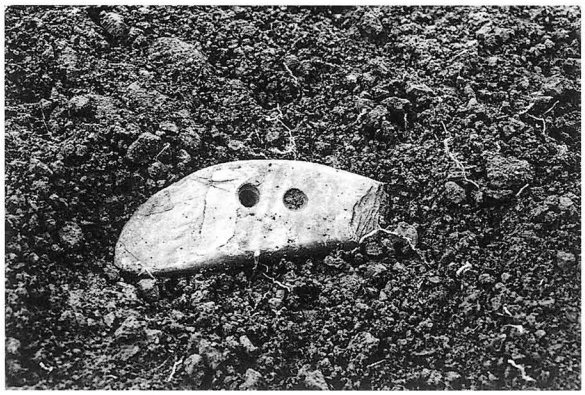
F区北壁セクション（南より）

F区南壁セクション（北より）

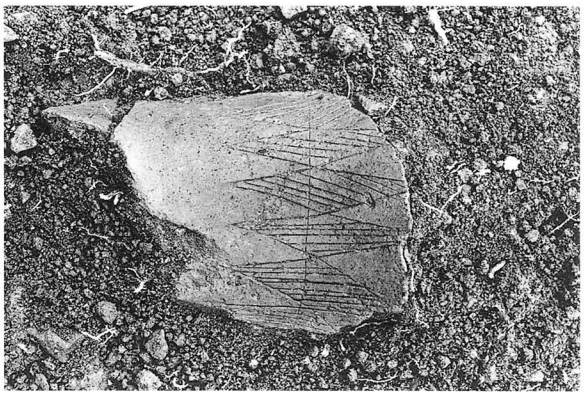
TR－6完掘状態（南より）



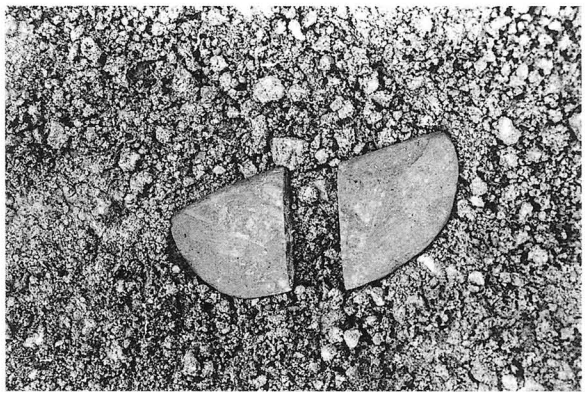
G区完掘状態（東より）



A区第Ⅲ層石包丁（16）出土状態



A区第Ⅲ層弥生土器（11）出土状態



B区第Ⅲ層石包丁（66）出土状態

B区SK－2弥生土器（69・70）出土状態

C区第Ⅲ層弥生土器（75）出土状態

D区第Ⅲ層弥生土器・叩石出土状態

D区SK－3弥生土器（115）出土状態

E区第Ⅲ層石鏃（125）出土状態

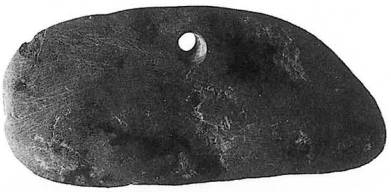
13

14

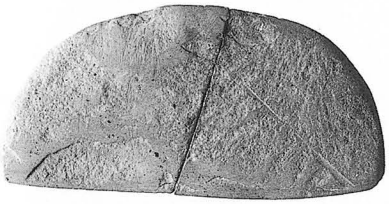
125

石鏃

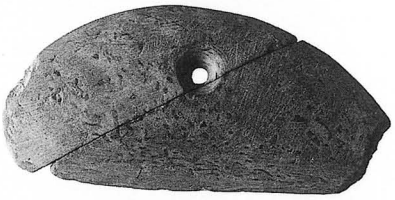
16



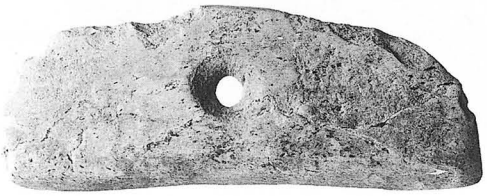
112



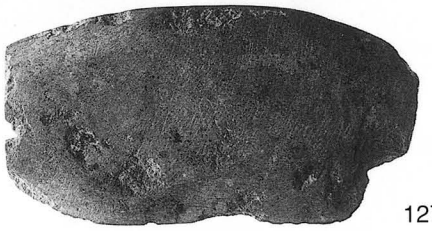
66



126



111



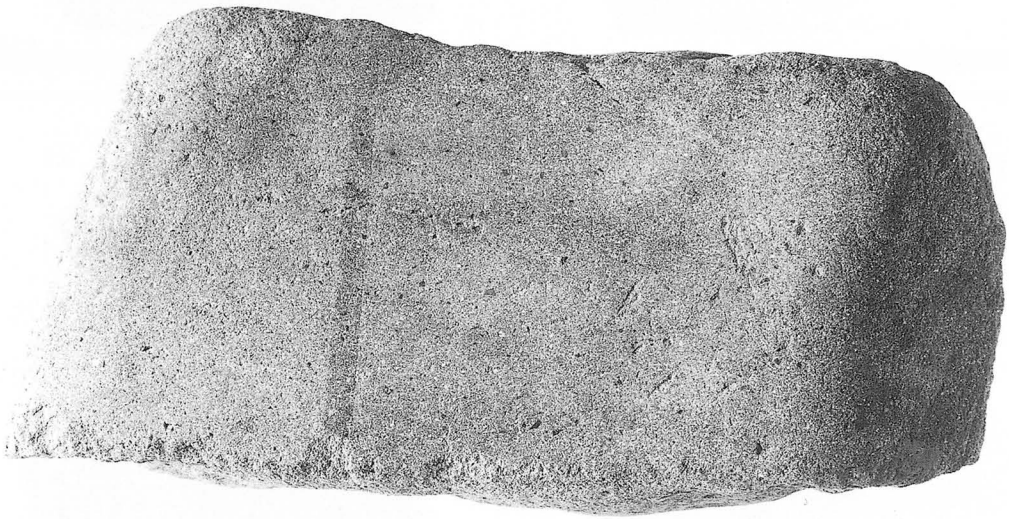
127

石包丁

83

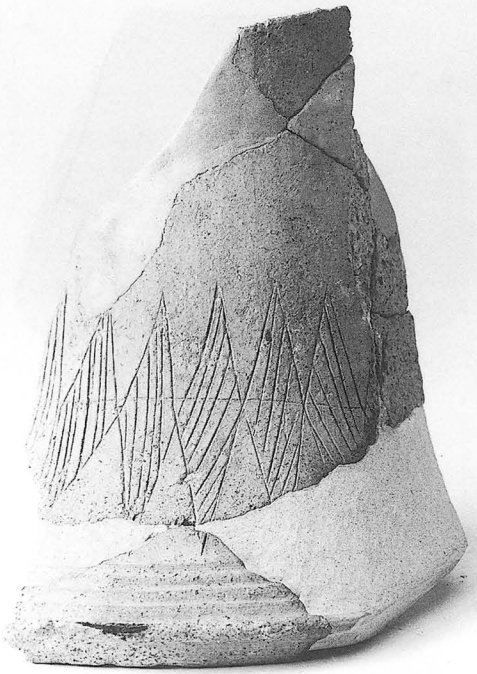
114

石斧



26

砥石



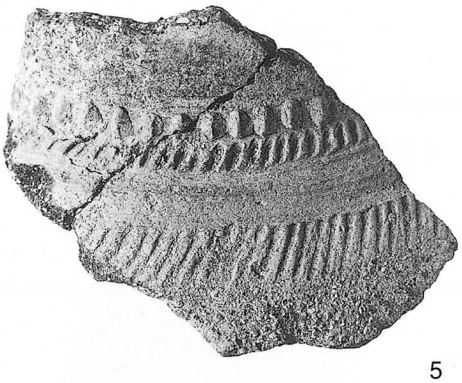
11

41

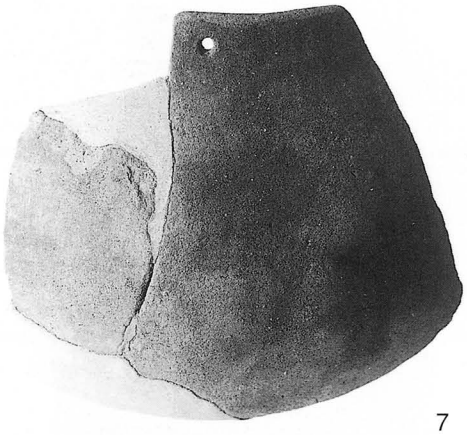
59

75

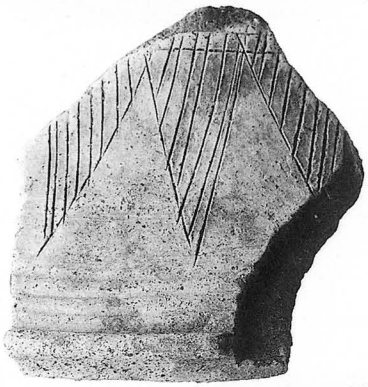
弥生土器（壷・高杯）



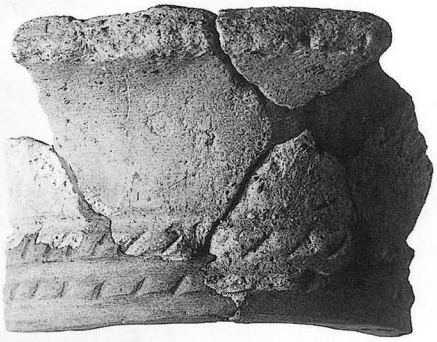
5



7

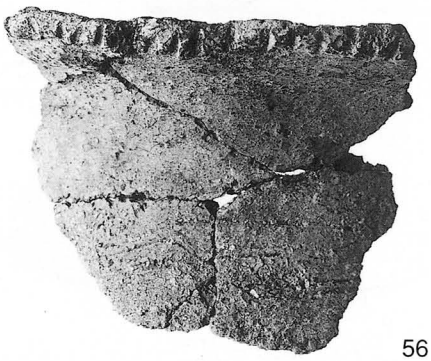


12



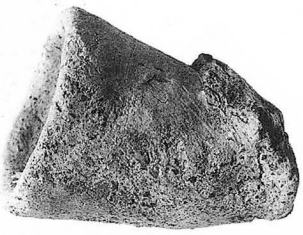
30

51

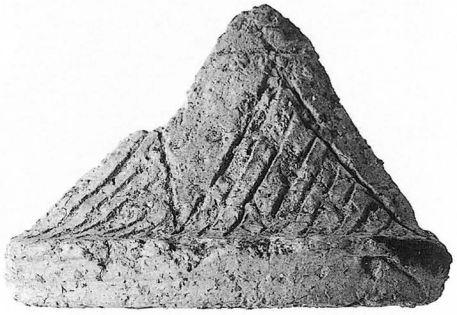


56

弥生土器（壷・高杯）



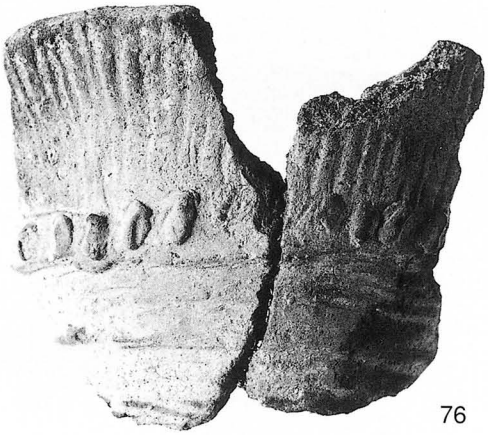
60



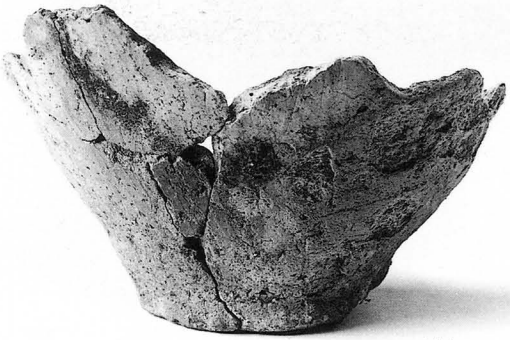
65

70

72



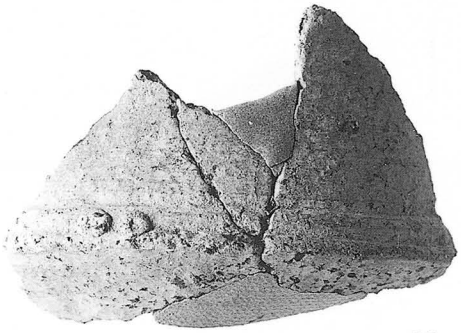
76



77

弥生土器（壷・高杯）

79



80

82

90

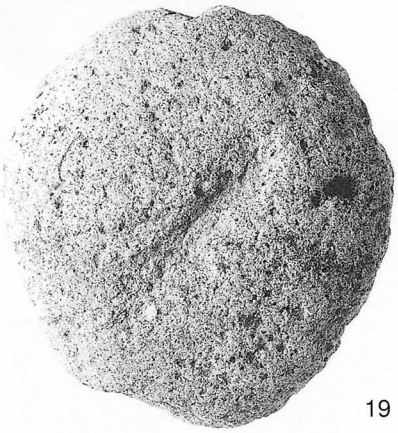
92

101

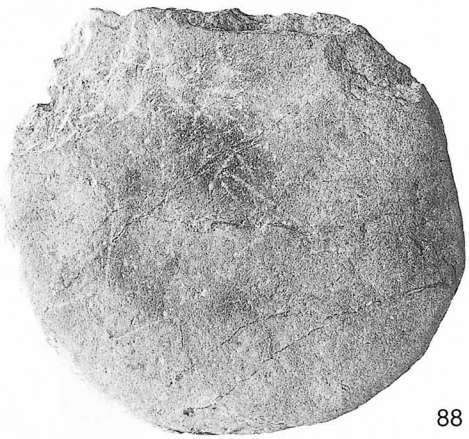
弥生土器（壷・高杯・鉢）

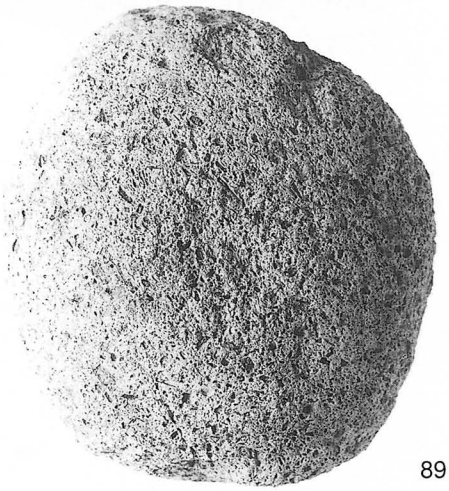
115

120

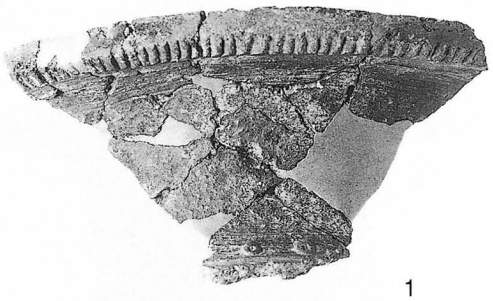

19

24

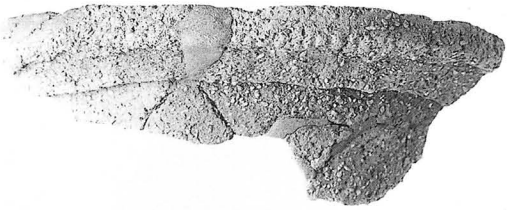

88

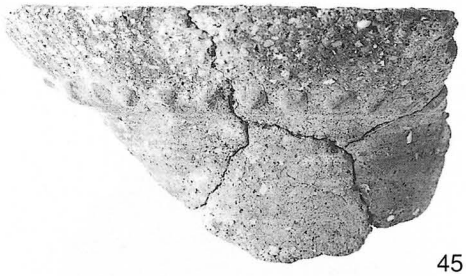

89

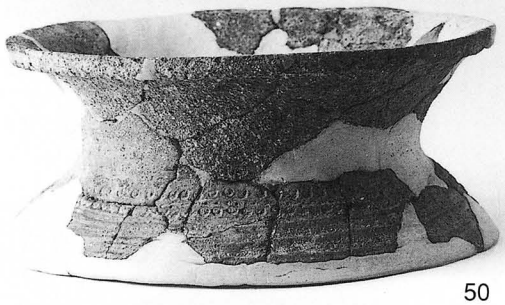
弥生土器（壺）・石製品

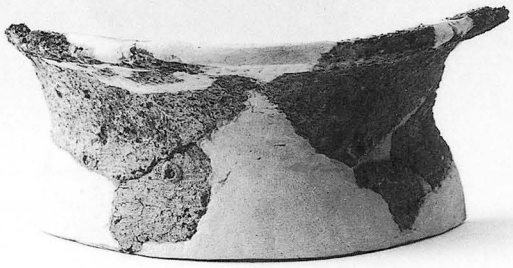

1

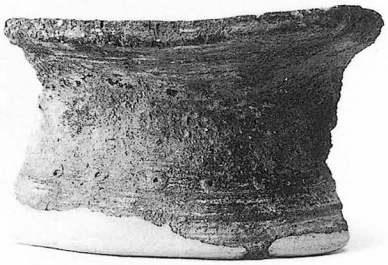
28

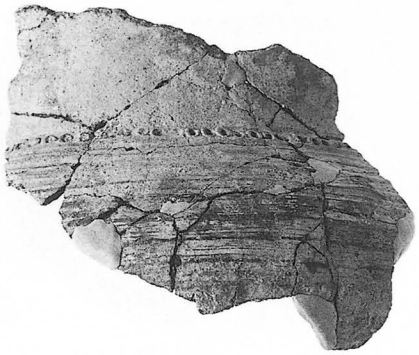

29


45


50


52


53

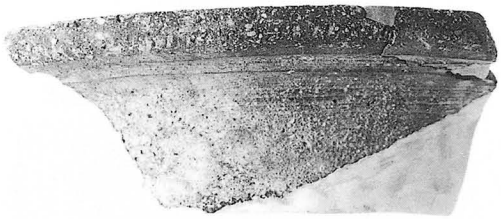

58

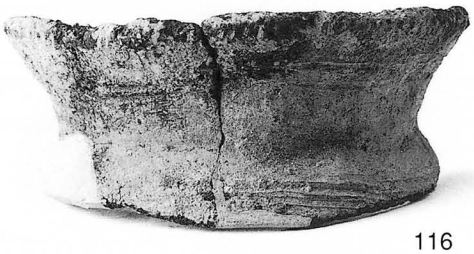
弥生土器（壷）

62

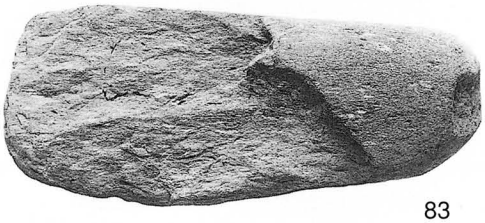
69

91


94

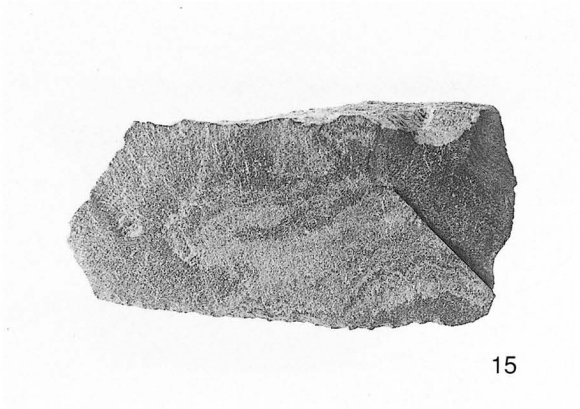

116

118


83

114

弥生土器（壷）・石斧

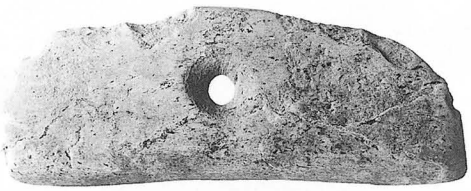


15

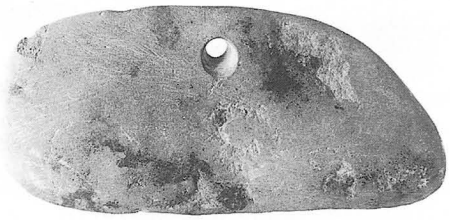
16

66

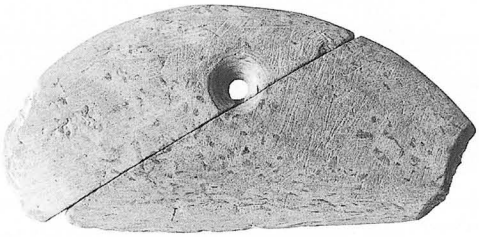
67



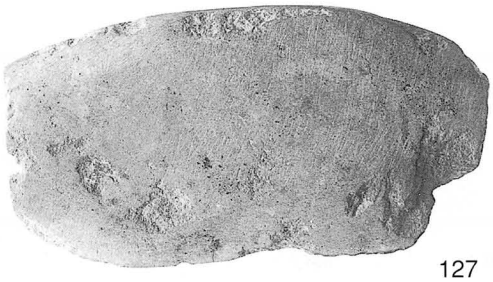
111



112



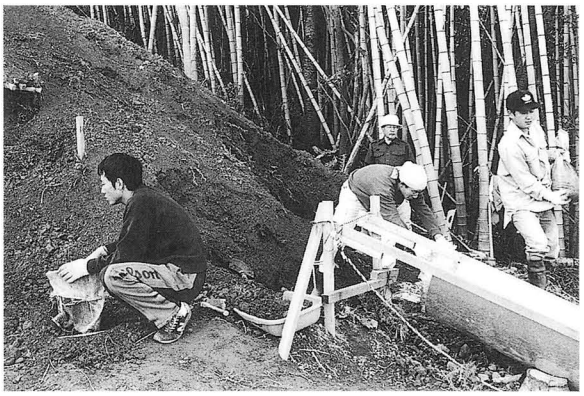
126



127

石包丁

発掘作業に携わった方々



現場作業風景

報告書抄録

ふりがな	ばーがもりきたしゃめんいせき
書名	バーガ森北斜面遺跡Ⅱ
副書名	伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	伊藤　強
編集機関	伊野町教育委員会
所在地	伊野町3597番地
発行年月日	西暦2001年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
バーガ森 北斜面遺跡	〒781-2100 高知県吾川郡 伊野町 字バーガ森	39381	320026	33度 32分 40秒	133度 26分 30秒	1999.10.14 ～ 2001.1.31	758㎡	伊野町南地区 基幹農道 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項
バーガ森 北斜面遺跡	集落跡	弥生	竪穴住居 1 土坑　4 段状遺構 3 柵列　2	弥生土器 石製品	弥生時代中期末の 高地性集落に伴う 竪穴住居及び、 段状遺構を確認

伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

バーガ森北斜面遺跡Ⅱ

－伊野町南地区基幹農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

２００１．２

発　行　高知県伊野町教育委員会
高知県吾川郡伊野町3597
TEL 088-893-1922

印　刷　有限会社　大国印刷所
吾川郡伊野町駅南町28
TEL 088-892-0086